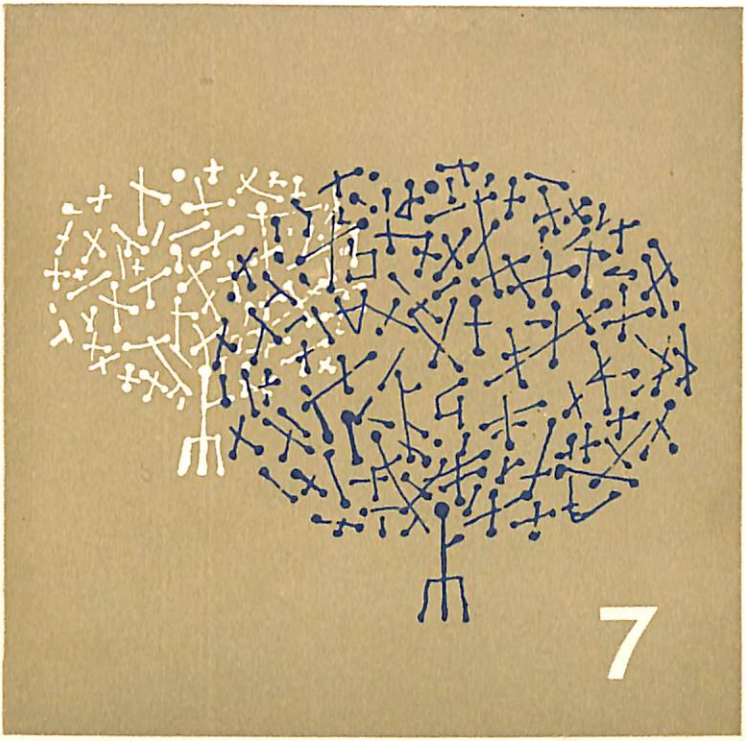
保存用

る・くーる



都立松原高校図書館蔵書

都立松原高等学校

る・くーる

目次

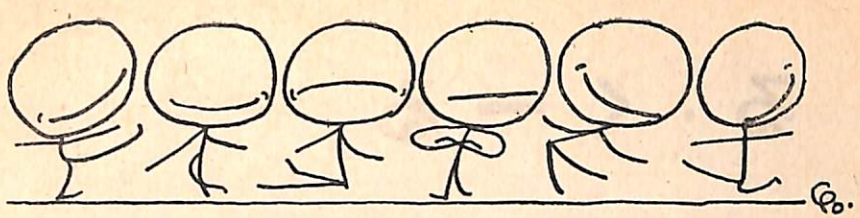
巻頭言……校長　中村一勇　4

詩

卒業……一年　中村悦子…5
青春……一年　犬飼治…5
懐かしいもの……三年　住川節子…6
くちなし……一年　大塚洋子…7
世界一おどけ者のひとり言……三年　白石雅紀…8
回想……教諭　菅原真静…11
山行……二年　村光二…11
異常者の話……三年　吉川幸男…12
幸福の中の夢……二年　成田良行…15
矛盾……三年　下井洋一…15
変遷……二年　酒井惇子…16
川……一年　矢田秀子…17
遠い所へ……三年　岸本宏…17

随想

ある友人のこと……二年　村西一郎…22
私と愛犬……教諭　大和久鈴江…25
電車通学……一年　小林純江…27
読んだ後でバカバカしくなります……一年　熊谷直彦…28



思うままに……二年　渡辺静枝…31
断想……三年　仲内典子…34
愛すべきはママ先生……三年　長尾幸子…35
偶感……三年　小川和子…37
美しい人に……三年　小長光和子…38
断想……三年　滝沢由美子…39
社会に出るに当って……三年　田中春美…39

論文

吾々と思想……三年　大越捷夫…40

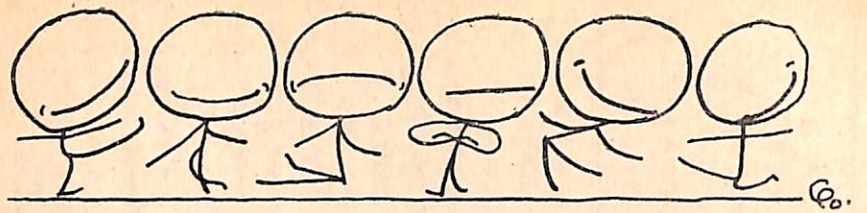
詩

十七才のモノローグ……三年　荒川弘悦…43

創作

親愛なるママへ……一年　栗田節子…52
私は絶対へ旅立った……二年　山本喜浩…53
これからだ……三年　岸本弘…56
若人の群れ……三年　渡部斉…69
無……三年　吉川幸男…85

クラブ紹介……98
卒業生に一言……104
新入生へ……105
編集後記……106
（表紙）…一年　川上和加乃



巻頭言

「る・くーる」に寄せて

学校長　中村一勇

今年も亦明けて、既に二月も末になろうとしている。内外の極めてきびしい困難な年に当って、学校としても十周年を明年に控え、盛衰の岐路の年といえるであろう。全校生徒職員の反省と決意とを求めてやまないのである。

「る・くーる」も年と共に成長をつづけて、内容に於いても相当見るべきものが出来るようになったことは、誠に喜びにたえないところである。「る・くーる」はどこまでも全生徒職員のものでなければならぬ。毎日の生活からにじみ出た、生々しい多数の作品で紙面を埋めることが望ましいのである。思索・創作・論説・評論・詩歌・小説等、多種多様なものが、生徒職員の叫びとして紙上を飾る時「る・くーる」は心の故里として、全生徒の愛情を集めるであろう。その意味から私も近く巣立ってゆく卒業生のために、感想の一端を述べたいと思う。

卒業生は誰もが、あれからもう三年になるのかと今更のように、懐旧の情がよみがえってくるであろう。歩いてきた三年の道、卒業間近に控えた現実、更に卒業後の自分の行先など、思い合わせて心中誠におだやかならぬものが往来するであろう。悲しさ苦しさ、嬉しさ、大きな夢等入り乱れて、心の平静がややもすれば失われ勝ちではあるまいか。

私は生来過去については、余り関心を払いたくない人間であった。過去の追憶に浸ることは、特に青年時代は将来の飛躍をはばむもの位に考えていたが、今でも変りない。自分がその時時に、最善の努力を払っているならば、仮りに失敗しても自分の思慮の足りなさを思うだけで、別に失望も落胆もしなかった。言わば天命に従ったというのであろう。

要は、歩いてきた過去の全体から築かれた現実と、この現実を土台とした未来に対して如何にすべきであるかが、生徒に取って何時でも、最も重大な課題でなければならない。深い思索と創造によって、自分にとって最善の道を選ばねばならぬ。こう考えると、卒業生の進むべき道は独自で創造すべきで雷同すべきではない。併しこの道は、自分の確信のために、両親や旧師や旧友の意見を叩いてみることが必要で、不幸意見は不一致であっても最後の決断は自己にあって所謂、人生の開拓は自己であって他人ではないことを知らねばならぬ。幸にして自分の道が夫々の人々の賛同を得るならば、その道こそ諸君の前途に光明を与え猪突猛進の勇気も湧いてくるであろう。その時からこそ、生命をかけて競争心の精進がはじまるのである。長い人生は誠心を傾けて、目標を目指して刻々に努力精進することではあるまいか。そこから人生の真の歓喜も生れるであろう。人生の幸福を目前の喜怒哀楽にあるとする人々には、人間の価値についての哲学的思索が不足しているというより他ない。

三四・二・二六

詩

卒業

一年　中村悦子

とおい北国のつららの中から
とじこめられていた夢が流れだしたのか
やわらかく雲が行く

りんりんと斬りつける
剣のような風を受けて
きさらぎはじっと
歯をくいしばり耐えてきたが
いま、雲を仰いで
忘れていたほほえみをとりもどす
その口もとから梅の蕾がほころびる

やがて枝ごとの花が空をかざり
新しい門出の若人の瞳にうつる
おのもおのもの瞳に

おのもおのもの道が一すじ輝く
みどりの星座につらなる道が——
ああ　耳をすますと聞えてくる
透きとおった鈴の音が
心の奥の底から
人の世の
魂から魂へこだまするように

若人は決意する
いのちのかぎりこの鈴を離すまいと
若人はまさに門出す
嵐も光もひそむ地平のかなたへ

青春

一年　犬飼治

二つの蝶よ　何処に飛び去るのか
どうして私の前にいてくれないのだ
あの清らかなばらも咲きいるではないか
お前の好きな菜の花もあるじゃないか
向うの花畑には沢山の花もあるのに
そして甘い〈蜜もあるだろう
どうして止ってすわらないのか

何も見むきもせずに行く
唯、その上をさまよい歩くだけだ
あのバラには棘があるからだろうか
きよらかな気高さのためなのか
それとも花が嫌いなのか!!

あゝそうか!!
おまえ達は二つの若い蝶だつたのか
二つの蝶は、彼等の青春を謳歌しているのだ
新天地を求めて
何処となく飛び去るのだ
舞い上れ、そして高く飛べ
この世のけがれより離脱せよ
助け合いつつ、一すじに行け!
途中でくじける事なく
いかに美しき花園があろうとも
決して休むな、はげまし合え
やがては見える新天地を
幸福のある事を信じて
行け!まつしぐらに
二つの若き蝶々よ

私は何時までも何時までも
お前達を見つめていよう

そして祈ってあげよう。

懐かしいもの

三年　住川節子

——消しごむ——
肌のあれた丸いやつ
ねずみ色の悲しいやつ
手に握るとかたい
ギュッと握っても冷たい
どうしてくれよう
一人でぽつんとしている
小さいやつ
嘗めてもつまらない味
傷つけてもなかない
役たゝず、役たゝず
それでも
かわいいやつよ……
体をこすって、暖ったためてあげよね

——ぬかるみ——
ぬかるみで　ぬかるみで

お前は何してる　下向いて何してる
不思議だよ、知らないか
指の間から、ぬるり　ぬるり
きれいなどろんこが
とろり　とろり
ぷっと吹くとへこむ
なまあったかい、なまぬるい
ぞっとするよ　知らないか
空がうつる
月がうつる
日がひかる
足で蹴っとばすと
こわれるよ、とびちるよ
鼻の上までとびちるよ
そうか　そうか、ぬかるみで
たのしいか、とろりかとろり

——棕櫚の花——
棕櫚の花の黄のにがさよ
がさつな冷たいお姫さま
かたい扇であおがせる……
川の横で　木の陰で
しづかな昼に……
「食べないとつねるぞ」
そこで泣きながら

食べた　食べた
泣きながら
にがい　にがい
つねり小僧がにくらしい

くちなし

一年　大塚洋子

〃くちなしって何だい〃
〃白い花さ〃
〃きれいかい〃
〃それはきれいさ〃
〃君は好きなの〃
〃勿論だよ〃
〃なぜ〃
〃誰かに似ているからだよ〃
〃君、その人好き〃
〃すきだつたよ〃
〃その人どうしたの〃
〃死んでしまつたよ〃
そんなものなのさ　人の運命なんて
そんなものなのさ　人の死なんて

世界一おどけ者のひとり言

三年　白石雅紀

1

まず　俺の
お面ときたひにゃ大道ピエロ
誰もが振りかえりながら
眉よせて笑います
俺が　真面目に真面目に
いっくらすましても笑われるので
腹を立ててにらみつけてみたら
地べたにひっつきながら
前よりもよく笑うんです
この俺の
どこがそんなにおかしいんだろう？
　ペッ　くそくらえ

2

ある日、俺は
床屋に行って髪を整えたり
お風呂屋に行って身体を清めて
一張羅の晴着でサテ、でいととしやれこんだ
でも　時間がどんどん過ぎても
愛しの彼女は現われないので
どこか　そこいらへんをちょっと歩いてみたら
彼女は　おヒゲの
立派な紳士とお楽しみ
そこで俺は
次の女とデイトしてみたら
やっぱり彼女も……
俺はどうすりやいいんだい？
　ペッ　くそくらえ

3

まだ
俺が若くてピンピンしてた頃
こんな俺にだって一応
気のおけない人のいたことがあったんだが
そいつに欺かれちやった！
でも
俺はちっとも悲しくなかった
だましたり
だまされたり
これが人間だもの……
ただ

無知な自分が悪かったんだもの
サトって、から
俺もずいぶんやっつけた
ちょっとうまいことというと
どんなにお高い奴だって
いちころりんだ
そこで　いいとこまでいくと
俺はそいつに云ってやるんだ
俺を信じたお前は馬鹿だ
俺を頼ったお前はアホだ
この時の奴は
たいてい　ちょっとした喜劇を演じるけど
しばらく経つと　奴必ず
この俺と
同じことを誰かにやったね！
これが人間さ
　人間なんだ
　ヘン　アホかいな

4

さて
ある日の俺は
青春を謳歌しながら
町を歩きながら
きれいな女の子にウインク贈る
でも　俺の捕えることのできるものは
愛しい彼女のハートなんかじゃなくて
いつもきまってマボロシばっか
あんときから彼女の瞳が目先にあって
夜になってもろくろく寝られやしない
思い余って
心のアリッタケをぶちまけた手紙を
彼女につきつけてみたが
どんな彼女からも
凶、だとよ！
そこで、俺はまたきまっていつも
俺のやったことを後悔して
夜もろくろく寝られなくなっちやう
だけどたったの一度だって
この世の脱出を夢みたことはない
俺はまさしく
青春に生きる人間である　でしょ？
　フ、フン

5

俺は　毎度のことながら
便所に入ると　やたらとでっかい声出したくなっちやう
だもんだから

俺家の便所の活気のあること
でもね！
広いとこ
海や山川じゃ
何故だか怖ろしくなって喉がつまっちゃう
だもんだから
ホラ！
何もきこえないダロ？
万物滅亡の静けさが天から降ってくる以外は……
俺の頭はマトモなハズだ
エッ？

6

ネエ
後輩諸君ヨ
これから俺の
三年間もの辛抱生活での
ささやかな体験を物語ろうものを
まあきいてくれたまえ
まずは
何てったって先的
奴の言う事なんかきくな！
どうせロクなこと云わんものを
叱られたらあやまれ！
とにかくその場逃れを考えるものを
用事はずるく！
真面目にやっても1がつくものを
つぎは
対人関係だ
お友達にはたかるべし！
とにかく親の助けにゃなるものを
隣人は最大限に利用すべし！
何かと役に立つて便利なものを
事は共同で興すべし！
責任範囲の狭ばまるものを
最後に
学校は若人の集い
大いに遊ぶべし
とにかく
要領よく物を破壊し
要領よく逃るべし
エッヘ　後輩諸君に

回想

教諭　管原真静

かつての私は光を求めてここに来た。
この茅屋は
私にとっての殿堂であった。
五彩の雲が輝いて
フランスの香がただよい
ビロードの衣装から
哀憐な人形が首をうつむけていた。
ほほえみにあうと
私の胸は鼓動をはずませ
憂い顔を見ると
私は地底に吸いこまれて行くのであった。

私は光を求めてここに来た。
哀愁の光を放ちながらも
それはあたたかく広いものであった。
そこに私は生命の泉を
わきたたせていたのだ。
しかし
しかし今の私は
懊悩と汚汚とにあえいでいる。

かつての私はマスコットを抱いていた。
哀愁を帯びたその顔は
はるかな郷愁をそそり
母の乳房を恋しがらせた。
私はそこに女神を描いていたのだ。
木犀が音立てて開き
芳香が私たちをかこんだのに。
ここでは第一の扉さえ閉されようとする
神は永遠の魂を与え給わぬのであろうか。

しかし
しかし今の私は
この哀愁を
私の胸の奥深くひそめて
第三の扉の中にあたためようとする

山行

二年　村光二

暑い！
もう何度も言った言葉だ
それでも額から首へ汗が流れる
ジリジリ太陽が頭の上から焼きつける
皮膚が水を求める

苦しい！
胸が波打っている
　それでも脚は前へ進む
ドキンドキン高く低く心臓の音
　肉と骨が休みを求める
倒れる！
もう黙目だと思った
　それでも脚は前へ進む
ドサリと遂に限界が来る
　重たい体がなつかしい土であえぐ

Gと僕とIとの楽しい山行だった

異常者の話

三年　吉川幸男

――その一――

向うから
やって来た人は、
確かに
立派な人でしたよ。

『ずいぶん』
　と私は声をかけまして、

『きちんとした身なりで
一体、何処へ？』

『驚くことはありませんよ』
　とその人は答えまして、

『銭湯へね。』

『朝湯ですな。』
『好きでしてね。』
『なるほど。なるほど。
　分りますよ。』
『十五円でしたね。』

向うから
やって来たその人は、
手拭を見せると
又、歩き出しましたよ。

シルク・ハットに
ステッキで
立派でしたよ。

――その二――

近所の人は、
　私を、
どうして笑のかな。

私がドブを掃除していると、
　回りは、
必ず人だかりです。

『何かあるんですかね。』
『さあ。』
『気違いがいるのです。』
『ほ。』
『面白い人でしてね。』
『気違いが？』
『えゝ。時々、歌を歌うのです。』
『今日はどうです？』
『まあ、見ていましょう。』
どうして、面白いのかな。

私が、歌を聞かせてやると
　回りは
大嬉びです。
『仲々、聞けますな。』

『本当に。』
『でも』
『気違いでしてね。』

私は、気違いなのかな。

――その三――

駅から
ほんの僅かの所ですから
すぐ分りますよ。

踏切りを越えてから
真直ぐ五分。
右側の塀の中です。

――そこから、バスで
　行くそうじゃありませんか。

いや、五分で終りです。
分らなかったら、
駅でお聞きなさい。
誰でも知っていますから

――面会は、

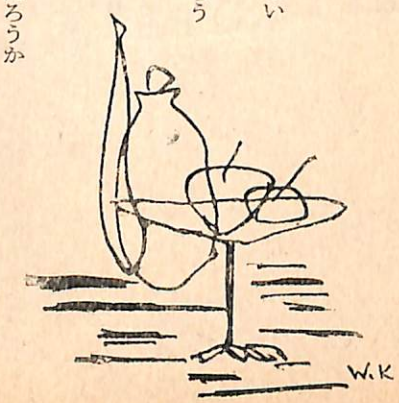
何時(いつ)でも良いのですね。
面会？
何の話でしょう。
混乱してはいけません。
——あなたのいる、
病院のことですよ。
これは、失礼。
ハツハツハツ。
笑止ですな。
——無闇に笑うのは
およしなさい。
何の事から
こう食い違ってしまったのですかな。
とんでもない。
——精神異常の
あなたが原因です。
ところで、あなたは
何の話のつもりでした？
私の
恋人のいるアパートのことですよ。
——その四——
何でも……
枕崎の方で
休養をとっているらしいですね。
『では
もう、その人
漁師はやめたのですか？』
どうも、
そうらしい、と
私は考えているのです。
『すると、
あなたの家は？』
枕崎とは正反対でしてね。
札幌です。
『ほ——お。
静かでしょう。』
どなたも
そう言われますね。

静かですとも。
空気が澄んでいますし。
環境が良い、というのですかね。
『それなのに、
どうして、又、この病院に？』
どなたも
そう言われますね。
でも、
私がここに入ったのは、
東京に出て来てから、
五年も過ってからですよ。
『なるほど。
田舎は良いですからな。』

幸福の中の夢

二年　成田良行

僕はいつも
明かるい夢の中で
生活している
だから暗い夢を
知りたい
描きたい
ばかな事だが
楽しいにちがいない
逢うなら
どんなに驚くだろう
うれしい
かなしい
さみしい
死にたい
どんな心をもつだろうか
僕はきっとうれしいと思う
なぜといってもわからない
きっとうれしいものが
何かある
うすい壁でつつまれた
暗い夢の中にある
僕はそれに逢いたい



矛盾

三年　下井洋一

自然はいつも変らぬ慰めを与えてくれる。
青空に白く光る小さな雲が吹きとび

こづえが光ってる時
郷里の限りない畑の彼方に
連山が横たわっている時、
僕は無限の喜びを得る事ができる。
ああこんなにも心の底に触れるもの、自然!!
何故これが偶然の所産であり得ようか。
この広い宇宙の秩序を保つ万有引力が、又その結果としてあるものがこんなにも美しいのに
一体偶然の所産であり得ようか、
何故生命が生れ
その頂上にあるものが
美へ美へ進む傾向を持つことができよう。
そして僕は全てを支配する何かがあると思う。
それは人類の保存を約束した。

蓮は泥沼からその芽を出した。
芋虫の胎内には蝶が眠っていた。
然しあのかくも美しきものが、
あのかくも厭わしきものより出づるには及ばなかった

かくも美しきもの
それは青空＝雲＝花であり、
きのうの灰色を今日のばら色に変える魔術師である。
然し徳とは思えない。

かくも厭わしきもの、
それは楽しきものであり、厭わしきものである。
然し悪徳とも思えない。
自然の厳粛な神聖な手段であるから。
ああ然し
貴方は何故共に美しきものとなさらなかったのですか。
何故美しくあってはいけないのでしょう。
もしそれが悪徳であるのなら、
我々は食べる事をも禁じなくてはならないでしょう。

変遷

二年　酒井惇子

霞深い春の宵
遠く妖しく燃える火と
低く流れる琴の音に
花の心はさそわれて
静かに舞いを舞いました。
星も深い夏の宵
水辺に香る沢瀉の
白い姿とみだれとぶ
青い螢にさそわれて
ゆるく流れる多摩川に

笹舟浮べる人の影
霧もけむる秋の夕
遠く草屋にともも灯と
老樹にわずか色褪て
残る枯葉に人影は
生と云われる哀歓に
ひとつの詩をよみました。

吐息も凍る冬の夕
陽も絶え果てた寒色の
空より降る粉雪は
この世すべての雑色を
白色の世と変えました。

川

一年　矢田秀子

ずっと昔
いつもわたしが通った時
おまえの瞳は
きらきら輝いていたっけ
青い空や真白な雲が
たくさん話をきかせてくれたのに。

だんだんおまえの顔は
ゆがんでしまったの
ときどき遊びに来る
子供達の歓声もみえたのに。

いくら話しかけても
おまえには聞えないのね
ほんのわずかの光さえも
いじわるな風が吹き飛ばしてしまったの？
家々からの汚物がおまえを……
あんなに澄んだ輝いた瞳だったのに。

遠い所へ

三年　岸本宏

——出合い——

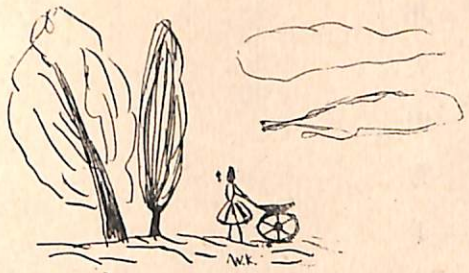
青い
自然の香りが
どことなしに湧いてくる
山の小径
春の日に

陽炎が
ゆらゆらとたちのぼる中で、
揚羽蝶が二匹
高くなったり
低くなったり
草の陰にかくれたり
花びらにとまったりして
戯れていた。

白いセーターの肩から
グレイのバッグをさげた
秀二は
すみれを摘みながら
口笛を吹いていた。

眠たそうな雲が
けだるそうに、
湖の方へ
飛んでいった。

〃ねえ、あなたお水持っていない？〃
秀二は驚いて
振り向いた
〃私の水筒空っぽなの、持ってらしたら飲ませていただけないかしら〃



水色のカーディガンの
とても可愛らしい人だった。
〃まだあったかな〃
秀二は、
バッグのチャックを
チャリチャリチャリ
と引いた。
〃ああまだ少し残ってた〃
水筒を振ると
チャプチャプ
と中で鳴った。
〃これ飲んじゃっていいの？〃
あの人は、
すてきなポーズで
秀二の顔を
のぞきこんだ。
〃ええ、かまいません〃
〃あなた困らなくて？〃
〃この先に泉があるんです〃
〃まあそうなの、私全然知らなかったわ〃
〃……〃
〃私も其処へ連れてっていただけて？〃
〃ええ、かまいません〃
秀二の返事に

あの人が笑った。
えくぼが
ぽくんと出来た。
長いもみあげを
春風がぐすぐった。
あの人は、
とっても気持よさそうだった。

——発展——

〃おねえさんいくつ？〃
秀二が
きいた。
〃どうして、秀ちゃん〃
あの人
ちょっと
不思議そうな
顔をした。
〃どうしてって、ただきいただけさ〃
〃嫌な秀ちゃん〃
二人は
笑った。
あの人の机の
百合の花が、
花瓶の中で
息を抑えて

二人の会話を
きいていた。
〃秀ちゃんはいくつ？〃
〃僕は、十……おねえさんずるい〃
〃それじゃ、二人で一緒に言いましょう〃
秀一が
こっくり
うなずいた。
〃僕、十五〃
〃私、十八〃
それは
とってもきれいな
二重唱だった。
〃秀ちゃんまだ子供ね〃
〃ちがうよ〃
秀二のふくれ顔を
白い指が
つついた。
〃おねえさん、あの時はどうして一人で山へ来たの〃
〃秀ちゃんはどうして行ったの〃
〃僕は行きたかったからさ〃
〃私だって行きたかったからよ〃
二人の話　終りがない
花瓶の百合が
あくびした。

〃おねえさん、今度僕の家に来てね〃
〃ええお邪魔するわ〃
〃お母さんに言ってうんとご馳走こさえとくからね〃
〃楽しみにしてるわ〃
秀二はお母さん子
あの人もお母さん子
二人の心は
融け合った。

〃秀ちゃんちよっと〃
あの人の声に、
秀二は
顔を
仰向けた。
白い影が
それを履った。
秀二の唇
ぶるるっ
とふるえた。
身体が
燃えた。

花瓶の百合は
狸寝り
恥ずかしそうに

うつむいた。

影法師が
一つになって
夢みるように
じっとしていた。

〃秀ちゃんごめんなさいね〃
あの人の吐息が
秀二の耳を
やけどさせた。

百合の花が
恐る恐る
片目をあけた。

——変化——
僕は子供
おねえさんは大人
僕は子供
おねえさは大人
僕は……
秀二は
汗をかいていた。
手のひらが、

じっとりと
湿っていた。

おねえさんは結婚する
僕は子供
おねえさんは結婚する
おねえさんは大人だから

秋が
近かった。
月を見れば
わかった。
ぽつんとついた外燈が
秀二の目の中いっぱいに、
ぼんやりと
広がつた。

おねえさんは結婚する
おねえさんは大人だから
僕は……

僕は……
〃僕は遠くへ行こう〃
——遠い所へ——

冬山は
しーんとした
白い
静寂の世界

さくさくさく
秀二は歩く
一歩々々進む

さくさくさく
雪の上に
足跡が
一、二、一、二
とふえてゆく

重い空から
雪が降る
色のない花びらが
散るように
重い空から
雪が降る

随想

ある友人のこと

二年　村西一郎

昔の道徳の一つに親の言う事を良く聞けというのがある。それは今でも一つの道徳には違いないが、それには親が誤まった事は言わず、みだりに怒りを強要しないという条件が付いている。又、親はその代り親身になって子を育てなければならないのである。親から必要以上にがみがみ言われて育った子がいかに危険な状態にあるか、特にそれが自我に目覚める頃だとしたらどうなるか良く考えなければならない。

私は小学校時代、外交的な華々しい人は余り好きになれなかった。クラスにIという友達が居た。いつも学校に来ると机の上に勉強道具を並べてボカンとして先生の顔を見ていた。どうして本を開けないのかと言っても答えなかった。彼の家は農家であった。彼の上には十以上も離れた兄と姉が居り、父や母は私の見た範囲ではがみがみ屋で、彼はいつもそれにびくびくしていた。父や兄の言葉は絶対的であった。そうして私達が五年生になった時、私は新宿の方に行き二年前又現在の地に戻って来たが、そこで会った彼は以前の彼とは全く違っていた。坊主頭だったのがポマードをテカテカに塗った髪になり、破れただぶだぶのズボンは細い青いズボンに変り、上からダスター・コートをはおり、前のボタンを掛けず、同じような格好をした仲間と一緒に歩いているのである。そしてその仲間というのもかっての私の級友であった。そんな彼に道で会うと彼は「よおー」とか「おうー」とか声をかけるが、それに対してどうしても以前の様に打ち溶けた気持になれないのである。その度に以前の彼と比べてその変り方に驚くのである。風呂屋でたまたま会って話をしたが彼の話ではどうしても愚連隊としか考えられなかった。Y社長襲撃事件で有名になったA組配下に入り、お祭の晩には他の愚連隊との喧嘩に参加しているそうで、そういう事を得々と話すのであった。試みに言えばA組の大幹部であったHは私の家の近くにある米屋の息子であった。

色々話を聞いたがそれによるとIの母は農家の生れではなく、又生活が満されないのかその叱り方はヒステリックで自分の言う事に少しでも反き、口答えをしようものなら、大変であった。中学校に入り性格は次第に変り始めた様である。不満の捌け口がなく憂鬱な日々を送る様になり、嫌世感が湧いてくるし、もとより勉強の方はほとんど手につけなかった。父親のお説教はいつもきまって「両親の言うことをきけ、そうすれば偉い人になる」式の内容であった。彼は自暴自棄的になって来た。クラスの悪友の仲間にさせられ（学校の周りには畑がある位で、友達付き合いも封建的で喧嘩の殴り合いも珍らしくなく、喧嘩の強さの番付さえ出来ていた。）その時から不良化し始めた。他校との〃対校喧嘩〃に参加し、酒場に入る様になった。

それに対し両親は唯声を大きくしてどなりつけるだけで、自分の息子の心の中を察して慰めるようなこともなく、終りには家から出て行けとまで言うようになった。

この頃の彼はどうしようもないかにみえる。しかし、それから救えないことはないのである。子が不良化したからといってただ怒るだけで解決されるであろうか。彼の親は叱るのではなく自分の怒りをぶちまけるだけなのである。そういう時、たとえ兄や姉だとしても、よく彼の言うことを聞いて理解してその不満とする所を心よく聞き入れ、必要な注意を決して怒るのではなく、叱るようにしたとしたら、彼はどんなに救われたことであろうか。兄は勉強にばかり頭を使い、姉は自分の嫁入り先きの事を考えることにしか能がないように見えるのである。ましてそれが親ともなれば当然のことなのである。しかし世間の親は決してそのような理想的なのもではない。むしろその反対にある方が多いかもしれない。それならばなぜその息子が、それはそれなりに成長しているかと言えば、それは環境の問題になってくる。彼の場合、環境が悪かったのである。もし良ければあの暗い期間は一時的に済んでしまったであろう。言いたいのはその大切な時期に親と子の仲がうまく行かず、環境が悪くなければそれは極めて危険な状態になるということである。であるからちょっとしたきっかけから途方もない事をやり出す可能性は非常に大きい。ここでも亦、しんがしっかりしていればいかなる困苦もよい経験になることはあっても、決して悪い影響にはならないという人があるかもしれない。しかしそれを平然と言ってうそぶいていられようか。恐らく幼時からあらゆる積極性を失なわさせるような育ち方をした者は普通の人よりなおのこと難かしいであろう。

彼は不幸にしてその最悪の状態にあったのだ。そしてそれに対する何らかの手も差しのべられなかったのである。友人である私がいかにすべきかよくわからない。けれどもこれに思い当る事がある。それは私の弟の事なのだ。Iの母と同じような私達の母に対する弟の態度が何か彼の不良化する最初の頃に似ている様だ。母に悪態等もついた事もない口からその声が聞かれ、口論が絶えないようになってきた。学友も人が変ってきた。以前のような勉学の友ではなくなった。

それに対して、私が怒ったとしても何になろうか。そういう時、私はなるべく弟のいう事をよく聞いてやる事にしている。しかしこれは骨の折れることである。母の言う事は今迄の苦しい生活からにじみ出ている事を言っているのであって、しゃくにさわることはその枝葉に過ぎないと言って話した。しかし、こう考えてもこうした例はいくらもあるだろう。それに私達よりもっと悪い状態にある人だってある。Iもその一人だ。親子水入らずで話している光景を見ているとうらやましいと弟はいうのである。これはIにとっても当てはまることだ。

われわれは決して理想的な生活を過してきたのではない。多少といえども困苦に耐えてきたのである。そしてそれが長い人生の間にはきっと良い経験になってくるであろう。受験勉強に苦しむのは極くありふれたことにすぎない。そして個人個人には決して人には話せない悩みや苦労があるというのも同じである。もしそのような事なくして成長した人がいたとしたら、その人と話してみるがいい。話して何か通じなく満されないものがあるだろう。そして話すことから何も得ないであろう。こうみれば苦労し悩むのはあたり前であって、苦労するから不幸であるという考えはなり立たないようにみえる。そして苦痛であるか否かは個性にも関係してくる。消極的だとか楽天家だとかの種々雑多な性質があらゆることに別の反応を示

す。それに性質は絶えず同じものであるとは限らない。成長すると共に個人個人の性質の違いははっきりしてくるし、時としては一日の中でさえ周りの状態によっては違うのである。苦労することと個性の間には関連がある。苦労して得た実績というものは個性の悪い方面を大いに是正する力があるし、苦労することが個性の悪さから来るのであれば、それ以後決して同じ苦労する必要はないのである。

人の性格がはっきりし、又非常に変化を受け易い時期がある。中学時代から高校大学へかけてである。この頃から人はあらゆる方面の苦労と努力が交錯するようになる。しかしその時、その内のどれか一つが決定的な影響力を持つことがある。しかしそれが外面的に現われてくるには大部時間がかかる。そしてそれが良いことであるならば幸であるが、もし人生を破滅へ導くような大きな事であったとしたら、それを是正するためには非常に大きな努力をしなければならない。できないとすれば不幸なことである。

大人の人から見ればそんな事は大人になれば自然と消えてゆくと言ったら、私はそれに反論したい。大人になった個人個人の持っている性格の基本は皆青年期にはっきりしたものである、と。もともとあった個性がはっきりしたのではなく、誰でも持っているいろいろな個性からある部分が持に出てその人個人の性格になったのである、と。だから個人間には共通の点が多分にあるとも言えるのである。

Iのことをもう一度考えてみる。彼は極端に個性のないというより、特に他人と区別するような所がなく強いて言えば消極性であった。前にも述べたように、彼は家庭のうまくゆかない事から不良少年化して行った。その時期に個性を方向づけることに影響した大きなことは、愛のない人間味のとぼしい家庭内の人の態度がついに本当の家庭というものを彼に分らせなかったということである。家庭は社会の一番小さな単位である。それを知らなかったのである。それから彼は広義でいう社会に入ろうとした。そして入ったのである。不良少年団というものに。

不良化したものを救うのに家庭の温さ程大きな決定権を持っているものはない。不幸にして彼はそれを持たなかったのである。その為彼は一見救い難いかのように見えてきたのである。苦労することが（彼の場合親の無理解）家庭の温さといった大きな精神のよりどころのない所にかかってきたのだ。良い影響にはならなかった。彼の性格はねじけたものに変る。行き場のない感情が頭の中から出ずにぶつかりあっているうちにごってきたのである。それは幼いうちには感情の強く現われる事がなかった所から今青年期に入って物事に対する反応を出そうとするとき、彼には親の愛の欠乏と無理解が大きな障壁となって現われたのである。

不良少年の仲間に入って彼は何を得たのであろうか。外に出なかった感情のかたまりがいっぺんに押し出され、その一部分が満されることによって個性が初めてはっきりと出てきた。それと同時に大きな喜びを得たに違いない。満されなかった感情の満されてゆく気持のよさというものを初めて味わったのではないか。やりたい事を気ままにやって、始めの内はあらゆることに手を伸ばしたのであろう。そのうちこうなれば誰でもなるように彼も個性のある人間に変ってきたのである。そして出来上った人間は以前と比べてその間を見ない人間にとっては、全く違ったものになったのである。個性が

変って人を驚かしたのではない。新しく生れ出た個性のあまりの大きさに驚いたのである。これに対して友人の私がそれをただ見ているだけでよいのだろうか。やはりそれは人間と人間とを結ぶ愛で結ばれるのである。家庭の温さはその最も大きなものの集団であると思う。しかし彼の家庭にそれが望めないのなら、それに似たもので満させばよいのである。友人間の友情もその一つである。時としてはそれは恋愛に迄発展することもある。恋愛も大きな力であるが、彼の性格から望めようもない。友情は今のところ彼を救う唯一と言っていいほどのものだ。彼は私の友人なのだ。現在私の心の中に入る事は出来ない。根気が必要である。彼を見る目が偏見を持ってみればみるほど好ましくない方向にゆくのなら私は決してそのように見てはいけないのだ。幸い私は彼と接することが多い。彼の友人は同じような性格を持っているようにみえるが互いにその由来の違う人間を救うことは私一人の微力ではできない。最も身近かな友人である彼がこの仲間であるということを考えると不可能となるかもしれないが、それだからといって可能性がないわけではない。むしろその可能性を信念に迄変えて努力しなければならない。もし彼を救えるのなら健全に発展する力、つまり周りの不合理と闘ってゆく力を得るのだ。彼は孤独である。彼を救いたい。

私と愛犬

教諭　大和久鈴江

南極の樺太犬生存は近頃の明るいニュースであった。犬好きの私にとっては殊に嬉しい限りの話である。止むを得ぬ事情で置き去りにされたとはいえ、二頭の樺太犬は人間を恨むどころかただ素直によろこんで、上陸した越冬隊員にじゃれついたり、お手をくれたりしたそうである。「これが犬の悲しい宿命なんですよ。自分はどんなにつらい目にあっても決して人を恨まず何の疑いもなく無邪気に尾を振るのが……」と犬科生態研究所長の平岩米吉氏は説く。（週刊朝日二月一日号）しかし私にいわせれば、これは悲しい宿命ではなく、この上もない立派な天性なのだ。私は犬好きを通り越していささか五代将軍的要素をもっていることも自認するが、それは何故かと自問自答すれば、この疑心のない素直さに強く心をひかれるのである。巨人軍の藤田投手が犬の澄んだ眼が好きだとある誌上でいっているのをみたが、勝負の世界に終始して、いつも何かのうるおいを求める人々にとって、あの邪気のない犬の眼はきっと心温まるものを感じさせるのであろう。「犬は人間が何より好きだ。自分の仲間がいなくとも人間がいれば満足する。原始時代から犬は人間につきまとって暮してきた。人類が群落していた近くに犬はいつも群をつくっていたらしい。人間が食べ残した野獣の内臓や骨などをあさり、いつか番犬にも猟犬にも成長して人間に協力してきた。その

中でも特に人間に近づいた犬がいまの祖先というわけで、昔からおなじみだ。きっとタロもジロも人の形をみてとんできて人間のにおいをかぎ、たちまち昔のなつかしい気持をよみがえらせたことだろう」と同じく週刊朝日で北大の内田博士がいっておられる。同博士によれば、トロイの遠征軍に参加し、十年ぶりに帰国したオデユッセイが老乞食に姿を変え、昔自分を裏切った人たちのところへゆくが、だれ一人気づくもののない中に犬だけがおぼえていたというホーマーの詩の物語を例にひいて、今度のタロ、ジロのような奇跡はまだ沢山あるという話である。

犬が素直で忠実であるということは内田博士の言をまつまでもなく、昔から事実物語にも架空のつくり話にも数限りなく織り込まれている。桃太郎のお供の犬は猿の知、雉子の勇に配する忠の表象であり、枕草子に登場する犬の翁丸は純情そのもののあらわれである。卑怯な敵のまわしものとして呼ぶ間諜をいぬとふり仮名するごとき言葉を私は国語の上から抹削したい。

さてこんなことを長々とのべたてるような私の犬好き（犬マニア？）が、る・くーる発行委員の気づくところとなり、とうとう「私と愛犬」という題で雑文をかけという命令が下ってしまった。そこで自分が現在飼っている犬を改めて見直す時、果して前文で宣伝これつとめたような性情をもっているかどうか一寸自信がないが、思えば私も今までにずいぶんいろいろな犬を飼ったものだ。はじめは「なるべく純粋な血統の犬を……」となけなしの財布をはたいて相当高価なのを買ったものだった。セッター・ポインター・土佐犬・シェパアドとその頃日本橋にあった犬店から仔犬を買ってきてその度毎にテンバーや消化不良で死なせてしまった。こうして精神的にも経済的にも、痛手を負った後に、雑種でも丈夫な犬をと思いついて知人からもらったのが初代のマリオンだった。マリオンとは鉄かぶとという意だそうで、この犬は丁度かぶとをかぶったように頭だけ茶あとは真白の雑種だった。マリオンがうちにきたのは昭和十五年頃で、戦争末期から戦後の食糧不足の時を私たちと苦を共にした。所轄警察署から何度か供出を迫られたり、隣組からは時勢を知らないという非難を浴びせられたりしても飼いぬいてきた。マリオンは実に私たちに忠実だった。ドシャ降りの雨の中を防空壕の入口に徹宵張番して頑張ったり、食物の足りない時もじっと我慢しているらしいマリをみて、私は人知れず涙をぬぐったものだった。こうしてどうやら終戦を迎え、その後の食糧不足にも耐えていよいよ来月からは魚の自由販売も始まるというれしい知らせをきいた二十二年の秋、マリは犬とりに連れてゆかれてしまった。もう大分老犬ではあったがほんとうに可哀相なことをしたと今でも胸の痛む思い出である。この悲しいショックで流石の犬好きも暫く犬を飼うことをあきらめていたが、今から六年前、武蔵境のお百姓さんから小さな仔犬をもらってきて育てたのが現在の二代目マリオンである。不思議にも初代のそれに似て頭だけが茶、あとが白というこれまた雑種。中型のオスで耳がピンと立っている。秋田犬の系統をひいているそうだ。これは実に片意地な犬で家族の者以外絶対に他人になじまない。人を見ると猛烈に吠えつくのみならず、一歩でも家の囲いの中に入るとすぐ実力行使に及ぶという甚だ物騒な代物である。うっかり家の中に入ってきて彼の爪牙にかかり（少し大げさかな）多少なりとも怪我をした人に、曰く郵便屋さん、曰く集金人、曰く親戚のおじさん等々、数えあげれば五指に余る。今では一切綱をとかないの

でこの心配はないが……。このマリ公が家の外では雀のようにオドオドした弱い犬なのでその護衛役にもう一匹と小さいのをオーバーのポケットに入れてこれまた知人からもらってきたのがこれも今御健在の犬で名前はジロン。これは大館秋田の純粋で血統は争われず満二歳の今とても大きくなって十四貫はかかる。性質はきわめて温順、飼育主そのままの性情を示すので、飼育主たる私も大満足。但し帰宅して一寸庭に入ろうものならこの二匹の大歓迎をうけて服も靴もどろんこの憂目に逢う。私が服を新調しないのはここに深い原因のあることをこの機会に御諒承願いたい。

私に犬の話をさせれば果しがないが与えられた紙数ももはや尽きている。干支の犬は一年の昔になったが南極の話で犬はこのところ大分点数をかせいだようだ。私のこの迷文がお役に立って松高生の中に一人でも多くの愛犬家ができれば私の満足はこの上もないのである。

電車通学

一年　小林純江

七時に母におこされ、あくびをしながらベッドから出て、のんびりと洋服を着て、顔をあらい、そして食事と、ここまではよいのだが、時計を見ると間もなく七時三十五分。それからは息もつかず、オーバーを着てくつをはき、母がげんかんまで持って来たお茶ものまずに、ガタン！　とすごい音をさせてドアをしめ、表の通りへかけ出る。

さあ、急がないといつものバスに乗れない！近所のおばさんが、家のまわりをはきながら、ニッコリわらいかけてくれる。それも私にとってはありがためいわく。見て見ぬふりをしたくなる。顔見知りのお姉さんがおつとめに行くのと会う。向うもかけ足だ。

自称「心臓やぶりの坂」を登り切ると、バスが来る。ああ、よかった。間に合った。バスに乗ってしまうといつもながらこう思う。途中で友達が二、三人乗ってくる。「伊勢丹」から「新宿駅西口」まではすごくゆれる。地下鉄工事のためらしいので、がまんはするがとにかくつらい。つりかわは背の高い男の人たちに占領されてしまい、背の低い我々にはどこにもつかまれなくている時等は、もう泣きたくなってくる。たおれそうになってもその人たちにつかまれないのだから……。

大カーブをして終点。ずらりと並んで待つ人々の目が、止ったバスの入口に集まっていてこわい。急いでおりてかけ出す。その私たちの様子を、並んで待ちながら見ていた中学の先生に、「いいかっこうよ、足がまだ車についているのに、体ばかりが十メートル位先にあるつもりらしいわね。」だそうだ。そして「美人もあれでは台無しよ」といつか中学校へ行った時、言われて赤くなった。走って改札口を入って定期をうらがえしに見せたのに気がついたのは、すでに階段の上、私が毎朝乗るのは「桜上水行」。すいているからだ。それでも「上り」はこむらしく、電車が止ってから、ホームの上に上るのでは、おりる人にふりまわされてしまう。それで私たちは、ドアがあくまえに前の方にかけ出して行く。おりる人々を待ってすわる。この電車の一番前の箱は「松高生の電車」の感が多分にある。特に二番目に先生が乗られた時等はよけい。最近はうるさ型と言わ

れる先生が一人ふえてしまい新宿から乗る生徒諸君はガッカリ…。
この電車では大てい腰かけられる。腰かけてからまわりの人を見てニッコリ。同級生、上級生等たくさんいる。その中には、私が最近どうしてもこの電車に間に合いたい理由のもう一つの「あの人」がいる。視線が合うと私は下を向いてしまう。でも何となくうれしい。ここで又、バスに乗れた時と同じ、いや、それ以上の安心感が胸を包むのである。こうして下高井戸までは、御想像の通り。……
こうした電車通学も始めてからすでに一年たとうとしている。闘志に満ちた気持でこの電車で通いはじめたころを比べると、自分がおかしい程電車通学になれてしまったことは、私をうんざりさせるのである。電車やバスに毎日乗るという事は、人をずうずうしくさせるらしい事に気がつくからである。あのころ闘志と一緒にあった緊張感も今はどこへやら「年寄りや子供には席をゆずる」と言う小中学校での教えもどこへやら、後に残るものは疲労と言うもののみなのである。これでは高校生として、いけないなあと思いながら、帰りなどあいた席を見つけて「我先きに」なのである。
私はそれと同時に「高校へ入ったら」との気持も慣れるに従ってうすれて行くであろうことを思うのである。卒業するまでそれを持ちつづけたいと思う。そしてあくまで将来に望みをかけて行こうと思う。来年度は二年生として学校の中心となる学年になるのだ。ここで又「来年こそは」と思うことは確かだ。しかし、慣れてもうすれない努力をしようと思うのだ。電車通学になれても気持は始めて通う時のように……。

読んだ後でバカバカしくなります

一年　熊谷直彦

「イシヤキイモー」という声も、一月を中ば過ぎたこのごろでは耳慣れたものになって来た。何もこの書き出しは女性諸君を魅するために考えたのではない。ジジイくさくいことを云うが、僕はこの声を聞くとたまらなくなつかしい。又つらかった思い出が呼び起されてくるのだ。というのは話セバ長イコトナガラ中学一年の今頃だったと思う。学校の帰り道、泥でよごれた雪があちこちの日かげに残っていた。ふと気がつくと電信柱にこんなはり紙がしてあった。「配達員募集、中高生、高給優遇、△△新聞〇〇販売店」この時から僕の変化に富んだ生活がはじまったと言っても良かろう。僕は小学校の時から父にこんなことを言われた。「お前は憶病だ、ノロマ、青ビョータン、オバアチャン子」これはお説教の時から必ず父の口から出たし、口癖のようにもなっていた。僕は小学校以来自慢ではないが、人に見せても恥ずかしくないぐらいの点はとっていたが、体育科だけはどうしても〇(〇点ではないゾヨ)の位置を動かなかった。だから自分でも俺は本当に憶病でノロマで……等と思う様になっていた。そういう僕に父は「毎朝来る納豆売りは偉いナ」「あの新聞配達を見ろ、あの子はお前よりも小さいじゃないか、恥ずかしくないか、くやしかったらやってみろ」等というのだった。こういうわけで新聞配達員募集のビラを見て、何も考えずに真直ぐ新聞屋

へ行ったというわけだ。もちろん家の者には何も言わなかった。その日から早速新聞屋のアンチャンについてまわって、家をおぼえにかかったわけだが、そのつらいことといったら、ここにいくら書いても書きつくせないほどだった。部数は二五〇部ぐらいだったと思うが、仕事のあらましは、朝四時新聞屋へ、たき火をして新聞が来るのを待ち、トラックで着くと折込広告を入れ順路帳に従って組み、肩ヒモかついてイザ配達というわけだ。初めのうちは二五〇部をかつぐのが勢いっぱいなのに、もっと早く走れとどなられるし、早く家をおぼえなくてはならないし、全く社会とはこんなものかと恐れ入ってしまった。雪が降れば足を取られて前へ進めない。指がこごえて新聞を折れない。雨が降ればカッパ等着ても下着までビッショリ。雨が降り続くと毎日々々ぬれて、帰って着るものが無くなってしまった。真暗な寺町を行けば行くで、野良犬の集団におっかけられるし、こんなつらい目をして家をおぼえようと努力したが、普通の人が四、五日でおぼえるところを十日たってもおぼえなかったので、あわれ一銭の給料ももらえずに首になってしまったのだ。その時のガッカリしたことといったら、父に「やっぱりお前のすることはそんなトコだ」といってバカにされて、くやしかったの、くやしくなかったの(ドッチダロ)。新聞配達のことはそれきり忘れてしまったが、五月の中頃、やはり新聞配達をしている友達(今は不良になってしまったが)に「俺やめたいから後をやってくれないか」といわれた。僕は一寸不安だったが、今度こそと思って、又家の者に黙って新聞の配達を初めたのだった。ここでも苦しいことは前と同じだったが、家はたった一日でおぼえてしまうし、給料は安かったが待遇は良かった。しかし今度の販売所は家からいくつも町を隔てた遠い所にあって、毎日通うのが大変だったし、悪いことをおぼえるとか、疲れるとか云う理由で学校の先生から、「成績が落ちるぞ、早くやめてしまえ」ナンテ言われた。事実、僕の成績は目に見えて下っていった。しかし僕は無とん着に仕事をつづけ、初めての給料で十姉妹を買った。元来僕は生き物が大好きだったので、それからというもの、金さえ入れば小鳥屋へ駆けつけるのだった。ザット飼ったのを上げてみるとヒバリ、クロツグミ、センダイムシクイ、モズ、スズメ、十姉妹、カナリヤ、ヒヨドリ、四十雀、カラス、オオルリ、二十日ねずみ、うさぎ……テナもんであるが、カゴを置いた玄関が糞でムッとするようにくさく、みんなにいやがられてしまった。しかもそれらの鳥のほとんどは自分に慣らして飼ったので、家の至る所に糞が落ちている程だった。中でも思い出があるのは黒ツグミである。こいつは目のクリクリした全くおどけた奴で僕は「ラック」という名前をやって可愛がっていた。ごはん時になると肩へ登って口をつついて御飯粒をさいそくした。舌に乗せて出してやると、うまそうにつっついて、今度は頭へ登って何のつもりか髪の毛をけちらかして座りこんでしまい、ハテはそこに糞までして(鳥の糞などきれいなものである)暗くなるとチャント自分のカゴに入ってしまうのだった。それがある時野良猫に食いつかれ、命だけはあったがひどい傷を負って帰って来た。僕は青くなって犬猫病院へ連れて行き体中の傷口を縫ってもらったが、その夜にはとうとう口ばしをヒクヒク動かしながら死んでしまった。その時の僕のガッカリしたのしないの(又始まった)。身よりの人が死んでも一度だって悲しいなどという気はしなかった僕が、一羽の小鳥のために夜中まで泣きとうしてしまった。今思い出すと恥ずかしいぐらい

である。一寸横通へそれたが他に給料で自転車二台、カメラ一台を買った。しかしどれも家の者に言わないで買ったのだが、これもみんなにバカにされた僕の勢一パイのレヂスタンスだったのだろう。その後一年半続けたわけだが、アルバイトをして何かとりえになったかというと何一つそれらしいものはなかった。全く残念である。その春から高校受験の補習授業が始まったが、コレ又家の者に黙って高校受験まで一日もそれに出席しなかった。そればかりかその年の十月頃、みんなが受験勉強で青くなっている時に大変なことを始めたのである。秋の文化祭に出品する校舎の模型を友達数人と作りにかかったのだが、それも只事ではなかった。授業が終ると早速仲間が教室に集まり、連日十一時、十二時までコツコツとやり出した。仕事が単調なので合い間には大声で歌をうたったり、いたずら書きをしたり、又今だから云うが、夜中仕事をしている二階の教室から小便をして、何となく得意になったものだった。数週間続けても文化祭に間に合いそうもないとわかると、ある時などは一時頃までいつもの様に仕事をしてから、一たんみんなが家に帰り、ミカンやブドウ酒をかかえ翌日の授業の時間割を持って又集まり徹夜で続けた。その時は警備員と「帰レ」「帰ラナイ」と口争いまでして、教室にこもり、寒いので交代に山岳部の寝袋に入って、朝みんなが登校するまで仕上げにかかったのだった。もちろん先生には秘密だったが、父等は僕の無鉄砲にあきれて文句も言わなかった。こういう苦心のかいあって文化祭には一段とさえた作品を出品出来たが、今考えてみると十六年間ツマラナイ人間トイウモノヲヤッテキテその頃が今までで一番僕には楽しかったと思う。

しかしこれで僕の無鉄砲は終ったわけではない。去年の暮冬休みになるとすぐ鮨屋のアルバイトを始めた。ここでの仕事は主に出前、そして雑事といろいろあったが、それはそれは騒がしくて正月になってからは昼飯等落ちついて座って食べられず、出前から帰る度ににぎり飯を立ち食いでほうばる仕末だった。朝起きると唯鮨屋へ出かけるだけ、夜十時ごろ家へ帰れば唯寝るだけと、全く疲れた生活の連続で十四日間本一頁開く暇もなかった。しかし待遇はずい分良く、風呂には毎日入れてくれるし、鮨屋だけに良い物をタラフク食べたが、学校が始ってから二日目には四〇〇匁も体重が減ったのには驚いた。こうして現在に至ったわけであるが、次には少しジャイアンツな計画を立てている。自転車で東北を一周しようというのが去年の夏中学時代の友達と立てた計画である。これも本当のことは父に言わないで今年の夏実行するつもりである。従ってこれが『る・くーる』に載っても当分家族にはかくしておかなくてはならない。今年こそ、みんな胆をつぶすだろう。全くそのことを考えると愉快である。

サーテ、ところが弱った。書き出しに石焼いもを書いたが、何と関係あるのだか忘れてしまった。しょうがない、新聞配達の途中でいもでも買って食べたことにして終りにしてしまおう。唯頭に浮んだことを片端から書きなぐって全く読めたものではないが「何テ馬鹿ゲタ事ヲシタ奴ダ」と皆さんに笑っていただければそれでけっこうです。

もうこれかれは絶体アルバイトをしないと、〇〇に誓ったので「仕事ジマイ」にこの自転車旅行は誰が何と言ったってやるつもりで、現在も着々と準備を進めているのでアール。「連レテッテー」と言う子、居ないかナ。

思うままに

二年　渡辺静枝

おわかれ
竹竿つたわる
　ケーブルカーも
節までくると
　さよならするの
宝石みたいに
　きらきらしても
節までくると
　さよならするの
そして
　新らしい過程へと移る
まってと言っても
　まってくれない
美しく輝いたケーブルカーも
節までくると
　さよならするの

三年生のみなさん
　さようなら

その翼の白いうち
さあ元気に巣立ってお行き
世の中の常として
世の中の常として
別れてゆかねばなりません
飛びたって行かねばなりません
新らしい未界の道程に向って

〃おめでとう〃心から御卒業を祝ってあげなければならないはずですのに、私の口からはただこんな通俗的な言葉がでるだけですの。みなさんが行っておしまいになるのを……

三年生の卒業に際して私はいろいろと書いてみたいと思いました。事実つい昨日まではこんな詩をプロローグとしてまとまりのない文をいくらか書き綴りました。でも今日になって私の考えはがらりと変わってしまいましたの。それを仕上るよりも、あなたにこのお手紙をみていただきたい。私の今考えていることをあなたに知っていただきたいという気持がふつふつと湧きでてなりません。どうぞこの貧しいゆとりのもてない心の私を、浅はかな馬鹿な奴と一概にかたずけず、お読み下さっていただければ幸いです。

タンポポは
　スミレになりたい等とは思わない。
スミレも
黄色く咲きたい等とは考えない。
どの花もみなその花らしく

まじり気のない姿で
精いっぱいに咲いている。
だからどの花も
みなそれぞれ美しいのだ。

以前は深い意味も考えず愛誦していたこの詩も近頃口ずさむのは複雑極まりない心のやりばに困った時にふぎられてしまったように思いますの。一人善がりな虚栄心の強い、勉強の嫌いな甘ったれな何一つとしてまとまったことのでない、そのくせにして悪いと思うことには人一倍の怒りをもちすぎる人間である私。そんな私は冬木立のようで何のとりえもないように思えてやるせない淋しさから逃がれようもない時、〃だからどんな花もそれぞれに美しいのだ〃という言葉の終着に「私にも?」とみなわのような小さな救いを求めて自己満足をするための一条件として愛誦するの。すると他にかけがえのない私だけがもつと思っている素朴な空想のノスタルジアの中に陶酔できることがあるのです。精神生活のホリデイです。その中での人々はみなやさしい言葉と私を見詰めるような優しい眼眸をもっていてくれることを書き落すことはできません。

力つきた小さな雲は
風におされて何処へゆく。
ゆくあてもなく流される。
風の思うまま何処へゆく。
自分の意志はどうしたか。
一刻も自分の考えもたず
左に右に戯れ動く。

太陽の赤や空の青によつて雲は美しくもありましょう。でも美しいという意味だけで雲をみるのでしたら、嫌いですわ。他人にちやほやされて(?)いる人間はこの雲のように思えてなりません。他の人の目には一見美しく、そう幸福そうに見えるかも知れません。でも笑つている外見だけで誰が心の中まで見ぬいたと言えましょう。……

〃人間の弱さについて〃〃愛〃というものについて本当に私は考えてみたことがありますか? 自問自答してみました。新しい年とともに新らしい私という人間をつくるために、愛というものを、私はもっとよく改めて考えみる必要に追いつめられているように思いますの。〃好き〃ということ、言い換えるなら〃愛〃ということは深い海の底に生きる生物のように何の屈託もなく多くの疑問のかぎをもつたものではないかしら。あなたはそうは思いませんか。愛とは何て楽しい又何て淋しいものなのでしょうか。

〃私はあの子が好きなんだ。赤ちゃんと同じように食べてしまいたいくらい好きなんだ。でも私はあの子の手を握ることも、まして、肩にさわることさえもできないんだ。私にそれをやってはいけないというものは誰もいない。では何故私の心は反対するんだろう。あの子もいやだと言わぬのに私も望んでいるのにもかかわらず何故それをしないんだろう。勇気がないからだろうか。いいや違う。私はあの子が大好きさ。だからこそあの子をそっとしておきたいんだよ。君達だつて何物かが言葉と口をおさえてしまったようにあの人の前では何もしやべれない事があるだろうが〃これは私が昨年日記帳の

最初に綴った小さな文です。あのころは誰の忠告にも耳もかたむけなかった。それなのにこんなことも考えていたなんておかしいような信じられないような妙な気持です。月日の過ぎゆくのにつれて心も成長したのでしょうか。考えもずいぶんと変ってきました。他人の言葉にも勤めて耳をかたむけるようになりました。

種々多様の愛がありますようにその表現法もおのずとたくさんになるのは自然のこと、あたりまえのことですね。そっとしておく、そんな愛の表現を最上の宝としている人もありますでしょうね。理屈では分かっていても私には何もかもがわからないことばかりなの。

考えること

ある人は私に対して又私がある人に対して何とも思っておりません場合、自分自身ではそっとしておきたいと思っております場合、まわりの人がさわいだりするのはいやなことですね。まして本人自身では思いもかけぬような人なのに、まわりの人が言うからと言って、本人自身が話の引合い等にだして笑いあったりしているのをみるのはとてもいやですわ。そんな人は自分の心を大切にしない人でしょうね。そしてそれ以上に相手を侮辱していると思ってはいけませんか。私はこの様なことを好みません。

又他人の誤解をまねくような事をしておいて、相手の誤解をまねくような事をしておいて、知らぬ顔をするのも、ひきような人だと思うの。ある感情をおさえる必要はないと思いますわ。しかし相手の心をなんのきなしにと言うのは気をつけなければならないと思いますの。世なれた(?)本人自身はなんとも思っていないかも知れません。(相手にとつてそれはどんなに大きな傷手であることか知れない)。もしそれが相手の初恋であったなら、なんという大きな罪をこの人はおかしたことでしょう。ある書物には一番美しくある恋は、女子にとっては初恋であり、男子にとっては最後の恋だとありました、そうでしょうか。私はそうは思いませんの。男子にとっても初恋こそは一番の汚れのないものだと思いますの。どんな人を好んだとしてもそんなことは問題外でしょう。愛される、愛するための資格等存在しませんはずですから。

そしてまた考えること、

彼女(もしこれがあなただとしたら)はいろいろ考えてみました。でも理屈では分かっている様に思えても実際の彼女には、少しも分かっていないんです。彼女はこう思いました。〃好き〃ということを別の棚にあげてしまったとしても、好意をもっている人、仲よしの人であつたなら、どうして年賀状もださずにおれましょう。そうではないかしら。

彼女にとっても親しそうにお話される方がありますの。そんな時彼女はきっとある感情をいだきますわ。話し方やその人の素振りにますます親しさがこのごろ加わったように思いますの。他の人もそれを認めました。そんななかで彼女はお正月を迎えました。でもその方の心は彼女に対し何とも思っていませんでしたの。いいえ彼女は心にそう感じたのです。お正月が終ってつくつぐそう思いました。〃あの方は〃と彼女に向って弁解をする人がいるかも知れません。でも彼女はこの考えを変えはしませんわ。その場その場の一時的な楽しみとして、あの方は彼女をもて遊んでいたのでしょうか。これからも昨年と同じようなあの方であるかもしれません。そうだとしたら、あの方は大変に重い悪い罪をおかしているのですわ。自分

の心に対しての罪を。彼女という人間の心をだます罪を。〃愛の偽善者〃何て恐ろしい罪でしょう。〃私の心をぬすまないで下さい。自分自身の心をもっと大切にそだてて下さい〃そんなことをあの方に言ってあげたい気持にかられますの。そして瞬間的に誰か忠実な人間をあの方の傍におきたいなみなみならぬ要求を感じますの。

淋しいんだ―。
淋しいんだよ。
そのくせにほしいの。
星のようなきらめきが。
心をつきさすような
冷ためいきらめきが。

やさしい言葉をかけてくれる人。
楽しみを与えてくれる人。
喜びを分けてくれる人。
でも〃その行為は何処から?〃
そう思うと
星のきらめきがほしくなるんだ。
心をつきさすような
冷たい星のきらめき。
でもうそのない
ひとすじの星のきらめきが。

私の矛盾した考えはここに矛盾したものとして書きとどめられました。いくらかでも、私の考えていることを分かっていただけたらうれしいですわ。

断想

三年　仲内典子

陽はすでに斜に傾いていた。私は公園の柵にもたれて、じっと雲の流れを眺めていた。雲の流れの中に私は時の流れを感じ……私の頭の中をいろいろの事が走馬燈の様に駆けめぐり体をふるわせた。

空を覆う雲は
　青白い頬に赤味をさすように
やがて空を覆う雲は
　淡い乳色に変った。
光に満ちた黄色い雲は
　憂いに満ちたほゝ笑みを投げた。
しかしその笑みも力無く
空を覆う雲は
　灰色に変って行った。

視線をそらすと松の木が、燃える夕日の中にくっきりと黒く浮き彫りのようになって一度に世界が厚みを増したように感じられる。

私は立ち上って歩き出した。ついさっき迄遊んでいた子供達によって描かれた白いチョークの線が陽の遠ざかり行く地面に冷え冷えと取り残されている。遊び疲れて本能的に母のもとへ帰って行った子供達……石けりのわが描かれている。私は足もとの石をポンとけって丸の中へ入れ二度三度くり返してみた。私も小さい時田舎に住んでいた頃夕げの香の漂う頃迄原っぱで「かくれんぼ」や「陣取り

」をして遊んだ。もう一度こんなことをして遊べる時代があったらと渾然とした心が胸をかきまぜて行った。石けりの円を眺めていると、家にある緑色のフラ・フープを思い出してひとり笑んでしまった。だんだんと陽は沈み、夕闇がせまって木立ちもかすむ存在となった。人影も消え牛乳屋の車の音が遠くからやって来て又遠くへ消えて行った。

闇
　ひとつひとつ下界のものを隠してしまう。
きれいなものも
けがれたものも
黒いベールの中に包む
音までも闇にとけてしまう。
闇の世界
悪魔の世界――それとも
ねむりの精の置きみやげ。

すばらしい人生がどこかの曲り角で私を待っているような気がする。今迄は就職試験に紛れて私の心から忘れ去っていた。細い路から笑い声が聞えたように感じた。ぼんやりとした燈火が目にしみる。もうすでに夜の世界に入っているのだ。私はもっと明るく若々しく意志の強い人間になって立派に社会へふみ出して行こう。こう思うと急に足み家路へと急ぐ。空からは星がこれからの私の人生コースを眺めるように幾つもまたたいて、皆私に、私の為に輝いているような気がした。

愛すべきはママ先生

三年　長尾幸子

高校生活三年間をふり返って見て、心の中にのこる先生は数多くいるが、その中で一段と輝やいてのこるは我がクラスの担任の「ママ先生」なる所の玉置先生に他ならない。

口をキッとむすんでジイーとにらまれたらいくら心臓の強いイタズラの好きなオサル（誰れの事?）でもおとなしくなると云う。それはそれはにらみのきいた先生だ。そして我がクラスの生徒たる我々は男だか女だか解からないような連中が半分はいるという有名なクラス。先生も持ち前以上のにらみをきかすのは無理のない話。これではさぞ大変とある生徒は先生がやせてしまわないかと心配したりなげいたり。でも生徒は知らぬ顔でふるまうので先生きっと心の中で悲しんでおられる事だろう。それでも卒業までに何とか女として認められるような生徒にしてやろうと、このクラスを受け持った時からそう心の隅っこの方で考えたに違いないのである。それに反する我がクラスの悪童連、卒業を間近にひかえた今は先生もあきらめているようだ。それにしてもおあきらめ下さる前までは有難たい話を長々と聞かされたもんです。お話をして下さる先生も偉いがそれを聞いていた生徒はもっと偉かったと思うのですが……。お話の最中生徒の耳は別々に使いわけられるのですから器用なもんでした。口はもちろん発声してましたよ。先生は知っているのに知らぬ顔でお話を続けておられる。そんな先生に心の中で「有りがとうございます」てお礼を云ってました。

先生は我がクラスの遅刻の多いのを気にしておられます。無理もありません。我がクラスの生徒の大半は本鈴を予鈴のつもりで平然と校門に現われるのですから。先生はどうにか生徒に改めてほしいと願って毎朝その有りがたいお話が聞かされます。原因は玉電にあったのです。亀電と云われる玉電に乗る生徒は遅れるのが当りまえのように考えているようです。それでも先生はきまってこうおっしゃいます。「玉電が遅れるのはいつもの事なんですから、5分や10分位早く出て来れば良いでしょう。だめですね。いい気になって遅刻していたんでわ」と。でも先生だって……おわかりでしょう。すべりこみセーフって日が多いそうですよ。「生徒は知っている」ってこの事でしょう。

先生はよく生徒と争いを起します。大抵の場合は生徒が怠けている時に起ります。でもそれも親しさのあまりかと思います。そんな時の先生には若さを感じさせられます。どんな若さかって？　おきゝにならなくてもおわかりでしょう。まさに「女であること」って所を充分に発揮してましたもの。

先生の書斎である家庭科準備室はまるで物置き同然。そんな中にいる先生は芸術家の感があるからでしょう。何故かって？　ウフ……芸術家って生活に対して見むきもしませんからね。つまりあんまりキレイにしていないってことです。その物置き同然の書斎を掃除するのが我々。掃除は男の子に負けない位嫌いなんですからきれいになったと云う方が不思議なくらい。あまりエスケープを行使すると、翌日のHRに有難いお話を受けたまわる事になる。でも無理なんですよ。英語と掃除は性に合わないって生まれた時から神さまが私に囁やきますもの……（そんな事ないでしょう。）エヘン！

二年生の時だったかクリスマスにフォーク・ダンス・パーテー（ティーってほどのものでは……）が開かれた、もちろん先生も仲間に入っていた。男の子がいないのにって心配ですか？　いゝえ結構下手な男の子を招くより我がクラスの名手ぞろいでは男の子の役に大丈夫半分が引き受けます。そして男の子より息が合うから見ている方も気持が良いと云うわけで始められました。レコードの音は一段と高くなり皆一斉におじぎに始まるフォーク・ダンスを踊り始めた。でも良く見てごらんなさい、輪の一ケ所で少しずゝテンポがおそいカップルがありました。誰だかおわかりでしょ？　そう先生なんです。でも一生懸命踊っていました。リードする生徒も冷汗かいたそうです（足をふまれないかと）。皆この半日を楽しいクリスマス・パーテイの中で過ごすことが出来ました。それも先生が生徒と一しょに溶け合っていたからでしょう。いつも先生はすゝんで生徒の中に溶け入って下さいます。云うなれば話せる先生として我々は非常に有りがたがってます。

生徒が学校の用事でおそくなった時（もちろん公用ですよ）先生は良くさし入れをして下さいます。その時の生徒の感激のしょうって他にない位なもんです。やつぎ早や口に持って行く手を見て先生目をパチクリ。食べながら「先生オイシイ！」「先生話せるな」「先生の受け持ちで良かった」なんてとびだす言葉を聞いて先生嬉しそうな顔しています。こんな時思っちゃうんです、「愛すべきはママ先生」って。

どうがこんな悪童ではありますけれどいつまでもお忘れにならないようお願いしてこのへんでペンをおく事にします。（後がこわいもうこのへんでやめないと）　サヨウナラ我がクラスのママ先生！

偶感

三年　小川和子

〃天才と凡人との差は紙一重である〃とは、誰が言ったかれ忘たが同様に「生」と「死」についてもそうした事が云えるのではないだろうか。即ち「生」を得た者は同時に「死」も得るのである。しかしながらこの両者は、同時に存在しながら前者は未来に飛び立つ出発点を意味し、後者は過去を回想する終着点を意味しているのである。そしてこの「生」と「死」のほんの僅かな隙間に於て私達は学業を終え、社会の一員となろうとしているのであるが、この隙間からは絶えず、交通事故、天災、病気、そして人類を破壊しようとしている原水爆等の被害から生じる「死」という隙間風が吹きすさび我々を常におびやかしているのである。〃背くらべ〃という歌にもあるように、柱に印した子供の成長振りを喜ぶ事も、裏を返して見れば実はその子供はそれだけ「死」に近づいたのであって、かえって悲しむべき事なのである。しかし、人間というものは人生の花に到達するまでの成長振りを非常に喜ぶ習性を持っているものなのである。

私達は人生の花に到達するまで生きている自信があるだろうか。私達はまだ若いからと言って誰が「死」から免ぬかれる等と保障してくれる人があろうか。百才の老人は一才の赤ん坊より早く死ぬなどと誰が予言出来ようか。

このように幾ら若いからと云っても、「死」という絶対の前に於ては青年も老人も何んら変わりなく平等なのである。むしろ年老いた者の方が、「死」に対する心の準備が出来ているから、心が常に平安で敬虔であるように思う。とは言いながら、私達若い者は若さに溺れて目前の「生」をのみむさぼり「死」について真剣に考える者が少ないからと言って無理に悲しむ必要はないように思う。何故なら若い時にはやはり夢と希望に包まれていた方が良いと思うから——。しかし、青年特有のあこがれである「死は美しい」という考えからは脱却すべきだ。死を人生の敗北からの逃避の場所と決め込んではならないと思う。自殺という事は一見、美しいようだが一番醜く、卑怯な手段である。私達は毎日毎日を生きて行こうとして、逆に死への行進を続けているに過ぎないのである。だからといって人間一度は死ぬのだから等と自棄（やけ）を起してはならないのであって、どんなに小さな取るに足らない命であったとしても感謝しつつ邁進したならば、必らずやそこに生きる喜びを見い出すに違いないと思うのである。

×　　×　　×

今まで考えてもみなかったこんな事を、卒業間際になってふと心に浮んだので筆をとってみた。

美しい人に

三年　小長光和子

誰もが望む様に、私も美しい人になりたいと思う。そしていくらかでも近づくことが出来たらどんなに良いことだろう。私は決して表面的な美しさを求めようとは思わない。生れ持った自らの美しさというものが有るならば、ぜひそれをいかしたいものだと願う。だが、あの美人と称せられ人達は本当に美しい人なのであろうか。どうかそうであってほしい。生れ備わった美貌は尊いものだと思う。そして又その美しさをおろそかに出来ない責任が有ると思う。人間が美しいと考えるに値したその整った目鼻立ち、口元、そしてやすらかな眉は、私達の心を引きつける。しかし美しいバラにトゲが有る様に、近づいて触れようとする手がさけて、血が流れる様なことが有ったなら何と悲しいことだろう。どうか美しい姿の人が、そのまゝ美しい人と信じられる様でありたい。

やがて私達は社会の一員となり、その人その人の社会に応じて、心も身体も変えなければならないだろう。だが、いつどこで会っても気持の良い姿と心で挨拶を取りかわしたいものだ。ある時電車の中で中学時代の友人に会った。会ったと云うより見かけたと云うべきであろうか。長くつり上った眉と厚いドウラン化粧は、彼女の面影をすっかり変えてしまって、足を組み合せながら同僚と話している様子は、近づきがたい何物かを感じさせた。元々素顔の美しい、すっきりとした彼女が……。と思いながら、ジット彼女の横顔を見つめているうちに、自分の身なりが学生服であったのに気づいて、ホット安堵の胸をなでおろしたことがあった。学生の立場と、早く社会へ出た人とは自ら違うにしても、清潔な感じは失いたくないものだとつくづく思う。髪を赤く染めることも、爪を赤く塗る事も、イヤリングをすることも、そして流行を着ることも、それで美しく見良いものとなるならば、決して悪い事とは思わない。むしろ好ましい事だ。しかし身に応じた美しさは、銀座のウインドウの様に、豪華にキラキラと飾ることではない。一人一人の個性が、その時その時に応じて発揮されるのは見良いことだ。私達は造ろうとしなくても、自然に備った生々とした若さを持っている。このつやつやとした柔肌は若人の特権だ。だが又この特権は、往々にして忘れられ、けば立った衣で隠されてしまう。そして自らが生きた花であることを知らない。床の間に花を飾る時、造花をさそうとは思わないだろうに。

美しく見せたいと願う本能は、何と人間の心を向上させることか。私達は一人一人、心ゆくまで話し合うわけではないから、その人なりを評価することは、はなはだむずかしかい。しかしその人の身なりや仕種は、その判断のポイントとなりがちだ。どことなく、奥ゆかしく深みのあるまなざしは、なつかしく、喜びにつけ、悲しみにつけ、大手を広げて迎え入れてくれる故郷だ。誰からも慕われ、愛され、慎み深い口元は、いつも微笑を忘れない。どんな苦境に陥っても、どんな災難に会おうともそれを不幸と思わず、焦らず、迷わず、自分に与えられた試練に耐え、嵐の後には黒い雲間から、さんさんと太陽が輝くことを思い、明日という日に望みをかけて、その日その日に精を出し、そうそうに立場に立たされ、試錬に耐え得る自分になったことに感謝することが出来る人になれたら、その人は本当に幸せな、美しい人だと思う。

その為に読書をしたり、友人と話し合ったり、体験談を聞いたり、色々の事をしてみるのも良いことだろう。どんな些細な事でも、どんなにつまらなく思える事でも、一応自分の心に入れて見ることも必要ではないだろうか。そして又、微妙な心理をつかむ鋭さと、常に向上しようとする真剣な気持を忘れてはならないと思う。

誰もが望むように、私も美しい人になりたいと願う。そして毎日近づこうと努力する。

断想

三年　滝沢由美子

自然と孤独に隠れ家を求めるという詩人を思う。彼等は果して充分に孤独と自然を愛し得たであろうか。彼等の想像の、彼等の批判の、彼等の熱情の根は、一体どれだけ伸びているのであろうか。

× × ×

昨日は「ハイネ」を読み返した。詩を読む毎に思う。偉大な詩人であればある程、その詩がその詩人のナグサミの口吟みではないだろうかと。そして私はその詩人の心の底に秘められた真実の感情、誰に向っても秘めて口吟まなかった自然の賛美の声をききたいと思う。それは夢幻をつかもうとする私のわがままかも知れない。

詩の最後は〝沈黙〟の二字に帰するという。

× × ×

神という得体の知れない高遠なるものに対して、私は少女（？）らしき憧憬を全然もっていなかったとは云えないだろうけど、信仰――それは温室に咲く美しい抽象の花ぐらいにしか考えていなかった頃の私、過去の全てに余りに概念的な信仰なるものを私にそえつけていたから……。

信仰は亡命の安息の源泉であるとか、全ての浄福の源であるとか……。しかし、信仰は人間そのものの心にしっかりと横たわっているものである事を、私はこの頃になって知った。私はふと祈りたい時がある、一切の利己心を捨てて。

偶像崇拝が必ずしも信仰ではない。信念に生きる人生の生活が浄福の源泉でなくてなんであろう。

信仰は他事だと思っていた。その時の私自身の姿は、ウソだったのであろうか？……。

× × ×

サッソウと茂った木々も、一尺にたらない小さな木も、高い天から見下ろしたら、同じ高さに見えるかも知れないと考えた事もあった。しかしこの緑の木々にとって、成長は最大の喜びでなくてなんであろう。いじけようとしていた自分の姿があわれに思えてならない。

社会に出るに当って

三年　田中春美

さんさんと照る日光の下で明るく清く、青春の情熱をみなぎらせ、勉強に運動に真剣に取り組んだ高校生活に終止符を打って、私達は一歩実社会へ飛び立って行こうとしている。学校という温床から生

後十八年という若々しい苗木は現実という畑、すなわち社会へ植え変えられる。畑といっても肥料分のある土地の肥えた所ばかりでなく砂地や赤土ばかりの所もあり、又何時風雨に荒らされないとも限らない、という様に社会は決して生やさしいものではない。その何分の一かを既に就職試験というもので味わった。そこには入学試験と異って面接試験というものもあり、縁故という風習もなくなりつつあるとはいえ最後の決定に於てはいかに強いか！　実社会に於ては〝ない〟といわれている事でも実際にはそのほとんどがあると云う結果であった。社会に対するときそれをそのまま受け入れることは出来ない。理想と現実があまりにも離れていて正反対に近いものだと云っても過言ではないであろう。それに対して社会に逆らうのでなくある程度対応して準備して行かねばならない。しかしそれはあくまで善に対する善い準備であり善処理でなくてはならぬ。

社会に於ては学校と違って多くの誘惑もあるであろう、けれどもそう云う悪に対してはあく迄も順応してはならない。

今迄は学生だからという甘い寛容性を計算に入れて行動した事もあったのであろう。しかし一歩社会に踏み出したら年令の差、男女の差なく大人として同等に？……扱われる。だからといって実社会に対する恐れで躊躇する必要もない。何時の日にかは学生では計り知る事の出来なかった労働の喜び、真の人間の生き方を見い出し得るであろう。まだ味わぬ実社会に対する興味と希望を夢みつつ実社会への第一歩を力強く踏み出そうではありませんか。

論文

吾々と思想

三年　大越捷夫

私はこの思想統一の為されてない、たどたどしい文を、何の目的で、何故に提起したか、明言する事は出来ない。ただ私の現在の状況において、出すべきものだと感ずる。先ず吾々の思想の根本たる人間観から出発しなくてはならない。何らかの概念、観念によって決定しうる以前に存在する一つのもの、それが人間である。即ち人間は、最初は何者でもない。世界に存在し、後に自身によって考え、定義づけられたもの、であるからして、吾々（人間）は、吾々（人間）自身、吾々（人間）を形成していくものである。実存は本質に先立つ、という基底の観点からして、人間の本性などはありえず、自己形成において、問題――問題ではないのだが――が生じて来る。吾々は先ず実存する。そして未来に行動を起すもの、未来に投企するものである。即ち生存は投企する事である、投企の前には何者も存在しない。吾々が一枚の絵を画く時に、そこには画くべき一定の絵はありえず、創意と創造とがあるのみである。画くべき絵とは画き終えた絵であり、先験的な価値は存在しない。吾々（人間）は正に

この一枚の絵である。かくあるべき人間なぞありえず、自己の創意と創造とが自身を創っていくのである。即ち自己が自身の道徳を創っていくのである。故に吾々の行為は、如何なる一般道徳をも為すべき指示を与える事は出来ない。吾々は自由に選択（投企）出来るし、それが吾々（人間）である。個々の投企が特殊なものであっても、それが普遍的価値を持つ事を、吾々の投企が全人類をアンガジェ――人を自分の中だけに閉じ籠らせず、社会に参加させるという様な意――する事を、即ち吾々の行動は決して個々のものではなく、吾々の投企は常に他人に理解されており、吾々も又他人の投企を理解する事により普遍を築くものである事を、人間の普遍性とは与えられたものでない事をより明確に認識しなければならない。さて、吾々が未来に行動する時、未来に投企する時、無暗やたらに、無機動的に選択しているのだろうか。これは吾々が自由なアンガジェマンによって自己形成するという事、個人に、全人類にアンガジェする選択の責任を負うているという事、によって解消される事である。道徳が吾々自身により創られるものである時、あらゆる世俗的道徳が為すべき指示を与える事が出来ない時、吾々が投企する時に、吾々の価値判断が漠然と、広汎に過ぎる時、吾々の行動はどうあるのであろうか。結局本能によって、こうしようと自分を駆りたてる或る方向へと進むものである。吾々のこうした無機動的に見える行為が無動機なものでなく、かつ普遍なものである事を理解しているならば、吾々は実存について全責任を負うているという自覚が起るであろう。ここから来る責任感、不安は避けえない事だが、絶望に沈潜し不活動へと導く訳ではない。

何故ならば、この様な不安は行動の一部分であるからして。ではより具体的に、部分的に述べていこう。例えばある学生が何らかの問題に直面し、その選択を避けえない時に、或る教師等に助言を求めに行ったとしたら、その学生は教師がどんな助言をするか、少しは心では知っているに違いないのである。という事はその学生は自分をアンガジェ――ここでは人を約束や義務によってしばる、という様な意――している事であり、吾々が吾々自身を創るという根本の真理を曲げている事なのである。私は高校を卒業して進学するか、就職するかは随分と迷った。早く生産社会に出て有意義と思う仕事をするか、それとも親の意思通り――後には違うのだが――進学するか、私の早く生産社会に出たい感情を犠牲にする程親を信頼していると感ずるならば、私は進学するだろうし、反対ならば就職するであろう――初期の漠然とした意で、単純な意ではない――。私の生産社会に出てする行為が実は何の役にもたたぬ事かもしれないし、又進学する事が我家の単なる習慣であり、無意味な事かもしれない。しかし私は二つに一つを選択せねばならない。二つの可能性を前に一つの可能性を選ぶ場合、可能性を可能性たらしめるものは、その可能性が選択されて初めて価値を持つものである。感情の価値が非常に曖昧（あいまい）である時、感情の価値を決定するのは、私が進学か、就職かを選択した、その行為をした場合の事である。事実私は私自身で選択した。私の才覚と決断で、私を真に駆りたてる方向へと――私がかくあろうと意志したものではない――。感情についての理解が困難で、誤解される恐れがあるので言い添える。それは、私は決して感情に聞き、感情に基いて行動したのではないし、感情に聞き、基いて自分を導く事は出来ない。私は自分を行動に押しやる真正確実な状態を自分の中に捜す事も出来ず、又私が行動する事を許す様

な概念を一つの道徳に求める事も出来ないのである。

感情は人の為す行為によって形成されるものである。さて、貴方はかく反発されるかもしれない。或る学生が進学に際して、教師に助言を求めに行ったとしても、それは当然の事あり、又教師の職業的価値—敢えて職業的を附する—はそこに認められるのである。何故ならば、教師は客観的な眼で、彼が何を為し得るか、彼の性格は、学力は、彼と家庭との問題は、等々を調べ、検討して決定論を打ち出さないまでも、指針を与えるだろうし、そうすべきものだと。しかし教師が生徒を知る範囲と同様に生徒も又教師を知っているのである。彼が教師の許へ行ったという事は彼は既に答を選んでいる事なのである。吾々は本質的に自由な存在であり、自由を求めているのであるからして、教師は例え助言を与える事が出来るとしても与えるべきではない。吾々は、吾々自身、決定しなくてはなくてはならないし、決定するであろう。人間は自ら造られるものであり、人間の本性は存在せず、その本性を考えるところの神は勿論存在しないものである時、何者かに頼ろうとする事は究極において神の、宗教の存在を認める事になる。吾々（人間）は、吾々自身そう考えるところのものであり、自らそう望むところのものである、即ち吾々（人間）は、主体的に自ら生きる投企なのである。吾々は主体性なものであり、主体主義——厳密な実存主義ので意の——を取る以上、他人の存在については大きな関心と期待とを示さずにはいられない。吾々は自分の実存については自分が実存する事を常に知っている。同様に他人の実存は決して蓋然的なものではなく、吾々は他人の実存を証明したり推測したりはせず、他人の実存を事実として肯定する。他人の実存は吾々に二つの相反した態度を取らせるであろう。

一に、吾々は他人の見た自分を否定して逆に他人を一個の客観として見ようとする事が出来よう。又他方において、自由としての他人を我物にしようとする事が出来る。吾々の存在の根本においては、他人を客観化しようとするか、或は同化しようとする企てそのものなのである。この二つの企ては相反するものであるが、循環な関係にある。この問題を考察し、掘り下げていくと、未だ私が充分に啓蒙していず、又消化していないので、論理をまとめる事が出事ない。しかし現在の私の段階において小部分に結論すれば、吾々（人間）の行動は全て挫折せざるをえないのである。何故ならば吾々は主体性なものである。そこで自己と他人との関係において吾々は自己をあくまで主体としての自由を確保しようとするが、他人が前面に現れ自己を見るという事実によって自己を客体化する。であるからして自己が主体であろうとする企は挫折せざるをえないであろう。しかし吾々は根本的に自由な存在であり、この自由を価値として認める事により、解決が見出されるであろう。最後に例え一部分の共鳴にしても吾々の主義を押し進めようとするならば、吾々を襲う最大の武器である「ＢＩＢＬＥ」と「共産党宣言」には確固たる力で対処せねばならない。

吾々の主義が革命意欲を生み得るものである時、「唯物論」が吾々に襲いかかる比重は大きい。だが根本において吾々は、人間を物体視しないところの主義である。

詩

十七才のモノローグ

三年　荒川弘悦

十七才の僕の世界を
わずかな歓喜が
つかの間の情熱が
静かな感傷が
訳の解らぬ沢山の絶望が　そして
それらを結ぶ無気力な青春が
目まぐるしく飛び交っている

夏の少年は　（〇月〇日）

男の体臭は
少年の鼻腔をもくすぐる

少年はそっとポマードをつけ
煙草を吸ってみる

息苦しい目まいと
虚脱の
陶酔を知る

少年は
床下の古い香の梅酒を
こっそり飲み乾し
息衝く体に驚きもする

瑞々しい肉体の気迫
少年は鏡に向い
髭を剃る快感にほくそ笑む

鋭い白刃を肌にあて
冷たい感触に
流動する赤い血を想う

ふと　腕の柔い隆起に
唇をしのばせ
少年は痛い程に吸い……
小犬のように噛んでもみる

しのびよる
不思議な感傷に
少年は
物思いに沈む

夏……
なつの少年の
躍動する体

強烈な太陽に輝く緑葉は
少年の心を奪う
生命のほとばしり

地に舞う葉漏れ日と緑陰に……
窓辺に寄る少年の溢れる生気

少年は深く呼吸をつき
歌をうたい始める

愛に……（〇月〇日）

そんなにも
移ろい易いものであってよいのだろうか
そんなにも
好い加減なものだったのだろうか

全てを超越した
最上のものと信じていたのは　一時的な
心の戯れでしかなかったのだろうか
盲人の想う色彩の美のような
儚い偽りの……

皮膚で感じ　確め合う
動物共のほんの一時の陶酔のみを
真の愛だというのか

明るい電燈の下で
薄赤く上気した頬に
まつわる君の鬢を見つめて……

夢の中で　切なく君の血を呼び求める
何時からともなくこの体に流れ始めた
意のままにならぬ血の衝動に……

真暗な　ガランとした室に戻り
外燈に白くきらめく雨の夜の硝子窓に
フッと熱い吐息を吹きかけている自分……

こみあげ　焼き焦げるような
激しい感情の疼きを　単なる少年の日の
悶えとして受け入れてしまうのではなく

醜い大人に嫌悪を感じながらも
やがては自分も　皮膚感覚の
虜となってしまわねばならぬ
人間の宿命の悲哀で
せめては癒そう

冬が来る　（〇月〇日）

しっとりと——
晩秋の物静かな夜の雨が
音という音を吸い取ってしまい
僕だけが夜遅くまで
明るい燈の輝きの中にうずくまっている

何時のまにか——
僕はひどく老け込んでしまい
輝かしい時の想い出だけが
僕を取り巻く

冬なのだ——
夕方　町を歩いていたら
からっ風の様な冷たい風が
人の見えない町通りを吹き抜けていった

冬なのだ——

又やって来たのだ
一年という月日が再び
無意味に過ぎ去って行こうとしているのだ

今は夜——
母の作ってくれた綿入れを着て
机に向っている僕……

本当に——
生きているという事は　今ではもう
想い出という無用なものになってしまった
今日までのような
潤いのない日々の連続でしかないのだろうか

僕の室　（〇月〇日）

前から僕の室は
空だったのかも知れない……
今までは気付きもしなかったのだが

このガランとした空虚な寒さが
不安になってきたのだ……今になって

他人の室は　冬の夜の中にも
暖かく光り輝いて見えるようだ

せめてあたりまえの燈(あかり)だけでも
ともしていたい……

時々うっすらと僕の室にも
喜びの瞬くことがある
僕はどっと嬉しくなって
生甲斐を吸い込む
けれど……
又　寒い透間風がその夢を
掻き消してしまうと
僕の室は前の暗闇に戻り
ギシギシきしむ

吹き荒ぶ寒風に身をまかせ
抵抗を忘れてしまう……
意志の無い風のままになることが
快く思えるようになってしまったのだ

十七才の冬　（〇月）

机に肘をついて
乾いた指で
髪の毛を梳いているだけ……

思い出したように
時々大きく息をして
頭を机に押しつけるだけ……

目をとじて
記憶にも残らぬような
たわいない事を考えているだけ……

時計の音を聞きながら
ただ昨日と明日の間の
黒い空(うつつ)を吸い込んでいるだけ……

外は真夜中で
ここにいるのは
自分だけ……

自分だけが
本当に生きているのに
その自分が信じられないだけ……

その事だけが
はっきり解っていて
とても悲しいだけ……

そしてこの落着きのないぬくもりは

十七才半の僕……

〇

すべてが馬鹿らしく
すべてが腹立たしい

〇

ニヒル　そんな粋なんじゃない
無気力　無気力のグータラ野郎！

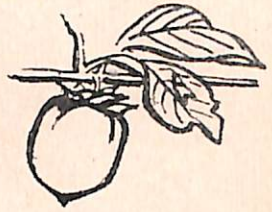
〇

いつも退屈で
いつも信じられないで
いつも不安でいて
自分の成す事も解らずに
結局はそれで終ってしまうのだろうか

〇

歩きたいから歩くのさ
歌いたいからうたうのさ
それでいいじゃないか
つらいからやらないのさ
したい事はするのさ
眠たい時は眠るのさ
それでいいじゃないか

生きててもつまらないさ
けど　死ぬのもめんどうさ
だからなりゆきに任せるのさ



それでいいじゃないか

なんとでも言いやがれ！
どうとでも思いやがれ！
どうせ百年と一緒にいるわけじゃなし
俺だって一人
お前だって一人
みんな一人なのさ
みんなタヌキなのさ
みんなで化かし合うのさ
馬鹿野郎！
破廉恥！
根性無し！
アッハッハッ……
なんとでも言いやがれ

〇

たとえ燃え切ってしまった後の白い灰が
空間をさまよう芥に終ろうとも
俺はかまわない
燃えるのだ
若さの情熱を抑えなければならぬ理由が
どこにあるというのだ
どれ程心が空虚になろうと
若さの火は消えはしない

〇

十七才の生き甲斐ってなんだろう
生きている事の喜びは？

○

いつから　あの澄んだ
青空を見失ってしまったのだろう
夢をつかみたい！
つやつやと熟したい！
疲れ切って　やっとの思いで
枝にぶら下がっている
もう手がちぎれて
落ちてしまいそうだ

心に大きな空洞を持つ
腐りかけた十七才半の柿の実

○

俺はこの馬鹿げた無気力に
酔っているんじゃない
抜け出そうと　あがき　苦しんでいるのだ

○

俺にもやっと自分というものが
解りかけて来たような気がするのだ
自分の愚かさが

過ぎ去った日々に（○月○日）

今まで　何をしてきたというのだろう
燃焼してきた生命は何の為だったのだろう

お前は戯れていたのだろうか
子供同志の遊びにすぎなかったのだろうか
それとも俺達にはまだそんな上っ面だけの
遊戯しか出来ないとでもいうのだろうか

俺はそうは思いたくないのだ
それではあまりに俺が惨めじゃないか
そんな慰み事に誠意をかけてしまった俺が
信頼を　自信を失い　形も掴めぬ内に
夢を投げ捨てねばならなかった俺が
貧しい心で苦しみ抜いて
やっと脱しかけていた無気力に
再びはまり込んでしまった俺が

一度激しく燃えたあの時の俺の生命は
今になってもまだくすぶり続けている
残りの生命は有効に使わねば——
俺はまだ自分が可愛いのだ
つまらぬ劣等感の中に
ちょっぴり自尊心が残っていたのだ

炎よ　この小さな俺の世界を抜け出して
明るく照しておくれ
小さな夢を一つ見付けておくれ
……
真の脱皮期を迎えたのだなどと
偉そうな事は言うまい
しかしこれが
ひとときの　自己を偽る
気紛れだと思いたくはない

新しい春が　（○月○日）

冬の陽の
柔らかな滲透
薄ら寒い
澄んだ大気を通しての……

白く乾いた
河原の石を飛び跳ねて
しのびよる春の
ひざしもぬくもっている

緑草は　夏の　快楽の
茶色に枯れ果てて

静かに水面の揺れ動く
橋を越えた中州の小さな池に
冬の潤んだ青空や白い雲と
色あせて残像を浮べる

水のほとりに腰をおろして
静かな時を過ごそう

炎が　十七才の炎が
何気無くゆらめいて
君の姿を水面に映す

僕の忘れかけていたものを
そっと呼びさましてくれた君の……

やさしくかわいい微風に
僕の心の片隅に長い間隠れていたものが
ひっそりと
清純な移り香を
胸いっぱいに吸い込んで
小さく息衝いて目覚めた夜
空には星があふれ
地には水が清く流れ出ていた

気付かれぬように　今日が

昨日に　一昨日にと　変りゆく間
僕は清水に喉をうるおし
星屑を追い続けていた

ふと　気が付くと
全てのものが目新しく
生々と輝いていて
僕は以前よりも遙かに遠くまで
見渡す事が出来た

そして
十七才という僕の年令が
枯葉のようにひっそりと
水面に消え入ろうともしていた

少年の日に別れを告げよう——
新しい春が　光に満ちた明るい春が
すぐそこまでやって来ているではないか
——それにしても
出会いにつきものの別離は悲しいものだ
でも僕は恐くない
君を失ってもあの美しい星は生きている

冬の陽が今日も
夕靄を赤々と染めて
青い夕闇の漂いくる　遠くの家々の
その向うに　落ちてゆく
水面が夕日に燃え始めた

十七才の終りに（〇月〇日）

自分の殻に閉じこもってはいけない
十七才の俺は
まだ流動体のはずだ
何も解らぬ出来損いの赤児なのだ
行き詰まったら
新しい方向へ流れ出せばよい

自信を失ってはいけない
無意味な存在なんてあるわけがない

自力で開拓しなければならない
己れがある内は未来がある
自分で明日を作り出すのだ

夢を一つ持とう
何でも出来るじゃないか
見ろ！　力がうずうずしているぞ

善意に生きよう
寛大な愛こそ生命の喜びなのだ
若さよ　落胆した時には
肩を叩いて励ましておくれ

けれど……（〇月〇日）

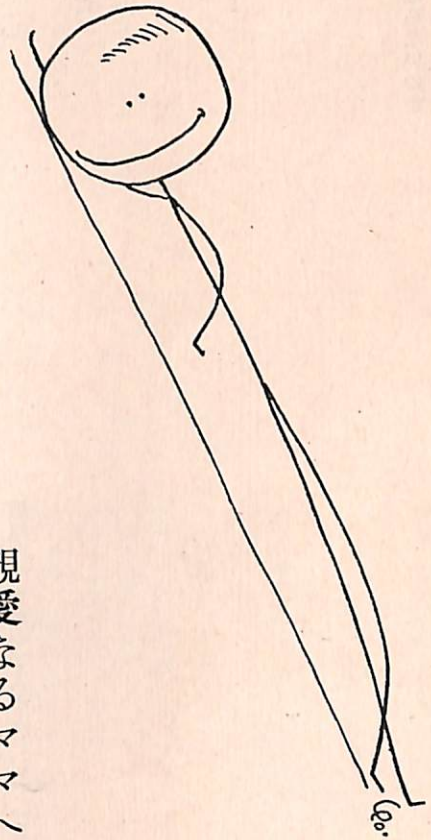
今まで
俺は嘘を書いてきたのだろうか
俺の目にはやはり
自己中心の世界しか映らない
無気力の濃霧が又
視界をさえぎり始めたのだ
自分だけの　目先きの喜びに
囚われてしまう
不信に歪められた
貧しく小さな心
何も解っちゃいない
一体　何が俺を
無気力しているのか
何故いつも不安に
とりつかれていなければならないのか
俺はもう何もしたくない

でも戦わねばならない。
刹那の享楽を棄て
早くこんな泥沼から抜け出るのだ
抜け出さずにおくものか
そうしなければ
そうしなければお前は
本当にどうしようもない奴に
なってしまうぞ

十八才の俺の世界に
無気力の霧が忍び入ろうとしている

——おわり——

創作



親愛なるママへ

一年　栗田節子

ママ、奈美、自分でどうしたらいいのかわかんないの。今日だって、そう。奈美の頭の隅の方に、いつでもあの人がいるの。そのうち全体にあの人のことが広がっちゃうの。今頃、向側の教室であの人は何を考えているのかしら、何をしているのかしら。そんなことで先生の声も黒板も、はるかかなた。気がついて、もう一人の奈美が一生懸命叱るんだけど駄目。いけないなっと思うんだけど、奈美って馬鹿ね、すぐ負けちゃうの。何だかいつも奈美の胸の中で、あの人が微笑えんでいるような気がするの。そう思うと、いつのまにか胸の中が、じーんと熱くなってくるの。

まだ、あの人と知り合って一月しかたたないのに、こんな気持でいいのかしら。友情の限界を越えた感情を抱いていいのかしら。あの人は、奈美のことどう思っているかもしらないで。熱烈でない甘い感情であっても、こんな気持で、あの人と接していいのかしら。たとえ、あと卒業までのわずかな時間でも。

そうだったの、奈美はこれが一番怖かったの。そうすると、奈美が今までの素直な奈美でなくなるの。あの人とお話ししているのは猫をかぶった奈美、気取っている奈美。いやだわ、いや、こんな醜い奈美は。でも駄目。いくら抵抗してみても、結局はこうなってしまう。こんな奈美を見て、あの人はどう思うかしら。

あの人は三年生、だからたまにしか話せないの。でも、奈美は生まれつきのオチャッピイでしょ、たいていあの人を笑わせているの。奈美は、受験間近の緊張したあの人を、奈美と話す時位、楽しくしてあげたいの。そしてあの人は、奈美の話にうれしそうに顔を、ほころばせる。あの人の笑顔は奈美の心に、美しい波紋を描いてくれるの。その短い時間奈美は、幸福を一人占めにしているの。でもあの人の胸には奈美がいるかしら。いいえ、いなくてもいいの。だけど、あの人が他の女の人と楽しそうに話しているといや。無性にくやしくなるの。奈美って矛盾してるわね。あの人の思い出に残らなくてもいい、でも、他の女の人が親しくするとヤキモチ焼くなんて。

だけど、いつまでも無邪気な奈美でありたいの。いつまでもあの人を笑わせてあげたいの。いつまでも、あの人の瞳に奈美を見ていたいの。そんなこと無理かしら。奈美のわがままかしら。でも、もう一度でいいから、あの人のきれいな瞳にうつった、本当の奈美が見たいの。

アラッ、奈美一人で勝手にしゃべってしまったわね。でもね、ママ、わかって、奈美の今の気持。そおっと、あの人の面影を、奈美の胸にしまっておきたいの。

奈美ったら、一人前に生意気を言って。でも、無理ありません。奈美だって、十六才、ハイティーンですもの。

アッ、ママ、その小指のとげ、お医者さんへ行った方がいいわよ。ヒョウソウになったら大変、すごく痛いでしょ。それから、それから、ウフフ……。わかるでしょ。悪い子ね、奈美は。でも、ママ、大好き。だって奈美とママ、二人きりだもん。好きよ、ママ。

奈美

私は絶対へ旅立った

二年　山本喜浩

今日、一時間ばかり前、私はつまらない事で人を殺してしまった。警察がもう私を追って走りまわっている頃だろう。私には時間がないのだ。

私は今、横浜の三溪園という静かな公園の中に居る。私が入園券を買おうと金を出した時、そこに居た女が私の顔を見て訝かった。私の顔は極度に青かったにちがいない。中学生の時にここに遊びに来て、今、私が歩いている池のほとりで鯉に餌を投げてやった事を

思い出した。今日も鯉が水面に姿をみせて、その背びれで静かな波紋を作っている。そう、もうすこし先にところどころ松の木が立っている小さな山がある。その山の頂上から急に向う側は、下を見ると寒気のするほど高い崖になっている。下は海だ。私は今そこへ行こうとしているのだ。記憶に残っていた小道を登って、頂上に着くと私は崖の縁まで行って腰を下ろした。人は誰も居ない。

私はこれから飛び込もうとする下の海をのぞいた。下は岩又岩であった。岩と岩の間に静かな波が遠慮勝に流れ込み、小さな水溜を残して、波は引いていった。春の暖かい日光が私を暖め、私から現実を遠避け、時間の存在を忘れさせた。私は死ぬ事も、生きる事も一瞬間忘れた。しかし、長くは続かなかった。ちょっと足を動かしたために眼下に落ちて行った小石のために、私は死ぬ事を意識しなければならなかった。私の胸は抵抗出来ない力によって圧迫された。すると海と空が混り合ってしまう遠方に殺した若い女の顔が現われ、私に近づいて微笑した。その微笑はやがて断末魔の形相に変化した。私はその女に許しを請わなかった。犯した罪のために殺してしまった女に許しを請うのは馬鹿々々しい事であると自分に言って聞かせた。しかし、何かが私に罪の深さを認識させ様としていた。その何かとは、私の良心か、腐った道徳（私に対して道徳は腐って役にたたないものであった。）か、私には解らなかった。けれども、私は後悔しなかった。なぜなら、パンを一破片盗もうと、人を一人殺そうと、罪の深さを比べるなどという事は、法律にしか通用しないだろうから。少くとも私はその様に考えた。私はしだいに私が直面している環境に適応していくのに気がついた。私は死のうとする決意と罪を意識しまいとする矛盾を気にしなかった。

私は死への興味を深くした。海は広かった。私は生きる希望とあらゆる欲望の無価値を認める事に満足した。殺した女の顔が再び現われた。彼女は私に感謝しているだろうと想像した。なぜなら、彼女は今や全く何も考えなくても良いのであるから。人間にとって考えるという事ほど不幸な事はないだろう。もし私が殺さなかったなら、彼女は生きて行くべき目的の消滅も、日常生活の倦怠も、性欲の罪悪感も、社会の冷酷と殺人をも受けなければならないのだから。

そうだ、私は人生の快楽を忘れ去って居たのが不思議に思った。私は生きている上にすべての目的であるかの様に思われる快楽が、価値のあるものかどうか、改めて考え直さねばならなくなった。もし快楽が目的なら、私は自分の殺した女を可哀相だと思わなくてはならないと気がついた。私はこの事で生への忘れていた希望が目の前にちらついた様に思われた。しかし、私の心は絶望による歓喜で満たされ、他の全ての快楽は偽りであった。

「死は逃避だ」誰かが私を呼び戻そうとしているのが聞えた。しかし、私には逃避であると決めて死を恐れるあらゆる人間に、小さな優越と軽蔑を覚えた。それは快いものであった。

……そうだ死ぬ事は永遠で絶対であろう。誰が理屈をつけ様というのか。はたして生きる目的が発見出来たとしても、それは無益な物だ。発見した目的とは、どの様にしたらあきらめて死んで行けるかという事に他ならないだろう。生きる希望が発見出来たとして、それが何であろう。それは太陽と同じで、常に私達の頭上に輝いているが、私達は一寸たりとも、近附けないのだ。もし近附いたところで、それが全く温度しかない怪物だという事が解るだろう……。

私は目をこれから私の体を叩きつける岩肌に移した。直面している現実によって、私は、この世に投げ出されてから十七年間の過去を思い出そうと苦労した。そうすると、頭の中で思い出が混乱して何も思い出せなかった。私はしばらく目を閉じて思い出の戸びらの前に立ち、どれを開け様かと迷った。私の開けた戸びらは大変古かった。しかし、思い出の中の私は輝かしく新鮮であった。そこでは私はひどく母に叱られて居た。何で叱られているか考えたが混乱するだけだった。次に私は教室に立たされていた。私の目から大粒の涙がぽろぽろ流れていたが、先生は許さなかった。時間が急に飛躍して、私がつい最近愛していた女学生の顔がクローズアップされて私の前で微笑んだ。思い出は結局、この少女に長く留まった。そして、私は少女の唇を奪ってしまわなかったのを残念がった。私は、少女の唇の柔らかさが感じられる様な錯覚にとらわれた。私と少女は田舎道を散歩していた。又ある時は喫茶店でジャズを聞いていた。少女がリズムに合せて頭を軽く振っていた。それらは美しかった。それから、いろいろな事が、人が、不順序に私の脳裡を交叉した。母と父が最後に現われた。私は彼等の未来を心配した。それは全く経済的理由からであった。私は母も父も他人であった事に驚いた。そして、私は人間には過去しか存在しない事をはっきりと知った。

私の心は落着いた。毎日の食事も死ぬ事も、大きくは違わない事に気がついた。私は下をのぞいた。突然、毎日曜日バイブルを片手に教会に通っていた、友人の姿が浮び上った。そして、彼は、「貴様は卑怯だ。大悪人だ。人殺しではないか。罪を償え。」と罵しった。

私には罪を償う気持なぞ、過去へ忘れて来てしまった。もし、世界が私を最大級の悪人であると言っても、私は怒るまい。私は自分自身に対して忠実であったではないか。しかし、私は誰かに、「貴様は社会に大きな意地を張っているのだろう。」と指をさされるのが恐しかった。というのは、私がもしその言葉を反論しても、その否定自身、意地であると言われてしまえばそれまでだったから。もっとも、死への欲望など他人に解らせようとするのが無理であろう。私は女の両親に同情を寄せてみた。けれどもそれは不必要な事であった。なぜなら、彼女にとって両親は他人ではなかったか。両親にとって彼女は愛情と呼ぶあやふやな理由で縛りつけた面白い玩具であろう、と私は感じた。これは私の行動に対する自守であろうかと思い直したが、そうではなかった。

行こう。私はしだいに私の経験した過去の全ての事が、分解し結合して大きなかたまりに成長していくのを見た。それは一生涯に一度しか見る事の出来ない貴重（いや貴重などという事は現在の私には関係がなかった。）なものであった。私はそのかたまりの中に自然に溶け込んでいった。かたまりは大きな円になり、生きる事は無益だ、死こそ絶対であると叫んでいた。私は全く満足した。私は崖の縁に立ち上った。太陽は西の空に没しようとしていた。はるかの海に小舟が一つ漂っているのがかすかに見えた。背に太陽を受けて私の影は眼下の海を走って小舟に接近しようとしていた。私は最後の経験を見守った。経験の中にこそ真理の有る事を見つけた。死の興奮の中に在って、冷静を守っている自分がそこには在った。私は体の重心を前に傾けて、足の指の力をぬいた。私は何も言わずに永遠と絶対へ旅立った。

（完）

これからだ

三年　岸本　宏

木内平野に、今年もまた野分の吹きすさぶ頃となった。刈り入れの終った畑は、一面に遮ぎるものもなく広がっている。時折、その茶褐色に広がった耕地から、黒い煙が巻起るようにカラスの群れが飛び立った。その先はずっと霞んでいて三春沼も見通せない。

活之進は葉の一枚も残っていない柿の木に凭れて、墨画のようなこれらの景色を見るともなしに見ていた。十一月半ばの空は鉛色に重く、どんよりと曇っていて、今にも泣き出しそうな気配だった。

この地方の農民に課せられる年貢は年々増す一方であった。今年も代官手賀沼宗膳は、しぼれるだけのものを、貧しい憐れな百姓達からむしり取っていった。活之進は冷え切った空気に包まれたまま其処に立って、物思いに耽っていた。

「俺の家には正月の分に残してある三升の米の他に、ただの一粒だって米はねえのさ、親父が、どうやって年を越そうかって、毎日思案してるけども、どうにもならねえだ。活之進様も知ってるように、俺の家は代々本百姓だ。親父も、兄貴も、おっかさんも、妹まで、みんな一生懸命働いてるだ。宗膳が来るまでは、俺のとこは勿論、この地方の村々全体が貧しいなりに明るく、潤があっただ。村同志の寄合だって盛んだった。畜生、それがみんな、あの……。」

あの時、耕助は泣き出しそうになりながら苦しみを話していた。もっともっと苦しめられている連中が、他にも沢山居るのだ。

五年前に、治めている地方全体の百姓達から慕われていた菅平行長が上総の亀山に転任して、その後に宗膳が赴任して来てからは、それまでの状態は一変した。農民達の自由は悉く制限され、年貢は急激にふえ、代官の陰口を叩く者は容赦なく投獄された。非力な百姓達は、この横暴な代官の行為に涙を呑んで従わざるを得なかった。疑り深く、百姓達の反乱を恐れた宗膳は彼らの会合を厳しく取締った。その為彼らは役人の目を盗んでは危険を犯して月の無い晩などに耕助の家の屋根裏部屋で寄合を開いた。

この会に武士の子である森木活之進が出るようになったのには理由があった。

森木の家は旧家として昔からこの地に居を構えていて、農民達との間も極めて円満であった。祖父の代から今迄、百姓や商人の子供を集めて手習いをしていたので、自然と彼らとも親しくなったのである。この為宗膳が来てからも、森木様だけは自分達の味方だ、と彼らは思っていた。活之進は、小さな時から耕助とは仲が良かったので、身分を全然気に懸けぬ彼は何かと耕助の家に出掛けて行き、百姓の本当の姿を知るようになった。活之進の思慮深いことを知っている彼らは、彼が寄合に出席することを拒まなかった。

活之進も今では十八、立派な若者である。その若さに溢れた新しい物の考え方は、古い見方に執われている村の長老達共十分に太刀討ち出来、それを打負かすだけの情熱を持っていた。彼は急進的な考えを持ってはいたが、もう机上の空論では我慢の出来ない処にまで発展している百姓達の高ぶった気持をいつも穏健な意見を出して

柔らげていた。

昨夜は、近郷の村々の代表者が闇に紛れて集って来て、今迄にない内容の充実した寄合が開かれた。会が進むにつれて座の空気は緊迫していった。そしてその議論も、伊助の一言によって究極に達した。

「もうここまで追い詰められたからには、わしらの手で一揆を起すより他に道はない。」

と、拳を握り、目玉をぎらつかせて言った彼の言葉に、座の者は皆、同感した。彼らが頭の中や胸のうちで考えていたことを、伊助がずばりと言ったのだった。

伊助の口から一揆を起すことに対しての具体的な考えが飛出そうとした時、それを遮ぎるように活之進は話し出した。

「伊助さんの言うこともっともだ。しかし、みなさんよく考えてみなさい。ここでもしも貴方達が一揆を起した処で三日と言わずに鎮圧されてしまうのがおちでしょう。」

彼の声は柔らかかったが、彼らにこの無謀な計画を思い止まらせようという一心が漲っていた。

「お言葉ではございますだが活之進様。わしら近郷の村々が総出で立上ったならばたとえ宗膳とはいえわしらの前に屈しますだ。それとも貴方はそんなことは馬鹿なことだと言うのでございますだか。」

伊助は膝を進め、額に青筋を立てて活之進に詰め寄った。

「そうは言わない。しかし、貴方達の手だけではある一線までは行き着けるだろうが、それから先に進むことは出来ないでしょう。そこには私や貴方達では考え、推測することの出来ない何かがあるのです。」

活之進は伊助の気迫に負けないだけの気迫をもってそれに答えた。だがそれだけでは納得出来ない伊助は更に反論した。

「それでは、その、わしらでは考えられねえ何か、とは何なのでございますか。」

「それは、まだ若輩な私には良くはわかりません。しかし、これだけは言えます。心の動揺です。こればかりはその時になってみなければわからないからです。今此処で、仮りに貴方達が『俺達に限って絶対そんなことはない』と言った処で、それがその時になってどう気が変わるか誰も確信出来ないでしょう。もしもそうなった場合はどうします。全体の足並みは乱れ、ことは不成功に終るばかりでなく、村々全体が処罰されるでしょう。親兄弟をはじめ親類縁者までが死罰になるとも限らないのですよ。」

次第に語調は強まり、まだ、眉、目、口元の辺に子供の匂いの残っている日焼けした顔には、情熱に燃える紅がさしていた。

「それでは活之進様は一体どうしたら良いとおっしゃるだね。一揆は駄目だ。このままで様子をみろ、ではもう我慢出来ませんですだ。」

伊助も必死であった。目の色が変っていた。

「このままで居ろ、とは言わない。一つ間違えば村全体に禍が降り懸かる一揆の他に、まだ方法はあるはずだ、と言うのです。」

「他に方法がある？　一体何ですかその方法と言うのは。活之進様はれっきとした御武家のお子ですだ。何んとおっしゃられても、わしらの本当の気持はわかりゃしませんだ。木内の百姓の苦しみは口で言い尽せるもんではありませんですだ。」

暗いどん底の生活を強いられて来た伊助の怒りは爆発した。そして、それは活之進の心に深く突き刺さった。「活之進はれっきとした御武家のお子ですだ」この一言は活之進の心をひどく暗くした。ここぞ！　という時になると、彼らは何時も自分達を隔ててしまう。彼らと共に苦しみ、悩もうとするものを、追い払ってしまう。活之進はくやしかった。伊助の言ったことがくやしいのではない。彼らがこれだけ彼らの中に融け込もうとしている自分を、未だにそのような目で見ているのがたまらなかったのだ。

座にはその後沈黙が続いた。伊助も目を見開いて、黄色く変色した畳の端をじっと見据えて動かなかった。耕助の妹みつの運んで来た茶が、座の中に置かれたまま誰も手を出す者もなく、もの淋しい湯気を立てていた。

一同はこの時、活之進の話しにより考えがぐらついて来たことに気付いていた。

この異常なまでの熱っぽさをもった寄合は、東の空がようよう白んで来る頃まで、ぴーんと張った糸のような緊張の中で続けられた。

間をおいてぱらぱらに帰って行く人々の顔は青白く、その瞳は極度の疲労のために赤く腫れぼったかったが、底の方から鋭く光りを放っていた。

活之進は、こうして夕闇の迫った土手の上に立って、それら帰って行った人々の顔を、今一度思い起していた。

はっと周囲の暗さに気付いた活之進は、底冷えのする寒さに、ぶるぶるっと胴震いした。土手の一本道を家路につきながら彼は、口の中で小さく、しかし力強く呟いた。

「きっと留めるぞ、俺はきっと方法を見つけるぞ。いつかきっと俺は真底から彼らと苦しみを分ち合えるようになってみせるぞ。」

しかし、彼の決心などどこ吹く風と、代官手賀沼宗膳の悪政は飽くことなく、毎日毎晩のように繰返されていった。

活之進が家居の在る所まで来ると、中から、女の忍び泣きが、細く哀調を湛えて聞えて来た。この女の夫は、一昨日の朝、代官所の前を通りがかった時、日頃の反感がむらむらっと湧き起ってきて、代官所の塀へ向ってつば吐をきかけたのであった。折悪しくそれを代官所の役人に見つかってしまい、その場で投獄されてしまったのだった。その仕打ちに女は村人の慰めにも耳を貸さず泣きつづけていたのである。

活之進は一度立止ったその家の軒先から、再び心寒い思いで離れながら、今迄に起った数限りない代官宗膳の惨忍な行為を苦々しい気持で思い出していた。

由良村で十三人の百姓が縛り首になったのは宗膳が赴任してから一年足らずのことであった。その日、活之進は耕助と二人で伊助の家に来ていた。夏の赤い大きな太陽が山の端に落ち込もうとしていた時、村の広場の方でざわめきが起った。ただならぬ気配に伊助は様子を見に外へ出て行ったが、顔色を変えて戻って来ると心配そうに言った。

「大変だ、この間、野良仕事をしてたで代官の見廻りに気付かずお辞儀をしなかった弥彦らが役人に引っ立てられて行くだ。あの様子だと殺られるかもしんねえだぞ。」

伊助の予感は不幸にも的中した。

〃五本松の原〃に連れて来られた弥彦達は、二人ずつ、枝振りの良い松に、ぶら下げられていった。その間中、宗膳は切株に腰を下ろし、蛇のような目を細めて、冷たい笑いを浮べていた。

十三人目の弥彦の時には自ら彼の乗っている踏台を、にくにくしげに蹴飛した。そして、だらん、と下がった彼の身体に一鞭くれると、振返りもせずに帰って行った。その背を、彼の白眼が恨み深げにみつめていた。この光景を目の当りに見た十三才の活之進は、顔を背けて、耕助と互に手をぎゅっと握り合ったものだった。

また、年貢納めの夜、年貢の一部を横領しようとした宗膳の悪事を知った八人の百姓が斬殺された。事の真相を知った村人の怒りは大変なものであったが、平生余りに酷い宗膳の行為を見知っている彼らは、怒る以上のことは何も出来なかった。

この時の殺し方は凄惨であった。手足を切取られた八つのだるまのような屍体は、どれが誰のか識別出来ない位ばらばらに散在している手足の残骸の中に、ごろごろと転っていた。

蔵の前の白砂が赤く染っていた。

彼らの家族の中、絶望した三人の妻と、五人の子供が、夫と父の後を追って自殺した。

活之進はあの時の悲惨な光景と役人の罵声、村人の慟哭の声を思い、今更のように背筋が震えた。そして彼の決心はより固いものとなっていった。

彼が屋敷に帰ると、皆は夕げの膳についていた。

「活之進、どこへ行っておった。この頃お前どうかしておらぬか不穏な空気の漂う今日この頃だ。お前も心するが良いぞ。」

活之進が膳に着くや左衛門が口を開いた。

「活之進や、お父様の言う通りですよ。近頃外へ出すぎます。」

母も同じことを言った。彼は自分のしていることが家の者に知れてないのを有難たく思った。

夕飯が過んで部屋に下がってからも、昨夜のことばかりが次から次へと浮んで来た。彼はじっとしていられず、またこっそりと屋敷を出た。

活之進は先刻彼が立っていた柿の木の横を通り抜けると、半時後には村のはずれに在る谷津村天神の境内に居た。裏山の泉から湧き出た水がかけいを流れてくる音が、しょろしょろと周囲の静寂の中に響いていた。月は、私は下界のことは何んにもわからないわ、とでも言っているかのように、静かに、厚い雲の切れ間からさして茶褐色に枯れた木々を照らしていた。

本堂の横手に出た時、活之進は背後から声をかけられて、ぎくっとなった。

「活之進殿ではござらぬか。」

その声に活之進は恐る恐る後を振り返った。其処には月光を背にして精悍な顔付の四十がらみの男が立っていた、

「あっ、これは脇坂様。」

その男は、代官所役人脇坂実秀であった。勘定方を受持つ実秀はめったに村人と顔を合わすことはなかったが、温和な人柄と、若い時長崎で学んだ知識とは予々評判であった。活之進の父森木左衛門とは色々な面で気が合い親交が厚かった。

「活之進殿、夜分どうしたな、このような所まで来るとは。」

「……。」
「左衛門殿が先日も心配していらっしゃったが、親には余り心配をかけるものではありませんぞ。それとも左衛門殿や母上に話せないことでもおありかな。」
こう言う実秀の声は、活之進が小さい時から聞きなれている、あの落着きのある重い声であった。そして、これを聞きながら、自分の悩みを打明けて相談に乗ってくれるのはこの人の他にない、と活之進は考えていた。
「活之進殿、御両親に話せないことで私に出来ることなら、何んでもお話なさるが良い。何かとお力になりますぞ。」
活之進の決心を誘うように実秀の声が流れた。
「実は……。」
活之進は一瞬ためらったが、顔を上げると話し出した。
「……というわけで、私は私なりに、今迄に何回となく一揆を起そうという彼らの考えを色々な話をして止めてきたのです。しかし、今度ばかりは大分決意が固いようですし、伊助が先頭に立って明日にでも立上がらないとも限らない状態です。」
こう話しながら、活之進の身体は除々に熱っしていった。黄色い葉の数枚散らばっている本堂の外廊に腰を下ろした彼は、周囲の冷気さえも、もはや感覚の外にあった。
「……もしも彼らが一揆を起すようなことがあれば、村全体の破滅にもなりかねないと思います。農具や私製の竹槍で、火器まで備えてある代官所に対するのは、余りに無茶です。百姓がばたばた死んでゆくのが目に見えるようです。それに、まさかの時には、私は百姓達につきます。あの代官奴を生かしてはおきません。そうなったら父や脇坂様とも敵味方です。しかし、たとえ敵味方になったとしても、親子であっても、私は百姓に味方することに決めています。私は一時しのぎの同情や慰め事で彼らに味方するのではありません。小さい時から、私は彼らの生活を見、それに入り込んで行きました。そして彼らの真の姿を知ったのです。自分達が汗水たらし、風雨にうたれ大切に育て上げた稲も、脱穀して俵につめると、代官の不正を承知で蔵に納める。自分の所に残るのは、ほんの雀の涙程のものなのです。彼らは一年に一度しか白い飯が食えないのです。それだって麦が半分位混っているぱさぱさのやつなんです。それでも彼らはそれを涙を流さんばかりにして食べるのです。麦だけ先に食べてしまい。残った米を、一粒一粒嚙みしめている彼らを思うと、誰が敵にまわって鉄砲で撃つことが出来ましょう。私はこんなにまでして善良な彼らを虐げるあの代官が憎いのです。脇坂様、私の考えは間違っているのでしょうか。私は彼らの為になら自分の身を投げ出しても良いと思っています。ただ一揆だけは、彼ら全部に禍のある一揆だけは止めたいのです。脇坂様、おねがいです。どうしたら、どうしたら彼らが人間並みの暮しが出来るようになるのでしょう。あれじゃ、彼らと吾々の差が大きすぎます。」
活之進の頬を幾条もの涙が尾を引いていた。百姓達の為に苦しむ彼の尊い水玉だった。
「活之進殿、もう良い、もう良い、言わいでも良い、実秀ようく受けたまわった。お力になりましょう。何如にも実秀は疎かった。仕事仕事で若い頃の情熱を失いかけていた。活之進殿、其方のお陰でそれが今一度わしに戻って来たような気がする。」
実秀の両の瞳にも光るものがあった。

「お力をお貸し下さいますか。有難とうございます。」
「二言はない。勘定方等やっておると偶の機会にしか外へ出られんので、百姓達の動静もとくとわからんでな。だが一揆はいかんぞ。決していかん。」
実秀は厳しく言った。その声に又枯葉が散った。ひゅろひゅろひゅろと散って重った。
「他の方法を考えてみましたが……。」
「よい考えはなかったと言うのだな。」
「はい。」
「それはそうじゃ、そんな方法が幾通りもあったら今迄に起った一揆の殆んどが成功しておるだろう。それがない証拠に一揆の大部分は失敗しておるではないか。」
「一人が犠牲になればそれで皆が助かるような方法はないでしょうか。」
活之進は今迄相談する人もなく疑問であったこと、苦しんでいたこと、悩んでいたこと、の全てをこの信頼出来る男の前にさらけ出した。男は彼の訴えに耳を傾け、その瞳をやさしくみつめていた。かけいからしたたり落ちる滴は月の光に青白く光った。その中で、夢ふくらむ若者と、世の勝手を深く広く知った初老の男とは、夜のふけるのも気に懸けず、腹かき割って話合った。
「直訴だろうな。」
一時も経ったと思える頃、実秀はぽつんと言った。活之進の顔が輝いた。それを見てとった実秀は更に一言付け加えた。
「しかし、直訴は一揆以上に成功する率が少ないのじゃ。成功した暁に於いても死を覚悟せねばなるまい。
これを聞いても活之進の顔に暗い影は微塵もささなかった。
境内には親子程年の隔たりのある二人の打解けた気持と、その裏に潜む固い決意とが醸し出す清新な雰囲気が漂っていた。
「さあ、今夜は帰るとしよう。大分遅くなったようだ。それから活之進殿、其方この頃わしの屋敷に特と来んが、偶には訪ねて呉れぬか。梢も淋しがっておるでな。」
こう言うと実秀は先に立って石段を下り始めた。その後姿を見ながら、活之進は家を出た時の気持とはうって変り希望に満ちていた。
「直訴だ」
石段を下りながら彼は呟いた。実秀はもう三間位先を歩いていた。
活之進が実秀の屋敷を訪れたのは、それから数日後の昼過ぎであった。下男の取り次ぎで玄関に姿を見せたのは実秀の愛娘梢だった。彼女は久し振りにやって来た活之進をびっくりさせる程、蒼白だった。
「梢殿どこかお悪いのか。顔色が冴えぬようだが。」
挨拶もせぬ先に活之進が口を開いた。
「いいえ、どこも悪くありません。さあどうぞお上がり下さりませ。」
梢は下を向いたまま答えた。
庭に面した座敷には、日がいっぱいさして木立の影がゆらゆらと揺れていた。床の間には、実秀の筆で、〝信念に生きる〟と大書した掛軸が相変らずかかっていて、この部屋に入る者を威圧した。
「久しくおい出にならなかったのは、何かあったのでございます

か。」
幼ない時から一緒に遊んだりして、まるで本当の兄妹のように仲の良かった二人ではあったが、成長するに従がって活之進は百姓達の中に入って行き、その苦しさをいくらかでも取除くことに喜びを見出すような建設的な若者になった。自然、梢を訪ねることも少なくなり、彼を慕っていた彼女は不満でしょうがなかったのであった。それ故そう聞いた時の梢の言葉には、甘える気持と訴える気持とが感じられた。
「いや、ちょっと……。」
活之進は何んと答えたものか途惑った。
「活之進様は梢がお嫌いになられたのですね。」
「……。」
「そうですね。」
「ちがう。」
「ちがいはしません。」
「色々と用事があったのです。」
「用事？　百姓達と一緒になって話合ったりするのが用事ですか。」
「そうです。」
「それがそんなに大切なことなのですか。」
「この地方で、今一番重要なことです。」
「梢の事なぞ忘れてしまう位ですか。」
「……。」
「活之進様の意地悪。梢なぞどうなっても良いんですね。良いんですね……。」
梢は活之進の心がわからなかった。百姓達のことがそんなにも大切なことなのか、活之進が自分のことを忘れて打込むほどのことなのか。彼女は彼と親しい耕助や百姓達に嫉妬さえ感じた。
「良くはない。梢殿は相変らずだなあ。まるで駄々ッ子だ。」
「駄々ッ子なんかではありません。活之進様が悪いのです。」
梢は此処を先途と甘えた。活之進は微笑を浮べて、彼女を見守っていた。
「梢殿脇坂様がお帰りになって用件がすんだらば、散歩に行きませんか。」
「……。」
「行きますね。　偶には矢甲川の方に行ってみようではありませんか。」
「ええ。」
梢は呆気にとられていた。しかし、活之進にしてみれば急にそういう気になったまでのことであったので、梢のその様な様子が不可解であった。
実秀は暫くして戻って来た。
「や、活之進殿訪ねて呉れたか。大分待ったかな。」
「いいえ、つい先程まいったところでございます。」
「それはよいところへ戻ったな。梢、お茶を入れて来てくれぬか。」
「実秀は座に落着くと傍の梢に言った。
「それはそうと、今日は何か用事でも。」
「いえ、ただ何んとなくお邪魔したようなわけです。」
「さようか、何、わしもあの晩以来もう一度じっくりと話したいと

思っていたのだ。」
「脇坂様のお話を聞いて以来、明日こそは、明日こそはお邪魔しようと思いながら、自分の考えが纏まるまではと伸ばしているうちに今日まで……。」
「うむ、すると考えが纏まったわけだな。」
「まあ……。」
活之進は恥ずかしげに口籠ってうつむいた。
「さあ、活之進殿、お話しなさい。」
実秀はやさしく活之進を促した。その声に活之進は躊躇うことなく話し出した。
「私の考えでは早急に事を運んだ方が良いと思うのです。勿論一揆ではありません。残されたただ一つの道〃直訴〃についてです。まだこのことを知らぬ百姓達にこれを知らせ直訴彼らと話合おうと思います。彼らとて村や家族を思っていればこそ一揆を起そうとまでしているのです。他に犠牲の少ない方法があれば、きっと考え直すでしょう。」
「うむ、それはわかる。しかし、安芸守様に訴え出るにしても、江戸表に潜んで訴え出るにしても井の中の蛙同然の彼らでは目的を果す前に捕えられるか、殺されてしまうのが必至だろう。そこの処はどうなのだな。」
「はい、そこは……直訴は、私が」
「何、活之進殿、正気か、其方。」
実秀の顔は、活之進の最後の一言でさっと青ざめた。このことについては考えに考えぬいた活之進は、拳を固く握って膝元に視線を落していた。
「それで、左衛門殿や母上には既に打明けられたのか。」
「いいえ、先づ脇坂様にお話ししてからと思いまして。」
「まだ話して無かったのだな。それは良かった。御両親が聞いたら何とおっしゃられるか。家族の者の悲しみも考えたのですかな。」
「考えました。それで苦しみました。しかし、私はやります。私の他に適当な者は一人もおりません。父や母がどんなに怒られ、悲しまれるかはわかりすぎるほどです。しかし、森木の家は兄上がおられるから大丈夫です。やるなら今だと思うのです。これからは警戒も一層厳重になるであろうし……。」
「だが、活之進殿、其方が〃直訴〃を起せば森木の家にも危難が降り懸るのですぞ。」
「わかっています。ですから、私は森木の家を出ます。籍を抜きます。」
実秀の問いに対して活之進は秩序よく答えた。これからも、如何に彼が落着いているかがうかがえた。
「それまで決心していたのか。」
実秀はそれ以上何も言わなかった。
「脇坂様、その時が来ましたら、父と母に、活之進の不幸をお許し下さるようにお話下さい。兄には私の分まで頑張ってくれるように。お願い致します。」
さすがに活之進も胸がつまっていた。言葉が思うように喉から出てこなかった。実秀は尚も黙っていた。
「お父様、お茶を入れてまいりました。」
その場の空気を柔らげるように梢が入って来た。実秀は梢の差出す茶碗をとると、ぐっと一息に呑み干した。

「どうしたのです。お二人共恐い顔をして。」
二人の唯ならぬ様子に梢は訝しげに尋ねた。
「何んでもありませんよ。それより梢殿、脇坂様との用件も終りました。先程の約束通り散歩に出掛けませんか。
活之進は梢に疑問を持たせないように機転を働かせて明るく言った。
「ええ、では先程の話は本当だったのですね。」
梢はうれしそうだった。
「梢殿は私が嘘をついたとでも思っていたのですか。」
「そんなことはありませんけど……」
「その顔じゃどうもそうらしいですね。」
二人の会話を聞きながら実秀も笑いが込み上げてくるような快い気分になった。その反面、心の底では百姓の為に既に死を覚悟している活之進が、そんな事は全く気に懸けていないように無邪気なのを見て、彼が非常に哀れに思えた。
「脇坂様、大変お邪魔致しました。今日これで失礼します。」
「もう帰られるのか。」
「ええ、これから梢殿と一緒に散歩に行く約束ですから。」
「父上行って来てもよろしいですか。」
「ああ良いとも、其方も近頃家にばかり居たようだから外の良い空気でも存分に吸って来なさい。」
「今日は晴れているので、三春沼が見えますよ。」
活之進の声は澄んでいた。実秀は目頭が熱かった。
実秀は部屋を出て行く二人の後姿を感慨深げに見送った。
梢は先に立って歩いた。まるで広々とした田畑の黒い土の色に、長い眠りから覚めたように生々としていた。道端の木々は緑を失い葉も疎であったが、彼女にはそれさえも心楽しく感じられた。
矢甲川の両岸は川原を登ると森になっていた。活之進は川原を下りて行く梢を追った。彼が小さい時遊んだ〃離れ小岩〃が、青く淀んだ川の真中に、一間位の間をおいて三つ並んでいた。活之進は岩の周囲に出来る白い波を見ているうちに、ずっと昔、まだ活之進が十位の時、梢と一緒に此処へ遊びに来た時のことを思い出していた。
「とっても静かね。この川。」
梢は流れを指さして言った。
「智玄様のお力だよ。」
活之進は淀みに目を落して言った。
「智玄様って誰あれ？」
「徳の高いお坊様さ。」
「そお、どうしてそのお坊様がこの川を静かにしたの？」
「それはね。」
活之進は問われるままにこの村に昔から語り伝えられている智玄様の話をした。彼もおじいさんら聞いたのだった。
「その昔、矢甲川の流れは矢甲山脈の水を集めてもの凄い急流だったんだ。余り流れが激しいので橋を架けることも出来なければ、泳いで渡ることも出来ず、ちょっと雨でも降ると木内平野の田畑は水びたしになってしまったんだって。川向うの村まで行くのにずっと上の川幅の狭い所まで行かなければならなかったのさ。それが、ある冬のこと。村外れでぼろぼろの法衣を着たお坊様が行き倒れていたのを……。」
「それが智玄様ね。」
「うん。おとなしく聞いてなよ。それを村の人達が温かく看病して上げたんだ。そしたらそのお坊様が良くなって村を離れる時、村の人達が矢甲の流れに困っていることを知って、この川原に立ち、お経を唱えながら小石を三つ投げ込むと、それまでの急な流れは嘘のように静まったと言うことだ。ほら、あの三つ並んでいる〃離れ小岩〃がその三つの小石さ。」
あの時梢はまだ七つか八つであったが、活之進の話しを、彼の顔と流れとを見較べながら聞いていた。
「何んて静かな流れなんでしょう。」
その声に活之進は回想を破られた。梢があの時と同じ事を言ったので彼はおかしかった。
「活之進様何がおかしいんです。」
梢は直ぐに気付いて尋ねた。
「何んでもないんだ。」
彼は笑いながら答えた。
「何んでもないのに笑ったりして、活之進様ったらおかしい。」
梢も連られて笑った。
「梢殿は近頃外へ出ないんですね。」
「……。」
「余り家の中ばかり居ると、身体に良くありませんよ。」
「でも、……私、お友達が居ませんもの。」
梢は抱きしめてやりたい程寂しげに言った。
「梢殿！」
活之進は彼女の肩に手を懸けた。身体が硬くなって襟元まで紅くなった。
百姓達のことで頭のいっぱいな彼にも青春は訪れていた。彼にはこれが最初にして最後の青春とも成りかねなかったし、実際その可能性の方が強かった。
「活之進様。」
大きな吐息の下で、梢はようよう言った。向こう岸のこんもりした森の陰が黒く、静かな流れに映っていた。
伊助達由良村を中心とする者が一揆を起したのはそれから五日後であった。彼らは説得しようとする活之進を寄せつけなかったばかりでなく、伊助の家の納屋に軟禁した。
代官所が深い眠りに陥った子の刻、彼らは三方から代官所へ押し入った。しかし、近頃相次いで近隣の地方に起る一揆の為に、代官所内は厳重に固められていた。急を知った役人は鉄砲まで繰り出して百姓達に向った。代官所の体制を甘く見た彼らは次々と撃ち倒されて行く同僚を見て、活之進の恐れていた〃心の動揺〃を来した。にわかに混乱した彼らは役人達の好餌だった。袈裟掛けに切り下げられた屍体が、植込みの中や庭石の陰に数を増していった。伊助は鎌を振りまわして暴れたが数人の役人により生捕られた。
夜が明けた代官所の庭は阿修羅場であった。百姓達の殆んどは鉄砲で或いは槍や刀で殺され僅か伊助をはじめ数人が生残っただけだった。この事を活之進は納屋の中で耕助に聞いた。伊助達は耕助の父喜平を長とすと木内村の反対を無理矢理押し切って一揆を起したのであった。耕助の話しによると由良村の百姓とその附近の百姓の

殆んど全部が死んだということであったが正に耕助の話しの通りであった。

伊助他数名の死刑は以後見せしめの為、あの〃五本松の原〃に竹矢来を組んで行われた。竹矢来を取囲んだ他の村々の百姓達は、陣幕の前の切株に腰を下ろした宗膳を、じっと憎悪を込めて睨んでいた。しかし、次の瞬間彼らは声をあげて目を見張った。高手小手に縛り上げられている伊助達の前に、これも同様に縛り上げられた彼らの家族が引出されたからであった。彼らの家族は其処に打込まれてある一間位の杭に、更に縛られている上にも縛られた。二十数本並んでいる杭には老人も子供も赤ん坊を前に回した女もいた。そして次にはどんな事が起るか、皆んな良く知っていた。矢来の外のどの顔からも血の気が失せていた。其処いらから集められた乞食が槍の穂を引いた時、彼らの多くは目を閉じ、天に合掌した。念仏を唱える声が低く続き、刑人の泣き叫ぶ声が人々の耳にしみとおっていった。

「それっ！」

宗膳の片手が上がるや、槍の穂先は刑人の細元に繰出された。念仏の声が一際高くなった。断末魔の呻き声が二十数本の杭から起って、又元通りの静けさにかえった。二十数人の屍体は首をたれていた。その前で伊助は目を開いたまま死んだ。他の数名は気がふれてわめいた。その背を無情な役人の刀が切り下げた。人々は息を呑んで、この世のものとは思えぬ行為を我と我が目で確かめた。黒い鳥が二羽その上を低く舞った。

活之進は事の始めから視線もそらさず見ていた。決して忘れまいとするように、瞼の奥深くこの光景を焼付けていた。もはや彼の目に、宗膳は人間として写らなかった。彼は嗜虐性の強い一頭の虎にすぎなかった。

このことがあって以来警戒は厳重だった。寄合も前のようにおいそれとは開けなかった。村の一軒一軒の家に役人の目が光っていた。

活之進はそんな日々を自室に閉じ籠って、彼の双肩に懸かったこの地方の運命を打開すべく〃直訴〃への策を秘かに立てていた。

「百姓は年中辛苦して、作出したるものを残らず年貢にとられ、其上にさへたたずして未進となれば、催足をつけられ、妻子をうらせ、田畠、山林、牛馬までをも、売らせて取らるれば、其の百姓家をやぶりて流浪し、行方なきものは乞食となり、たまたま村里に、はさまり居といえども、凶年には餓死をまぬがれず、甚しきものは、有無の差別をも知らず、水ぜめ、簀巻、木馬などの責をなす。これによりて病つきて死し、或は病苦になりて用にたたざるもあれども、いむ事なれば訴へもならず……。」

策を練っていない時、彼は熊沢蕃山や田中丘隅の書を貪り読んだ。頁を繰くる毎に現れるのは、百姓の虐待と貧困であった。その食物に於いては全く目を被いたくなりさえした。

「田方に生るる百姓は雑炊にしも米を食うことあれども、山方、野方に生れては、正月三ケ日といえども、米を口に入るる事なき所多し、粟、糠、麦など食に炊くとても、菜、蕪、干葉、芋の葉、豆ささげの葉、其外あらゆる草木の葉を糧として、穀物の色は見えぬばかりにして、而かも朝夕飽く事なく、漸く日の中一度宛ならでは是を食ふ事なく余は前に云ふ粥の類にて日を送る。……。」

活之進はこれらの書と自分の体験したこととを見較べてみた。こ

の地方以上に貧しい地方があるのだ。しかし、うかうかしては居られない。この地方も今その危機に瀕しているではないか。彼は責任の重さを痛感した。

自室での孤独な生活が三日続いた夜。耕助がやって来た。役人の目を盗み皆が集っているとのことである。

その薄暗い屋根部屋はいつもよりも余計に暗く感じられた。ろうそくが一本、炎が静かにゆれていた。代表達は会の前に伊助達の冥福を祈った。誰も自分から話し出さなかったので、活之進は〃直訴〃のことを皆に話した。どよめきが起った。彼は彼らに分るように鍛念に詳しく説明した。

「俺も一緒に行くだ。」

活之進の話しが終るや耕助が言った

「駄目だ駄目だ、耕助なんかじゃどうしようもねえ。わしが行くだ、」

こう言ったのは喜平だった。いつも穏やかな彼に似合わず顔に血の気がさしていた。

「耕助も、喜平さんも、気持は良くわかるが、これは私一人でやる。そう決めているのだ。私が成功するかどうかはわからんが、貴方達はこれまで以上にひどくなった宗膳の悪政に耐えて行かねばなりません。成功するまでは勿論、失敗した時は尚更です。」

活之進の決意は動かすことが出来なかった。この時彼らははじめて自分達仲間を見るのと同じ目で活之進を見た。活之進は彼らの気持が良くわかった〃武士の子〃による彼らとの溝は消えた。彼と彼らは同志であった。

活之進は森木の籍を抜けた。そして、後の事を実秀に細かく頼んだ後、家族にも悄にも、黙って家を出た。十二月も半ばを過ぎた風は肌深く浸みとおった。彼は周囲に気を配りながら忙ぎ足で歩いた。谷津村天神の泉の水で顔を洗い口を浄いだ。木内平野が一望のうちに眺められた。土の色で土地の肥えていることがわかる。矢甲の山々から朝がしのびよっていた。耕地が徐々に色を帯びていった。夜露にしっとりと湿った田畑は、後わずかで厳かな日の出を迎える。

〃救われざりしものよ。その名を百姓という〃

活之進は歩き始めた。この言葉を書き変える為にも。

彼の影が、黒く長く木内平野に映じ、朝を告げた。

—了—

〈附記〉

作中活之進が貪り読む熊沢蕃山や田中丘隅の著書と、この創作の時代背景との間には時代錯誤の感がありますが、これは、この作品は純粋な歴史小説ではなく、主人公の中の真に人間的なものを描くことが主題でありますので、前記の他にもみられます二、三の時代錯誤は御諒承願います。

—作　者—

伯父が、大きな声で工夫に言う。
薄明るい無人踏切りからが今夜の仕事だった。たちまち、スパナーでレールにシャリをとりつける。鉄のハンマーでなぐる。——夜の静けさは一瞬のうちに破られ、まもなく、新さんのほれぼれするような掛け声と、他の四人の、それに劣らぬ合わせ声とが夜空に響いた。

ソーンレェー　引こうぜ　ドンと引け　ヨーイショウ
ああ、ドンと引け　ヨーイショ
ガ、チーン

夜の静けさどころではなかった。
遊間整正機をうしろに引き戻し、反動をつけて、ガッチーン、と、強打するのである。民謡調の、さえた掛け声。地を震動させ、腹にズシーンと響く力強さ。
純二の胸に、久し振りの力仕事に対する懐しさが、どうにもならぬ勢いでおしよせてきた。

栃木の片田舎を離れて、なまぬるい様な春の東京にやって来たのは、三月も終りの頃だった。
伯父の家から通う高校は、アッと言う間に、一ケ月がすぎ去った。広大で、公園のような校地。大銀杏の下を通り抜けて行けば、桜が咲き乱れ、ふりかかる風花のようなそれをうけて行けば、梅の実がすっぱいつぼをわき出させて、青葉の蔭にのぞいていた。
そこが東京であることも忘れがちな夢の間の一ケ月に、彼の汚れぬ心は、ますます清新な希望にふくらむのだった。
彼の友も、彼の教師も、彼の伯父伯母も、すべて、彼の心に、さわやかなぬくみを保たせてくれた。
時折、郷里の父母や兄妹の便りが待っていてくれたし、それに——中学の同級生だった妙子も、希望にあふれる彼にふさわしい手紙を送ってくれたりした。
入学後間もなく、彼は、妙子への手紙にこう書いた。
中学の頃の習慣で、自己紹介の時に「純二です」って言ってしまいました。〃原〃を忘れたのです。体操の先生に名前を聞かれた時も「純二です」……。それ以来、みんなから、〃純ちゃん〃て呼ばれています。
クラスで、とてもいい友達が出来そうです。村上君と島田君の二人です。
伯父と伯母には子供がいないのでとても可愛がってくれます。
みんな、いい人ばかりです……。
こんな彼ではあるが、今日、又、妙子への返事の中で、こうも言わねばならなかったのである。
……どうも力があまりすぎます。体育の時間は、四月からずうっと鉄棒でしたが、今日、初めて大車輪という大技になりました。先生は、田舎で、僕が知っていた程の有名な人で、オリンピックで体操種目に活躍した滝川先生です。
今日の大車輪で、僕は、どうにか廻ることが出来るようになりました。出来たのは僕だけです。先生は、「君は大柄だし、スマートどから一生懸命やってみなさい」って言ってくれました。（ホントにそういう言葉遣いでした。……自慢するようでスイマセン）こんなふうに体操はやっていますが、力が余るのはどうにも仕様がありません。ですから、明日は五月五日で休ですので、伯父に連れて行ってもらって、今夜、これから補

若人の群れ

三年　渡部　斉

夕刻から降り出した霧雨は、髪の毛に露を置く程度で上ったが、五月の夜の空気は、まだ、衿首をすくめさせる程冷たかった。
純二は、コンクリートの改札口によりかかりながら、補線工夫の言葉に耳を楽しませていた。三人の工夫が話す栃木の方言は、純二には、実に、四十何日振りかのものだった。
彼は、ついさっき、妙子に出したばかりの手紙の一節を思い浮べた。
……栃木は、まだそんなに恋しくありません……。
「純二、何笑ってるんだい？」
純二に、隣りで煙草を吸っていた伯父が話しかけた。
「うん、やっぱり、栃木言葉が懐しいや。」
この時、ようやく上りの最終電車が来た。螢光色がまぶしいが、人影は少ない。
四人の工夫が、重そうな機械を持って降りると、車掌の義務的な呼子にせかされて、電車は去った。工夫達が運んで来た機械は、純二の伯父の前に下ろされた。
「ごくろうさん。」
伯父は、煙草を地下足袋で踏みつけてそう言ってから、一応、所持品を確めてみた。
「原さん、その人は？」
工夫の一人が、純二の方へ向く。
「ああ、今言おうと思ってたところだ。今度高校生になったばかりの、僕の甥なんだ。君達と同じ栃木の出でね。補線工事を一緒にやらせてくれって言ってしょうがないんだよ。」
伯父にうながされて、純二は、初めて挨拶した。
「原純二です。よろしく。」
「じゃあ、新さん、時々交代しながらやってくれないか。」
「ええ、いいです。俺たち、楽になンかンな。」
新さんと言われた年配の人は、すぐ、手際良く仲間の工夫に合図を送って、機械を、ホームから線路に下ろした。
「おじさん、あの機械、何て言うの？」
「遊間整正機だ。機械って言うより、道具だな。レールのつなぎめにつけたシャリをあれで打ってね、それで、レールの隙間を調節するんだよ。」
「ふーん。」
純二と伯父は、身軽く線路にとびおりて枕木の上を歩いた。新さん達は、遊間整正機を、カラカラカラカラ、と、快よく転がして先を行く。降ったと言う程の雨でもなかったが、レールも枕木も、砂利石も、すべて、しっとりとぬれていた。
暗い闇である筈の夜空は、濃いもやで、白く包まれ、青い信号燈がもやの空に挑みかかるように、するどくあたりを彩っている。
どこからもれる光のせいか、ぬれたレールが、斜めの反射光をにぶく光らせて、純二達の進む方向を示してくれていた。
「おーい、そこいらへんからだったなァ。」

線工夫として力を出して来たいと思います。（伯父は、電車の補修技師をやっていますが、夜、時々、超過勤務みたいに、補線工事の監督をやるのだそうです。）

栃木は、まだそんなに恋しくはありません……。

そんな彼であるから、力あふれる新さん達の掛け声を聞いただけで、

「おじさん、僕も、あれやりたい。」

と、息をはずませて言ったのも無理なからぬことだった。

丁度その時、突然、カッ、チンチンチンチンと、無人踏切りの警鐘が鳴り出した。純二は不意を襲われ、ハッとしてそこを振り向いた。

警鐘の音とともに明滅するシグナルが、もやの空を、広く真赤に染め上げる。伯父が、田舎者の純二の内心のうろたえを見て、

「大丈夫だよ、純二。こっちの線路にはもう来ないからね。今は下りの貨車だろう。ええと、とすると、下りはもう一本最終があったようだね。まあ、危いといけないから、もっとこっちにおいで。」

と、カンテラの光を彼の足許に照らしてくれるのだった。

やァ、ソーンレェー　休まぁず　ドンと引け　ヨーイショウ

ああ、ドンと引け　ヨーイショ

ガ、チーン

純二の不安をよそに、新さん達の景気のいい歌声は、夜の空気にさえ渡り、鉄のぶつかり合う激しい音は、夜の沈黙を征服した。

まばゆいライトで純二の心を驚かした貨車は、短い警笛を鳴らして彼らの傍を通りすぎた。レールが、ぐん、ぐん、としなる。

純二は、目の前のすさまじい動きに、吸い込まれるような誘惑を感じて動揺した。

頭だけがスーツと軽くなり、鉛のような重い塊が胸につかえた。

胸の高なりもようやく鎮まりそうになった時、都会のものの激しさに、自分が、初めて屈したようなわびしさを感じていた。

美しい、と思った白いもやの夜空も、青いシグナルの色も、レールのにぶい反射光も、あるものは、みな、空恐ろしい都会の物だった。

補線工夫達は、すでに、一ケ所終えて彼の方へ機械をひっぱって来た。カラカラカラカラ……と、一度は、快よく響いたその音も、工夫の砂利を踏む足音も、そして、伯父のたたくハンマーの音さえも、みな、すべて、都会の物に他ならないのだ。

純二の胸に、未知の物への恐怖が影をさした。

「おい、純二、代わってもらって、やってみないか？」

伯父の声に我を取り戻した彼は、今さらそれを拒む理由のなさを知って、無言のままうなづくのだった。

「じゃあ、俺が代んべえ。」

一人の若い男に、引き手を出されて純二は、一歩前に出た。いや出ようとしたのだ、……が、彼は、足をすべらせて手をついた。

「おお、張り切って、いい子だンなァ。」

新さんのおどけた声と、

「おおい、そっちにスパナーあんべえ、忘れンなやあ。」

と、レール一本隔てた向うの仲間にどなる栃木言葉を聞いて、

純二は、

——あ、ここに、栃木のものがある！

と、新たな気持を取り戻すことが出来たのであった。

はあ、ソーンレェー　おなごにゃドンといけ　ヨーイショウ

ああ、ドンと引け　ヨーイショ

ガ、チーン

……身体中が、しびれるような力強い衝撃、そして、存分に力を発散させ得る満足感。若い心が、再び、希望を伴ってふくらもうとしたのだが……その時、又、チンチンチンチンと踏切りの警鐘が鳴り出した。

——あ、あ、電車が、来る！

彼は、胆が縮み上るような不吉な予感におののいた。自分が、下り電車に近い位置に来た愚かさに、初めて気付いた。

さあ、ソーンレェー　休まぁず　ドンと引け　ヨーイショウ

ああ、ドンと引け　ヨーイショ

ガ、チーン

ガ、チーンの音に我に返って、純二は、思わず、伯父の方へ逃げようとした。

「ああ、平気平気。やってろやってろ、大丈夫だから。」

新さんの制する右手に、幼く、そして、世慣れのしてない純二は、さらに、その場を逃れる言葉を見つけることは出来ない。

——雨が、また……。

赤い彩色をした空からは、細い霧雨が、又降り出していた。仰ぐ純二のまつげに、霧のような露がふりかかって、しばらくの間、汚れのない少年を、夢幻の世界へと導いて行く……。まぶたを動かすと、赤い空が、サーチライトのように空を割る……。

純二には、新さん達の掛け声も、夜に挑むするどい鉄響きも聞こえない。——それに警鐘の音さえも。

彼は、まぶたにかかる虹を追って、天を見上げたまま立ちすくんでいた。

ヴォーッ、ガーッ

恍惚境に酔っていた彼のうしろを、電車が、物凄い勢いで襲いかかった。

「アーッ。」

驚いて前にとびだし、すべる彼、彼をつかもうとする二、三本の工夫の腕、新さんの叫び、

「ウッッ！」

……彼の右足を、力一杯はさんだ遊間整正機は、レールの上で、ビュッ、ヂヂーン、と、にぶく響いて電車の音に消された。

うしろにぶっ倒れた彼の頭の上を、すさまじい音で電車が走り去る。ヴォーッと、孤独なわめきの尾を引きながら……。

工員が抱き上げる。伯父がかけよる。

カンテラが、伯父にけられて、赤さびの砂利石に炎をはいた。

「どうしたっ!!」

「足をつぶしたようンだ。」

レールが、ル・ル・ル・ルとうなり続けていた。霧雨も、白いもやの中から降り続いていた。

首筋から、背に、ツツーと流れ込む冷たさが、正気を取り戻させた。

伯父が彼を抱き起こし、白い上衣の男が、二人で彼をかかえている。

「新さん、血の石を、ちょっと堀り返しておいとくれ。」
伯父の声が、彼の上で切な気だった。
「雨で流れンべえ。」
若い工夫の声を聞き、純二は、足が、ズキンと痛んできたのに気が付いた。
「ウ、ンム。」
「おい、純二、もうすぐだ。もうすぐだぞ！」
——何が？
と言おうとしたが、もつれた舌は、腹の底のうめきを聞かせるのが精一杯だった。身体が、フッと持ち上げられ担荷に乗せられた。急救車は、彼が運び込まれるのを待って、すでに、まばゆい二条のライトで前方を睨んでいる。雨が、銀の針となって、ライトの中で散った。パトカーが、早くも、サイレンをならして、出発を急かした。
脂汗をベットリとかきながら、彼は、中ば消えかけた意識の中で願っていた。
——気を失いたい。……！
「純二、とっつぁあだよ。」
明くる日の夕刻、案内して来た看護婦に丁寧におじぎしたあと、彼の顔の上で、父が笑って見せた。彼は、黙って父を眺めていた。焦点の合わぬ目を天井に向ければ、そこに、電車の不気味な腹の下が映り、身を震わせて目を閉じれば、車輪の鉄をはむ音が、すさまじい響きを立てて耳にとびこんで来る。
農繁期に入ったばかりの彼の父は、翌日は、幾度も、彼の世話を頼みつつ、帰らねばならなかった。我が子の、恐怖におびえきった目に、うしろ髪を引かれながらも……。
村上武男には、希望と闘志に溢れる新高校生に、日曜さえも無駄な休日に思える。そんな彼に、ましてや、五月五日は退屈だった。
「〝ゴールデンウイーク、夜のパトカー〟か。」
彼は、派手な写真入りの社会面を読み出した。新聞記者のパトロールカー同乗記は、酔払いのケンカや小さな交通事故を報じていた。そして、その終りの方で、彼は、原純二の事故を報じた活字に目を奪われねばならなかったのである。
翌朝、彼が登校した時には、すでに、クラスは、新聞を囲んだり二、三人でかたまったりして、純二の噂に夢中だった。
彼がカバンも置かぬうちに、島田健が寄って来た。島田の顔が、過度に深刻そうなのは、彼の少年らしい純粋さを物語っていた。
「新聞、見た？」
「うん。」
「同姓同名の人じゃないの？」
「ううん、純ちゃんだ。」
「やっぱり？」
「うん、住所がおんなじだ。」
彼らは、それっきり黙ってしまった。村上の手は、無意識に、持って来た新聞を丸め出す。
「村上さん。」
隣の席にいた小田切裕子も、島田と同じく真剣な目付きで声をかけた。

「新聞、ちょっと見せて下さい。」
小田切の開く新聞に、ス、スッと二つのお下げ髪がかぶさる。古川美紀と河原ゆき子の二人だった。
定刻より少し遅れて、担任の田柴先生が入って来た。すぐ、前の席の生徒が新聞を差し出す。教師は、うんうんと軽くうなずいた。
「知っている。……君達も、知ってるようだが、原君がケガをしたそうだ。たった今、原君のうちへ行ってみた。」
「先生がですか？」
「うん。」
生徒が、ザワザワと動いてささやく。が、すぐ、シーンと、静寂と緊張を保って、田柴先生の次の言葉を待っていた。
陽射しは柔らかく、かげろうが、うららかに舞い上る春の朝だった。
まんじりともせぬ一夜は明けた。
麻酔注射のせいか足に痛みはなかったが、断えず、電車の幻と、レールを打つ鉄響きの空耳に悩まされ続けた。
枕元に父の姿を求めるのは、彼の意識が、まだ、もうろうとしていることを現わしていた。
伯母に、水を一口飲まされて、彼は、ようやく、安らかな眠りにつけたのであった。
彼は、ツ、チーと、軽く引くカーテンの、耳なれぬ音に目を覚ました。閉じたカーテンを僅かに引いて、日没の窓外を眺めている伯母の姿があった。壁が、淡いピンクに染まっているのが美しかった。
「おばさん。」
彼は、自分の声が、ひどく弱々しいのに驚いた。
「あら。」
伯母は、すぐ彼をのぞき込み、額に手をあてる
「お水、飲む？」
伯母が飲ませてくれる冷水は、熱い背骨をスーッと爽やかにしてくれた。
「どお？　いたむ？」
「うん。」
彼は、右足が、カッカッと燃えているような重い痛みに顔をゆがめた。
——どんなケガなんだろう？
彼は、言い知れぬ不安に伯母の方へ額を向けたが、フト、枕元の果物籠にその視線がとまった。
「さっき、田柴先生とお友達の方がお見舞に来て下さったのよ。純二さん、よく眠ってたものだから、くだものと、これ、皆さんで書いて置いて行ったわ。」
伯母は、そう言いながら一枚の紙片を渡した。
驚きました。早くよくなって元気な姿を見せて下さい。体育の滝川先生がお大事にと伝えてくれとのこと。
お大事に。　　田　柴
早く元気になって下さい。　　一年四組一同。
島田君が大変心配しています。あとで又伺います。別紙クラスの女子のお手紙です。　　村　上　武　男
「おばさん、もう一枚ない？」

「あるわ。はい。」
純ちゃん、オス！　元気でネ。　河原ゆき子
右に同じ。　古川美紀
今日はクラス代表の人しか行けません。後日、きっと、みんなでお邪魔します。　小田切裕子
――小田切さんの字、妙子さんの字と似てる……。
そんなことを思う彼は、教師や友人達の心遣いをうれしく感じる一方、フト、その大ゲサな騒ぎ振りが気にかかった。
――ん、そうだ、きのうだ。きのうの夜だ。その夜、雨が、赤く、電車が、あ、音が、音が聞こえる。電車……
「うわっ、い、いたい！」
伯母は、純二の突然の変化に狼狽した。
「純二さん！　いたいの？」
「あ、おばさん……。う、ううん、いたくない。たいしたことない。」
「そおお？　お医者さんにみてもらいましょうか？」
「いい。」
「先生とお友達とがね、悲観しないでお大事にって言って下さったわよ。いい方達ばかりねえ。」
――悲観しないで？　悲観？
彼は、名状しがたい不安の風にあおられたように、突然とびおきて伯母に叫んだ。
「このケガ、どんなの？　どんなの？」
……純二の必死のまなざしに会って、伯母は、声を同情にふるわせながら、足の指が――右足の指が――四本失くなったことを告げなければならなかったのである。
実子のない彼女に、純二こそ、温い母性愛をそそぐべき我が子に思えたのであろうか。純二の消えゆく瞳の光を取り戻そうと、彼女も亦必死になって、こうつけ加えていた。
「でも、親指は何でもないのよ。小指だって失くなってはしまわないわ。大丈夫、大丈夫よ。ビッコになんかならないわ。きっと、きっと。」
暗澹たる、且つうつうつ（鬱々）たる入院生活は終えた。退院して伯父の家に臥してからも、折からの梅雨のように、彼の心は、一時とて晴れることはのぞめなかった。
入院中は、村上や島田や小田切裕子達が、何度も励ましに来てくれた。河原ゆき子の豊富な表情と古川美紀のトボけた話は、場所に不似合な程、病室を賑やかにしたが、純二の心は、むなしい虚脱感にふさがれるだけだった。高校生活僅か一ケ月で、まだ名も知らぬ級友達ですら見舞に来てくれたが、彼らの健康な笑いと話題に、ますます気が沈むだけだった。殊に、体育の滝川先生が来てくれた時には、彼は、すでに、体育の時間に暴れ回れなくなったことを知り、狂おしい絶望感にうちのめされた。
栃木の妙子からは、あれから四通もの手紙が来ていた。初めの一通は、当然のことながら、彼がケガをしたことを知らずに出していた。それっきり、彼は、次からの手紙を読むことをしなかった。彼には、何も知らぬ彼女の便りを見ることは、片輪を笑われるよりも辛く思われたのだった。かと言って、片輪になったことを告げるだけの勇気は、今の彼には、有り得なかった。

退院後も、伯父夫婦の気の配り様は、純二から、一切の労力を持ち去って行った。立つ時も座る時も、同情と憐憫の情の目で見守られた。それが、純二に、必要以上の片輪者の意識を植えつけると言うことを、彼ら二人は看破できなかった。
梅雨のあけきらぬ頃、純二に、ようやく登校を許された日が来た。片松葉杖をつき、白い包帯でふくれ上った彼の足を、道行く人も学校の人も見ぬふりをした。
見知らぬ上級生に、元気になってよかったね。と声をかけられて、彼は、ただ、恐縮して頭を下げるだけだった。
級友達の握手を求める手に、おずおずと右手を差し出しながら、彼は、それが都会の風習なのだろうかと疑っていた。
みんなのお祝いの言葉を受けながら、彼は、終始、消極的な笑みを浮べていた。
彼は、すべての物に怖れる、小心な田舎者の心に支配されていたのである。
松葉杖が要らなくなった時、彼は、最初の心の打撃に直面して、唖然とした。
――一体、何をはくんだ！
右足の親指は、一本だけ、ながながと不様にのび、ぷっつりとぎれた他の四本の指は、不気味に骨をのぞかせていた。肉色をしたうすい皮膚に被われたそこに、僅か五本目の小指だけが、ちんまりと、指の形をとどめているにすぎなかった。
親指の線に沿って、小さな三角定木をおけば、ぴったりとはまるようなその足に、下駄をはくことは、不可能だ。さりとて、包帯を巻けば靴もはけぬ。
彼は、手にした包帯が、やがて、次第に涙でかすんでいくのをどうしようもなかった。
七月には包帯もすっかりとれた。
皮靴をはき、ゆっくり歩けば、どうにかビッコを引かずに歩けた。が、それは、決して、片輪でないことを証明してはくれない。
滝川先生の熱心な勧めにも応じず、彼は、トレーニングシャツに着替えることはしなかった。
村上は、マットの上でも平行棒にとびついても、ズバぬけて優れた技を見せていた。
しかし、それらが、自分に出来ぬ技だとは、純二には思えなかった。いや、むしろ、彼は、平行棒でのさらに華麗な自分の姿を、まぶたの裏に映していたのだ。が、それが最高潮に達する時、きまって、無惨な失敗で、足をかかえてうずくまる姿が、それに続いた。
そんな空想に悩まされる時、彼は、フト、島田健の心配気な視線に気付いてうろたえるのだった。
ある日の放課後、彼は、大きな銀杏の木の下をくぐり、人影のない草むらに行って寝ころんだ。
初夏の風が吹きぬけて、サラサラと鳴る草の音は、栃木の夏の風とも、小川のせせらぎとも聞こえてくる。
目にかすむ草原の向うから、父のねじりはちまきをした頭が、ヒョイととびだして来そうだった。母が笑み、兄が手を打って喜ぶ前で彼が、妹と相撲する姿が浮んで来た。妹が、好んで連れて歩く小山羊の可愛い啼き声までが、聞こえて来るようだった。
風になぐ草葉の蔭に、別れ際に振った妙子の手が、チラチラと見えがくれするようにも思えてきた。

言い知れぬ郷愁に、彼は、誰はばかることなく、ぬれたまつげを太陽にかわかせた。

うさぎ追いしかの山
こぶな釣りしかの川

……流れくる歌声を、彼は、孤独な眠りの夢の中で聞いていた。

夢は今もめぐりて
忘れがたきふるさと

がまんできずに、彼は、身を起こして、つぶやくようにあとを追った。

いかにおはす父母
つつがなきやともがき
……
……
山はあおきふるさと
川はきよきふるさと

歌詞と旋律とが、しんしんと心にしみ入って、彼から、とどめもない涙を奪う。彼は、上体がユラユラゆれて、魂が分離するような気分におちいっていった。

河原ゆき子と古川美紀が、そこで泣いている彼に気付いたのは、彼女達が、初夏の涼風に、流れる髪の毛をかき上げた時だった。二人は、無言で打ち合わせて、走り去る。

島田健と小田切裕子が連れて来られたのは、それからすぐのことだった。

純二は、人の気配に振り向こうともしないで、悩裡の故郷に親しんでいた。

「純ちゃん！」

——あ、妙子さんの声！

驚いて見る彼の前に、小田切が、島田達が立っていた。

——小田切さんか、あの声……。

彼は、彼女の字が、妙子のそれと似ていたことも想い出した。

島田が先づ腰をおろす。

常に朗らかなゆき子は、美紀にからみついて転がった。彼女達の白い足に、純二は目のくらむような都会のにおいを感じた。

島田は、敢えて話そうとせず、流れてくる歌声に合わせて、調子よく歌い出した。

小田切裕子が、思い出した様に純二に言う。

「純ちゃん、音楽きらい？」

「もとは、好きだった。」

「今は？」

「この頃、好きも、嫌いも、ない。何でも、ただ、ボーッとなって……。」

純二は、小田切の顔が曇るのを見て、あわててつけ加えた。

「でもね、さっきの、うさぎおいしかの山、っていうの、すごくよかった……。」

それを聞いて、島田が、目を輝かせる。

「おい、ホントか。僕がタクトとったんだぞ。ねえ、小田切さん？」

「でも、歌ったのは私たちよ。」

「ああ、そうか……。そりゃ、そうだけどさ。」

彼が、幾分不満気に言うと、ゆき子が、

「合唱団も指揮者もいいけど、それより、滝川先生の指導がいいんじゃない？ ねえ。」

と、古川美紀に同意を求めて、うなずくのを待った。

その夜、純二は、二ケ月もつけずにいた日記を記した。

日記をつけることが、自分をみじめにするだけだと思っていたが、小田切さんに言われてつけることにした。

滝川先生が、グリークラブの指導をしているとのこと。彼らの歌声が耳の底からきこえてくる。歌える人が、うらやましい。

今日も妙子さんから来信。又、例によって読まない。いや、読めないのだ。片輪になったことを、彼女は知らない。

悶々とした毎日に、何かの光明を見い出そうと努力しているうちに夏休みになった。その最初の日曜日に、村上は、島田と小田切裕子をさそって、純二を訪れた。

暑い夏の日に、純二は、自分の部屋だと言うのに、靴下をはいている。

「純ちゃん、すてきなのが来てるよ。」

村上は、そう言いながら、妙子からの白い角封を差し出した。三色刷の記念切手が、目にしみる程鮮やかだった。

純二は、又、影が、心に走るを感じながら、

「そこに入れといてくれ。」

と、柱にかかっている状差しを指した。

「もう、はいらないぜ！」

村上は、陽気な叫びを上げてみたが、

「あれ！ 純ちゃん 全然みてないの？」

と、不審の叫びに声の色を変えていた。

封も切られぬ手紙の下の、机に飾られた二輪の白ゆりが清らかだった。小田切裕子は、白ゆりに手をさしのべて、香を楽しむ風を装った。村上は、純二の前に座って静かに切り出す。

「ねえ、他人のことに口を出しすぎるって、怒らないでね。この手紙の人、どんな人？ どうして、みないの？」

「中学の同級生……いい人だったな……。でもね、この人に、ケガしたって知らせてないんだ。だから、その人の手紙を見るなんて、出来やしない。夏休みにはきっと帰って下さい。とか、清らかな川が待ってます。とか走り高跳の記録は更新出来ましたか。なんて、そんなことばかり書いてあるにちがいないんだ。」

純二は、憂うつそうに顔をしかめながらも、田舎人の生真面目さで、それに答えた。

島田が、純二の隣りで言う。

「高跳の記録って？」

「僕、県の中学の最高記録を持ってるんだ。それなのに、今は、この足じゃ、ハイジャンどころか、体操も泳ぎも出来やしない。」

皆が、努めて避けてきた彼の足について、彼自身が、ザクリと切り込んだ。彼は、気まずく黙ったままの三人を無視したかのように話し出した。栃木のなまりが、興奮した口調に伴って、時々とびで

た。

「僕ね、君達には悪いけど、みんなの気持がわからないんだ。親切で、僕を、みんなでかばってくれる。カバンを持ってると、みんなが、それを持ってくれるって言うんだ。掃除当番だってケガをしてから一度だってやらせてもらえない。話をする時は、絶対に僕のケガにふれないようにする。河原さんや古川さんのように、みんな愉快気にふるまってくれるんだ。一緒に歩くときなんか、こっちがいやになる程、ゆっくり歩いてくれるんだ。先生だってそうだ。みんなやさしくしてくれる上に、たまに読まされるような時、すわったままでいいって言うだろう。僕は、確かに片輪だ。けど、片輪扱いにされるのが本当に口惜しいんだ。おばさんはおばさんで、今まであったケダを全部どっかに棄てちゃったんだ。僕が、ケダをはけない足になったからね。……僕も、ずいぶん、ひがむまいとして努力したけど……まわりの空気が、息苦しくって、息苦しくって、たまらない……。小田切さんに言われてから、日記もつけてる。けど二週間に書いたことって言えば、結局、他人の親切が息苦しいっていうことだけなんだ。」

純二の目が、ギラギラと光って、三人を圧する。夏の暑さが部屋の沈黙を、さらにいたたまれぬものにした。鳴かぬせみが、羽音をたててとびさった。

彼は、積もりに積った不満を、一ぺんにはき出すかのようにしゃべり続けた。意味は、殆ど同じことを——。

村上達の帰ったあと、純二は、興奮の反動で、一つかみにも余る妙子からの手紙を読んだ。そこにも、彼は、十二分にすぎる親切心と好意とを見なければならなかった。

妙子は、すでに、純二の妹から聞いて、彼のケガを知っていた。慰めと励ましの言葉が、すべての手紙に記されてあった。——その上、彼の伯父伯母が、彼を養子に迎えようとしている事も知ったし、純二自身が、十六才になった事も知らされたのであった——。

その夜、純二を銭湯に出してやってから、伯母は、純二の昼間の言葉を反復し、かみしめていた。息苦しい程の親切……。

——確かに、そうだ……。

彼女は、常に昼しか湯に行かぬ純二を、今冷たいとも思われる決心で出してやった。彼が、足を見られるのを忌み嫌っていることはよく知っている。本人から、片輪の意識を除かせるのだ。純二が裸の衆人の前にあの足をさらけ出すことに平気ならば、彼は、すでに片輪になった心のいたでをぬぐい去っていることになるだろう。

——その冒険こそ、真の親の愛情かも知れない……。

彼女が、しきりに純二を案じている時に、夫が帰宅した。夫を迎えて、狭い玄関にいるうちに、純二の走る足音がした。

その音——極端なピッコの音——が、伯母の顔色をかえさせた。転げ込んだ純二は、身を投げ出して、幼児のように激しく泣き出した。

少年とは言え、すぐれた体格のこの子の、どこに、これほどの幼さがあるのだろうか。

伯母は、すでにあきらめている夢——我が子を抱きしめてやる夢——の実現に、純二の身体をきつく抱きかかえてやりながら、理由もなく涙を流しておろおろした。

部屋に連れ込まれた純二は、

「見なくたっていいじゃないか。泣かなくたっていいじゃないか。」

と、やおら伯母の膝を離れると、右足を前に出し、

「この足に、みんなで汚れた石鹸のあわを流しゃがった！　じろじろみて、女の子が泣き出して、みんなで、みんなで僕を追い出すんだ。可哀相に、って言いながら、気味悪がって逃げるんだ。早く出ればいいって顔で、横目で睨んでいやがるんだア。ちくしょう。女の子が、女の子が、こわいこわいって、僕に、石鹸をぶつけやがった……。俺のどこが悪いんだよお。俺が、あいつに、何をしたって言うんだよお。」

純二は、一人で夢中で親指を握りしめて泣きわめいた。その指は踊る人のしなやかな小指を思わせる程やわらかく曲がるのだった。彼は、足を抱きかかえ、突然、長い親指を口にくわえ、歯のあとをつけ、つるつると光る傷口をなめ、しゃぶり、頬ずりをして、きちがいのように慟哭するのだった。伯父も伯母も、何も言わずに、彼の背をなぜてやるだけだった。

二人の温い手を背に感じながら、純二は、五月の夜の、空を真赤に染め上げたシグナルを想い起こしていた。それの連想か、彼は、あの銭湯の白いタイルを、一面、真赤に、この足から流れる血で彩ってくれればよかったと歯ぎしりする程の口惜しさを感じていた。

彼の耳を、湯桶のぶつかり合う音と、遊間整正機のレールを打つ音とが、激しい怒濤のように襲っていた。

その音に、胸の動悸が、血の逆流を告げながら合唱していた。

一週間後、伯父夫婦のはからいで、たちまちのうちに風呂場が出来上った。

朝、風呂桶が運び込まれると、伯父と純二は、昼間のうちからそれに入った。

模様の入った小さなタイルが敷きつめられ、片隅には木の香も新しく、或いはトゲがささるのではないかと思われる檜の湯舟がおかれている。

「おい、お前も一緒に入らんか？」

伯父は、大きな嬉声で伯母を呼んでしかられた。

「バカ言うもんじゃありません。近所の人に聞こえますよ。」

その、嬉々たる響き。

「どうだ、純二、檜の風呂なんて、久し振りだろう？」

「うん、このタイルが流し板で、その風呂桶の向うから煙が上れば、まるで、栃木とおんなじだ。」

純二は、伯父の背にとりすがりたい気持をかくして、

「おじさんの背中、うちのとっつぁあと、そっくりだよ。ほくろが、一パイある。」

と、ささやいた。心の中で、いくどもいくども、ありがとう。とつぶやきながら……。

その頃から、ようやく、元の、誰からも、好かれる。明朗で快活な彼に、帰りつつあった。

小ぎれいな庭では、柔軟体操が始められた。早朝から、マラソンにもとびだした。

爪先きだけで縄とびをやり、伯母の気遣いも一笑にふして、右足だけでとんでみせる心の余裕も出来た。

彼が逆立ちすると、伯父は、さながら、審判員にでもなったかのよ

うに、その姿勢に文句をつけた。
伯母の背丈程もある物干し竿を、ひらりと跳び越えた時、伯母は、悲鳴をそのまま溜息にかえ、そのあとには、天狗のようだ、とつぶやいてあきれるのだった。
小田切裕子が、ゆき子や美紀達と五六人でたずねて来た時、彼女達は、みな、彼の明るい変北を驚き、且つそれを喜んだのであった。
彼は、しきりに歌も口ずさむようになった。
妙子からの手紙を、又、受け取った日、彼は、実家に、何十日振りかに手紙を書いた。そこに、彼は、こうつけ加えることを忘れなかった。
妹よ！　セッシャは元気じゃ。オヌシもさぞ、達者でおることじゃろう。
ついては、伝言を頼むぞよ。相手は妙子さんじゃ。（知っておるだろうの。）
彼女に、近いうち、きっと、手紙を出すと言ってくやれ。それに、元気でいるということもな。それから、もう一つ。セッシャ、この夏休みは、帰省せぬつもりじゃということも……。
頑健な身体は、たちまちのうちに元に復した。真夏の太陽は、彼の皮膚を、小麦色にしてくれることを忘れはしなかった。
そんな頃、村上武男は、体育の滝川先生に言われて、又、純二を訪れた。
体操をしに、登校するよう伝える為に——。
短かすぎると思える夏休みは終った。
この間、純二の生活は、充分に満ちすぎて、はちきれんばかりのものだった。
彼の平行棒での妙技は、オリンピック選手の滝川先生ですら、舌を巻く程だった。
かって、純二が懸念した、最高潮に達した時に出るだろう失敗は、彼の頭に、カケラほども思い出されなかった。のびのびとした大技、的確な間、流れるような連続技、そして、ピタッと静止する着地、絵に描いたように均勢のとれた姿勢。
平行棒も鉄棒も、あん馬も跳馬も、難物とされているつり輪でさえも徒手体操でさえも、彼は、たちまちのうちにこなして行った。滝川先生に、歌の教えを乞うて歌ったし、村上武男と短距離の競争もした。
走り高跳の記録更新もねらうし、砲丸、円盤投げも試みる。
ランニングシャツから出た肩は、真黒に陽に焼け、一時青かった顔は、たくましくひきしまっていくうちに、一ケ月は終えた。
すでに、クスの友人も先生も、彼を片輪扱いにはしなくなった。
村上や島田や小田切達は、相変らず、常に語らう友であり、ゆき子や美紀に至っては、ダジャレをやめて、議論に、口角にあわをとばす友となった。むしろ、愉快な笑いをまきおこすのは、純二の番になりさえした。
もちろん、妙子に、久しい無沙汰をわびたことも、いうまでもない。
銀杏の葉が、僅かに黄みがかり、島田の指揮で歌う純二達の声に二三葉、ハラハラと舞い落ちる季節になった。
雲は、あくまで白く、下から強く息吹けば、煙のように流れるだろうと思わせる。

空は、あくまで碧く、たっぷりと水を含んだ絵筆を振れば、サーッと散るだろうと思わせる。
高い声、低い声が、美しいハーモニーをなして、秋の碧空に舞い流れる日が続いた。
運動会の日。この日も、きれいすぎる秋晴れだ。何十発もの祝砲が、上空で、パッパッと散って青空に挑みかかって行く。
純二は、血潮に高なる胸を張って、我れと我が心にこう叫んだ。
——そうだ！　若いんだ。胸が、ドキドキする。東京で、初めての運動会だぞ。
競技種目はどんどん進行する。歓声が、林に囲まれたグランドから、紺碧の空へとわき上る。
今、午前の部の最後の種目、学年対抗のスエーデンリレーの最中だ。
三年、二年、一年の順で、百メートルが、二百メートルが終った。三百メートルの村上が、猛烈なスピードで二年生を追い上げる。十五メートルの差が、七、八メートルに縮まった。アンカーの原純二へ。ピッタリと合う呼吸がバトンを渡す。
純二の流れるようなフォームが二年生へ追い迫った。直線コースで五メートルまで近づいた。が、抜けない。正確な距離を保って二年生が先行する。
あと、百メートル。すでに、勝敗の大勢は決したと見て、一瞬の静寂が、グランドを覆った。
と、その時、マイクが、柔らかい声でこう味げたのである。
「……三年トップ。二年が二番。ラストは一年生です。皆さん、一年生の選手は、去る五月以来、足の御不自由な原純二さんです。御声援をお願いします……。」
言い終らぬうちに、嵐のような拍手が、生徒席から、父兄席からわき起った。
嵐のような……、そう、その嵐に吹きとばされたように、純二が、ガクンとのめったのである。
スピードは落ち、二年生との間隔は、見る見るうちに広がる。今まで、何でもなかった純二が、激しく、ビツコを引き出したではないか！
拍手が、パラパラと、ためらいがちに響いて、消える。
父兄席にいた純二の伯母は、真青になって立ち上った。三年生がすでに切ったテープの端を持って、小田切裕子が、唖然となって純二を見つめた。
純二は悲愴な面持で、蒼ざめて走る。足を、ガクン、ガクンとのめらながら。
「がんばれ！」
村上がどなる。純二の額から、タラタラと汗が流れた。
ゴールラインの上に、ビツコの足が止まると、そのまま、彼は、朽木のようにぶっ倒れた。
島田がかけよって、村上と共に純二を抱き起こそうとした。小田切裕子も、遠慮深そうに手を貸す。純二は、ク、ク、ク、と、胸をこみ上げるうめきにむせながら、悲痛な声でつぶやいていた。
「なんにも、なんにも、ビツコだなんて言わなくたって……言わなくたって、いいじゃないか。」
島田が、低いが、力強い声でささやいた。
「暗示だ。暗示にかけられたようなものだ。大丈夫、大丈夫だよ。

本当は、何でもないんだ。純ちゃん、歩いてみな。歩けるよ。走れるよ。徒手体操だって出来るんじゃないか。ハイジャンやっても平気なんだよ！」

純二に、彼の言葉は、不思議な力を持って、自信をわかせた。

「純ちゃん！　立ってみろ。走いてみろ。平気だ！」

純二は跳び起きた。

思わぬ事態に、生徒も父兄も、誰一人動かずに、ゴールライン附近を注視している。

滝川先生と田柴先生が歩り寄った。

「どうした？　原！」

純二は、右足で片足跳躍をしていた。

島田健が、先生に、明るく答える。

「何でもないです。ちょっとスジがつっちゃったんですけど、もう大丈夫のようです。」

周りの人達が、一様に、ホットした表情で肩をおろした、

グランドを出て、林の中の小径を行くと、バレーコートが二つ並んでいるすりばち型のグランドに出る。

その緑の傾斜や、そこここの木蔭に、幾組かのグループが、それぞれ楽し気に話し昼食をとっていた。

純二の伯母は、美紀達五六人のグループに連れられてそこに行った。ゆき子が、伯母の持って来た純二への弁当を持ってやっている。小田切裕子が、大きなヤカンと茶碗を持っている。

村上の〝こっちだ〟という声に、彼女達は、純二達のいる木蔭へとにぎやかに入った。

「純二さん、その顔、どうしたの？」

伯母の、とんきような声に、ワアーとみんなが笑う。涙でこすった真黒な顔が、何が？　と、けげんそうに見上げて、又、笑われた。小田切裕子が、

「お水あるわ。洗いなさいよ。」

と、ヤカンを示す。

「あれっ、職員用のヤカンじゃないか？　」

島田の声に、

「役得よ。」

と、胸の、役員のリボンをつまんで見せるのだった。

彼女が注いでくれる水で顔を洗うと、純二は、弁当を開く友人と伯母に、素直にこう言うのだった。

「さっきは、すいません、御心配かけて。もう平気です、この通り。」

と、彼は、片足跳躍をやってみせて、

「又、暴れます。午后は、騎馬戦があるでしょ？　その時に、うんと暴れますから、さっきのことは、かんべんして下さい。」

わるびれずに頭を下げる純二に、島田と小田切が拍手を送る。

「騎馬戦は、純ちゃんと僕、敵同志だな。よぉし、二人で、とっくもうか！」

村上が張り切ると、純二と小田切がそれに続く。

「よおし、やろう！」

「私が、審判するわね！」

伯母は、終始、ニコニコと見ていた。

弁当を食べ終え、果物をむく頃から、彼らを中心に二十数人のグ

ループが出来てきた。

島田の提案で歌う彼らの歌声に、芝草の上から、そして、木蔭から、それに合わせて、若人達の声が響く。

歌声に引き寄せられたように、リズムに歩調を合わせて集ってくる。

一つの歌が終ると、ちょっとテレくさそうな顔をして、そのグループの友達の肩にとびついたりして、人数は増えていった。

「やあ、やってるね。」

滝川先生が、田柴先生と連れ立ってきて、声をかけた。

歓声と拍手がしばらく続いたあと、滝川先生は、みんなの前に立たされていた。

「おぉい、一年生も、二年生も、歌わないかァ。」

先生の声に、無邪気な声が逆らう。

「先生ぇ、三年だっているんですけどぅ。」

「おお、君か。どっかの中学生がまぎれ込んでいたのかと思ったぞお。みんな、中学生でもいいから、そこに並ぼう。」

滝川先生がコートに下りる。たちまちのうちに集まった五六十人が、田柴先生を中心に、傾斜に腰をおろして、ズラリと並ぶ。

「すごい！　立派な野外音楽場だね。何を歌おうか？」

純二は、先生に希望をのべる友人達夫々の声を聞きながら、自分の心が、この青空のように澄み切って行くのに気が付いていた。

ふんわりとした雲は、その空を、さらに、晴れ晴れと高くしてくれる。

――晴れ渡った空に浮ぶ雲は、僕の心を、一層清めてくれる友達だろうか。……とすると……あの雲は……女性的だから……妙子さんかな、それとも……小田切さん……。」

そんなことを思う彼の隣で、小田切裕子が、

「〝猟人の合唱〟がいいです！」

と、先生に希望する。

「どうだ、原君、君は、何がいい？」

先生の声に、うしろの河原ゆき子がドンと純二の背をたたいた。

今の空想に、血が、カーッと頬を染めたのを意識しながら、純二は大きな声で答えた。

「僕も、それがいいです！」

「よおし、じゃあ、〝猟人の合唱〟で行こう。いいか。」

静けき森に朝もやこめて、ハイツ、

静けき森に朝もやこめて
かなたの谷はあけそめぬ
いでたち軽く若人の群れ
今日の集いにいきたか、
えもの求め山路深く
いざや友と連れ立ちて
腕はなりて心軽く
道なき道をかけゆかん

若人の心の躍動を発露するが如く、歌声は、高らかに、十月の空へ舞い上る。

純二は、手にハチマキを持って、力強く拍子をとって歌いながらこの感激を、いかな文で妙子に伝えようかと考えていた。

みんなの振る紅白のハチマキが、稲穂が秋風になびくように、豊かにゆれる。■

純二の伯母は、少年少女の若やかな声を聞き、健やかな姿を目のあたりにして、言い知れぬ感動に目頭をおさえた。

青い大空の下の、緑の大地から、白いちぎれ雲へと、若人の群れの歌声は響く。

ララララ、ラララ……
ラララ、ララ……

静けき森に夕陽はさして
かなたの山をあけにそめ
疲れも知らぬ若人の群れ
今日のえものにいきたかし
思いつきぬ今日の集い
語る友の頬あかく
家路たのし心軽く
えものかざし高く歌え
ララララ、ラララ、ラララ……
ララララ……

――完――

無

三年　吉川幸男

健作は、東海道線の三等に乗っていた。十月の旅行シーズンにしては、めずらしく座席はすいていた。秋の中ばの太陽ではあったが真昼のそれは、強く窓から彼の横顔を照らした。前には丸く肥ったお内儀さんが東京からの土産をかかえて目を閉じていた。通路を隔てた斜め前では、修学旅行視察らしい男が二人、小声でコソコソ話していた。健作は、目を瞑って眠むろうとしたが、静岡にかかろうとする列車の窓から吹き込む風の音と、他の興奮とでじっとしてはいられなかった。隣りの男が朝刊を大きく開いて、剣しい目付きをしていた。又、殺し？　全く、この頃の子供なんてえのは気が許せねえ。

健作は、時々、薄く開けた目で男の顔色を読み取っていた。何？自殺？又、よくもまあ、好き好んで、自分を殺せるものだ。

男は、やりきれないという顔で、それを畳むと、「さて、飯にするか!!」と大きな声で自分自身を誘った。

新聞に出てないのだろうか。――放火？　殺人？　心中？　と……出る筈だ。

汚れた床が、昨日迄いた新聞屋の遇にある古ぼけた机の色と同じだった。新聞か。この男の家にだって、皆、俺達、配達員、が配ってってやるんじゃねえか。この小母さんの家にだって、田舎へ行きゃ、又そこの配達員が配ってやってるんだ。俺達のやってる事なんか、まるで知らねえ見たいだ。東京の人だって、そうだった。他人は皆、天気の良い日だけしきゃ、俺達を見ちゃいねえ。雨や雪の日なんか、そんな日の朝なんか、俺達が、手前より新聞かぶって走ってるのを忘れちまうんだ。〃こんな日、は特に早く読みたいのに〃君は、決って遅いなあ!!〃それが落ちじゃねえか。

ピ・ピーイツ汽車がすれ違って、窓を大きく揺らすと、前のお内儀さんは驚いて硬くなった。隣の男は、目を閉じたまま、飯を頬ばっていた。

健作は、やっぱり叔母さんとこなんか行って損したと思った。俺にとっては、全く、赤の他人だった。叔母さんが俺に、いたわりの言葉を掛けた事が一度でもあったか？　俺の母親代りだとぬかした。母親が、自分の子供に悪態をついて、朝早くから、手前は何もせずに、こき使うか？　手前は、まだ四十五か、そこいらの年なのにだ。

健作は、首を外に覗きかけると、顎の下に手をやって畑の向うを回る大看板の連続を眺めて、東京の、自分の本当の家を思い浮べた。

健作の家は線路のわきにあった。さんの腐りかけた、砂だらけの窓を覆う大看板が、家の中を外から見えない様にしていた。屋根は、今健作が見ている畑の中の汚物小屋のそれの様に、黒く変色した材木の間に、かろうじて挟まれたトタンと杉の木の皮で出来ていた。土間は、トンネルの入口の暗さであったし、畳は、遠くに積み上げてある枯草と同じに、異様な臭いのする茶色の塊であった。汚れていた。健作の父と三人の弟妹の住んでいるその家は、汚れきっていた。荒壁は、きまって柱と柱の間をあけていた。ほおり出した古い御膳の脚の付け根には、白い黴が一ぱいつまっていた。押し入れは、布団だけで十分満たされていたが、そこにほおり込まれたシャツは、病人の汗いの臭が染みついていた。そして、父親に呶鳴り立てられた末の妹が大声をはり上げて家中を震わせ、更にそれをうるさいという子供達の騒ぎがほとんど毎日あった

〃うるさくても、貧しくても、俺はあの家に居れば良かった。父さんは、〃生活補助〃なんてえのは、面倒で嫌だと言って日雇いの金だけでやる。

畜生。叔母さんが、余計な口なんか出さなきゃ良かったんだ。俺が先生の言ってくれた自転車屋へ行こうとしていた時に、叔母さんなんかがおせっかいを焼かなきゃ良かったんじゃねえか。〃同じ条件なら健ちゃん、家へ来ておくれよ。私だって、兄さんを助けて上げようと思ってるんだから、〃と言いやがった。何が同じ条件だった？　「起きて、寝る。」それだけだった。その間にやる事は、やる時間はまるでメチャメチャだったじゃねえか。学校は、定時制ならやってやれるよ。兄さんとこに月末には、必ずいくらかでも、仕送りはするつもりだし、私の子供になるのと同じなんだからね。〃と騙しやがった。その結果が何だ。〃よく働いておくれ〃それだけで終いだ。都合の良い様に、あっちこっち、ひねくり回して文句の言い通しだったじゃねえか。義理がどうの、人情がどうのと口に出しやがったくせに、父さんとこに、いくら送った？　悪魔奴!!　夫婦揃って強欲の塊だ。吸血鬼だ。畜生。

健作は、興奮して赤くなった目に涙を浮べていた。大声で呶鳴ってやりたかった。

隣りの男が、怪訝そうな顔付きを健作に向けて、リンゴにかぶりついた。
「兄いしゃん。どうしたんだねィ。しゃきから、何い、ボツボツ言っとをんじゃねイ?」
「……。」
「何いか、あったんかねィ?」

泥の跳返りで汚れている硝子戸を強く開けると、第三区の配達を終えた健作が、無言のまま、頭からすぶ濡れになって跳び込んで来た。表を通る自動車が、又、泥を跳上げて、雨の中を突走って行った。
「健作か!! 遅いな。五時になるじゃないか。」時計を見上げながら、運動不足で肥り過ぎの主人が、大会社の社長の様な恰好で、拡張員を相手に打合せをしていた。
「このぐらいの雨で何だ。一〇〇や一五〇の家を回るのに、何時迄かかる。ン? まだ、五区の分が残ってんだろ? 早く配って来な。早く」
二〇〇部余の夕刊を、決して濡さぬ様に、四〇分で回った結果がこうだった。店には、まだ、同時に出かけた者は一人も戻っていない。電力節約の為に暗い板の間の上に積まれた新聞が健作の肩からの帯と包装紙とで巻かれた。
健作は無言で戸を開けた。
「馬鹿野呂!! 雨が吹き込むのを知らねえか!! さっさと閉めろい!!」四十過ぎの拡張員が驚嘆する程の声で主人ががなり立てた。

風が、健作の顔に強く吹きつけ、雨が横なぐりにぶつかって来た。五時十五分前か。よし!!これも、四〇分の大スピードだ。閉めた硝子越した主人が睨みつけて言った。
「新聞、濡らすなよ!!」
健作が、背中普に泥を散らして走り回るのを見た人は、まるで気違いだ。と言った。新聞ばかりに気を使って、濡鼠になっている健作は、同区域の仲間に、〃要領悪いな、お前。〃と笑われた。古めかしいゴム草履と汚れたスボン。雨に当って、却って綺麗になる様な体。確かに、常人の恰好ではなく見えた。お前の恰好なんかに気を使ってちゃ、飯の食い上げになっちまうからな。お前は、俺達が貧乏世帯から引っぱってやった、住み込みの小僧だぞ。そんなのにどうこう言っちゃいられねえ。お前は、新聞だけを大事にして、俺達の言う事聞いてりゃいいんだ。
健作は、遮二無二走り廻って仲間に笑われた。お前は、マラソンの選手にでもなる方がいいな。そいじゃなきゃ、田舎の郵便屋にな。健作は、そう言われる度に主人の言葉を思い出していた。お前は、俺達が拾い上げげてやった、貧乏神の子供なんだぞ!! 健作はそれを急い出すと、又走った。笑われても、馬鹿にされても、みっともなくても。
ゴム草履がピタピタと足の裏にあたって軽い音をたてていた。雨はまだ降り続いていた。展敷街と言われる様な、高い塀ばかりの家の集りが、〃五区〃だった。高級外国車が、時折、舗装しかけた道の砂利を跳ばして走りぬけた。健作は何も考えずに走っていた。山田さんに二部入れて戻る。左に曲って三枝さん一部、隣の山内さんに一部。……そんな事は、考える迄もなく、自然にやっていた。

二〇〇軒が真直ぐ並んでいるなら、数分で終るにきまっている。配達区域は、申し合せた様に、そうはいかなかった。路地があった。階段を上った奥にポストが小さくあった。半紙一枚がやっと通る隙間をポスト代用にしているのもあった。アパートがあった。しかし健作に、そんな不平や不都合をどうこう言っている暇はなかった。今は只、走って配ればいいのだ。猛犬注意の屋敷でも、新聞受けがなければ、奥迄入って行かなければならないのだ。それより、まずお得意様と称する怪物の文句を受ない為に、一秒でも早く、一滴も水をつけない様に、一分も破らない様に届ければならないのだ。がそれも考えていなかった。条件反射という奴だった。肩から斜めに回した帯でとめられた新聞を身につけた時、自然に、無意識の中にそういう心がけを実行しているらしかった。健作は、石の塀で囲まれた、迷路に入った様に、走っては戻り、戻っては横に入った。雨だというのさえ気付かぬ様に、冷めたく濡れたまま走っていた。
正確に四〇分間走り続けた健作が、店に戻ると、重大用件があるという触れ込みで配達を終えた中学生が五人残っていた。入ったとたん、又、あの陰気な臭気が健作の鼻をついた。冷々する様な空気だ、と思った。
〃親父さん〃の奥から出て来る迄、皆は、てんでに騒いでいた。
「健さん。何だろうな。」
「ん? ……ン。」
「お前、知らねえの? 店のモンなのによ。」
「……う……ん……。」何だか、俺も知りてえ、とこだよ。オジさんが話してくれるわけがねえ。俺に余分な事話したところで、店が儲かるわけでもねえからな。とにかく、俺は、この家でこづき回されているだけで、その内容はちっとも知りゃしねえのさ。全てが、お前達とおんなじだよ。
「健さん、配達が速いだけでよ。何んにも知りゃしねえんだな。家のもんなのによ。」と、誰かが、健さんは頭の低い奴だ、と言いたい様な口ぶりでそう言った。
「だけどよ。ほんとに何だと思う? お前。」
「知らねえやな。」
「拡張しろ、てんじゃないかな?」
「そうかもしれねえな。この頃、お前等、たるんどるぞ!! かもしれねえぜ、けどよ。」
「健さんの予想はどうどうだね? オイ等より年上のモンの予想としてよ。」
おそらく拡張の事さ。さっき、拡張員の親父が店に居て何か話でたからな。あの親父、この辺じゃ拡げ難いモンだから、他店行くらしいんだ。オジさんが、その代りとして、俺達使うらしいんだ。お前達も感付かねえか?
「拡張の事かもしれね。」と健作は答えた。
六時も近くなると、店の中は十二人の、〃配達員〃でワンワン響いた。皆、大声で喚鳴り合った。
「誰か、他店の新聞抜いてんの見つかったのと違うか?」
「知らねえよ!!」
「お前、怪しいぜ、さっきから、知らねえ、知らねえばっかちでよ。」
「うるせえなあ、あったく!!」
「そうかよ、そうかよ。お前は頭が切れるから、俺達なんかの話に

〝仏様〟だろうよ。」

知らぬが〝仏〟の知らん顔ってわけか。うまい事言う奴だ。〝知らねえ〟よりよっぽど頭が切れるぜ。そう思いながら、健作は自分のいた家を思い浮べた。父さんとこ行きゃ、きっと、これより騒いかもしれねえな。妹が泣けば、ここのオバさんなんか、一たまりもなく外に飛び出すだろう。ハッハッハッ。

「やかましい!!……」障子をひっかき回す様に開けた女主人が神経質に、尖った頬骨を視かせて睨み付けた。

「何をペチャペチャ喋くり回ってるんだい!! え? 今、オジさんが行くから、それ迄少しは黙っといで。いいかい!! 全く……」

一瞬静まった店内に、ボン、ボン、ボン……と、六時を、古い柱時計が打った。

「ヘッ。コノパパ。ヤニ、イパッテルチャネヘカ。アンマリイヒキニナルナヨ。オレタチカ、イナクナリャ、オメヘサンタチ、パーナノヨ。スベテカ。」

二区の北川が、小さな声で言うと、回りが、クックックッと笑いを洩した。

「何がおかしいんだい? 健! お前か?」

とんでもねえ、オバさん。オバさんだって、北川が言ったの聞えた筈だ。北川が、隣りの子だからといって遠慮してるのか? 遠慮なんてコト知ってるだけいいけどよ。八つ当りはやめてくれねえかなあ、オバさんよ。

「……。」

健作の黙りこくった目がチラと上を向いて、又、下った。

「皆んなの前で言っとくけどね。健は、家にいるからって兄キ風みたいの吹かせているんだったら承知しないよ。ン? お前はやさしく言って聞かせたって分らないんだからね。あたしや、オジさんの陰口を言ってる様じゃ仕様がないよ。いいかい!! 十七にもなりや、物の分別はつくだろ。」

分別はつくよ、オバさん。分別がつくから、俺は黙り虫になってやってるんじゃねえか。やさしく言ったって分らねえ? やさしくもむつかしくも、言って聞かせたなんて事あ、ありゃしねえよ。オバさん、分別がつかなきゃあ、この家にじっとしてなんかいられねえよ。本当だぜ。

「バカヤロ、テメヘノ、チカラタケテ、オレタチホ、オサヘテイルトオモツテイルンタ。」北川が、今度は口の中だけでそう言った。舌ら回らない話し方をする北川は、中三・だったが年は十七だった。

オレハ、ショウガッコウノトキカラ、ヤッテルカラナ、〝ニク〟ノコトニカケチャ、トンナ、コトテモシッテルンタ。オヤチ、サントココノ、ババア、オレニヤメラレルト、コマルンタヨ。と言ったことがある。本当だった。強欲の生きものの様な、オヤジとババアは、今更、二区に他の者をつけると、「損」をするという事を知っていた。北川の愛敬のある顔と声が、二区の人達に可愛がられているのも、集金がきちんと早いのも、だから、拡張もうまいのも、みんな計算済みで、北川に一目置いているのだ。その上まだ子供だ。たった、四千か、そこいらの金で充分働いくてれる。

静けさが、又、終ろうとした時、親父がのそりと出て来て、土間に居る『子供』達を見回した。何かを悟すように、落着いて、ゆっくり一人一人の顔色を覚え込むと、隅にある椅子に寄って行って腰

をトン、とすえた。『子供』達は緊張して、その方に体をずらした。親父が目玉を天井に向けたまま、呻く様に言った。

「相談だがな。拡張についての……な。」と。

数人が、やっぱり、オイラの勘は当った、と思ってニヤリとした数人が渋い顔をして、どんな相談だろ? と思った。あとは、黙って親父の口許を見詰めていた。

「オジさんは……ずっと…前から考えていたんだけどな。こうしようと思うんだ。……いや、これは、守ってもらいたいんだよ。もう決ったものとしてな。」

じゃ、相談じゃねえ。伝達に過ぎねえじゃねえか。オジさんは、何時でも、こういう言い方で俺達をマクんだ。

「月、一人当り、五軒は責任数とする。分ったか? うん、五軒は必ずやってもらいてえんだ。五軒はな。

五軒迄は、今迄通り一部の拡張手当、二〇円としても、その代りそれ以上は一〇軒迄三〇円出そう。一〇軒以上は奮発して五〇円、一五軒以上は二〇軒迄一〇〇円、二〇軒以上の時は、大奮発で一軒につき二〇〇円出そうど思っとるんだ。どうだろ? な。

若し、一〇軒拡ったら、五軒迄が一〇〇円として、残りの五軒は一五〇円、合計二五〇円も給料が増えるんだ。その上、新聞社からの手拭が付くしな。」

五軒? …か。オジさんよ。自分で拡ってみな。拡張をよ。図々しい拡張員だって、そうはうまく行かねえ拡張をよ。本当に五軒出来ると思うか? オジさんは。きっと出何ねぇな。無理だぜ。

「オジさん。五軒できなかった時は?」と八区の内田が聞いた。

「今迄の平均が五軒はいきそうだからな。行かせなきゃ困るよ。若し、四軒しか出来ない場合は責任をとってもらうよ。本人にな。いいか。」

内田は皆の方を振り向いて顔色を伺ったが、黙ってしまった。主人は心得て促した。

「なに、五軒と言ったって、一生懸命やればすぐだ。表にして貼っとくから、頑張ってくれな。」と。

そして健作に「それを、お前がつけろ。」と言った。

健作は無口に見えた。内気に見えた。又、陰気な奴だと言われた。気味が悪いな、と思われた。確かに、そうは見えた。だが健作は、そうは思っていなかった。

自分が無口だあ、陰気だあ、内気だあ、なんてえのぐらいは、若しそうなら分るさ、俺は違う。分別だ、分別。俺には『家』があるんだ。弟妹がいるんだ『家』にゃ。それが分っているから『家を』オバさんが世話してくれるというのを知っているから、黙っているんだ。俺が、オバさんに文句でも言ったり、オジさんに逆らったりしたら、どうなる。『家』に金を送らなくなっちやうさ。オバさんは。初めの約束がどうのこうの言った所でどうしようもねえ。〝そうかい。出て行きな。〟それで終いだ。〝その代り、今迄世話したまあ、お礼とか、金とかはもらわにゃね。〟その言葉で参っちゃうのさ。とにかく俺は、この家の者の言う事をすればいいんだ。俺よりか、『家』が大事だからなあ。

「ええか? この週刊誌を持ってな。ああ。いくらでもあるよ、そりゃあ。要領ぐらい、もう知ってるわな?」

要領? 知ってるも何もあったもんじゃない。古週刊誌を出して、大人びた口を使って、粘って、食い下って、頼み込んで、お世辞笑

いをして、泣き声を出して、屁理屈をたたいて……。お辞儀ばかりして……。それで駄目なら、「じゃ、又お願いします。どうも…。」か「チェッ。畜生奴。ケチな家だな。全く。」のどちらかをとる。いや、翌日も又、その翌日も来て同じ事を繰返して、粘り通す手もある。

「よし……と。オジさんの話は、これだけだ。まあ、とにかく、五軒やってくれりゃいいんだよ。」

「オジさん！」と内田が聞いた。

「責任……て、どういうこと？　五軒拡張出来ない時の責…任、って。」

「ン？　まあ、仕様がないから、本人に不足分だけ何か月か新聞とってもらうのさ。」

「……。」

「そういう事にしとかにゃ、店は伸びんからなあ。」

「だって……」

「〃社〃からそう言われたんだから、オジさんは、どうしようもないんだ。まあ、……やってくれな。」

「タケト、セキニン、ナンテモノカアルト、イヤタナ。」

「何!!　嫌だ？　オジさんが温和しくしとるからって、ふざけた事言うな!!　お前達は、此処で働いてるんだ。いいか？働いてるんだぞ。

オジさんは、お前達に命令はせん。頼むんだ。嫌なら嫌でいい。頼まんから。オジさんは、お前達の将来のことを考えてやってるんだ。今、楽しい事ばかりで、大人になったって、大したものにゃなれん。中学の時にゃ、大いに辛い目、悲しい目に会って大人の土台を作っとくのだ。オジさんは、別に、お前達を怒ったり、説教なんかするつもりはないよ。お前達に威張ったってどういう事もないからなあ。オジさんの子供の頃は……。」

そこ迄言われると『子供』達は、なるほどと思ってしまった。本当だなあ、俺達は、オジさんに使われてるんだし、今の俺達ぐらいの時に苦労しとくのは、大人になってから役立つだろうからなあ。それにオジさんは頼んだんだからなあ。五軒ぐらい何とかやれるよきっと。そう思ってしまった。

「健作、じゃ、表は今からでも作っといてくれ。」

「……はい。」と健作は口の中で返事をした。

若労……といってしまえば、終いだあ、何だって、オジさんよ。全く、うまい口実見つけたなあ。俺だって、うなづきたいくらいだものなあ。だけども、口で言う程、五軒の拡張は楽じゃねえぜ。拡材が古雑誌やそこいらじゃな。それに、俺だって出来るかどうか…出来ねえ時、どっから金出しゃいいんだ？　俺は、小遣の一銭も持たねえのに。

拡張手当……俺にもくれるつもりか？　オジさんよ一〇軒やったら俺にも二五〇円くれるか？　オジさんよ。皆んなの前でそう言ってくれねえかなあ。俺、万年筆が一本欲しいんだ。〃くれる〃って言ってもらいてえな、皆んなの前で……。

雨が、強くなった風に煽られて、硝子にビシビシ当った。『子供』達は、緊張した空気から抜け出すと、てんでに「サヨナラッ。」と言って散って行った。土間の、黒く固まった土に水が溜って、店の中を更に陰気にしていた。暗い中で柱時計がゆっぐり七時を打った。

「健作。表は終ったか？」

「あと、ちょっとで……」

「早く終らせて、飯の仕度しな。」

「……ン……。」

寒いなあ、と健作は思った。十月だからな……。丸首の半袖一枚じゃ、寒いや。

健作は、四時きっかりに目を覚ました。体が冷えて硬くなっていた。薄い布団が、店の板の間にへばり付いた様に幽かに白く見え、これも冷え切っていた。寒いな、と健作は思った。

そして健作の一日が始った。夢？　見たっけかな？　ゆうべ。もう考える暇がなくなった。折り込み広告を揃えなければならない。十三区あるこの店の、各々の区枚数と、広告主との要求を考えて配布しなければ。

数千枚を十三の山にして、今迄の一〇Wを六〇Wの電燈にきり変えると、すぐ四時半になってしまう。『子供』達が明け方の寒さに震えながら入って来ると、新聞社のトラックがキュー。と止り新聞の包みをほおり出す。

全てが規則正しく進んで、健作は店中に陣取った『子供』達に、手速く規定部数を配って「組み」にかかった。三区と五区を一人で受け持っている健作は、二倍の速さを要する。自分の走る道順通りに、新聞を揃えるのだ。

五時一五分、夕刊より、ぐっと重い新聞の束をつけると、三区から配り始めた、五時半過ぎに街が明かるくなって来ると、白いモヤが一面に漂っていた。足が冷めたいな。と思った。ゴム草履がピタピタと音を立てて、空気の冷めたさを強くする様だった。歩いていれば、考えは次ぎ次ぎと浮んだかもしれない。しかし、健作は夢中で走った。四〇分で終らせなければならなかった。只、走った。

〃白い息をはずませて……〃等という歌の様に、健作の新聞配達も楽なものであったならば、良かった。

足が冷めたいな、と健作は又思った。

店の時計が七時を鳴らすと、自分の持場を終えた『子供』達が、全て帰った。健作は無言で店を掃いていた。

俺は、眠いなあ、オバさんよ。十一時に床に付くんじゃ、寝てるのは五時間しかだぜ。早く寝ようとすりゃ、若い者が、こんなに早く何だと言うし、文句を言えない俺だと思って、そのくせ、一日中コツキ回すんだからなあ。オバさんは？　十一から七時過ぎ迄たっぷりか。まるで俺が持ってる店みてえなもんだぜ。これで、俺んとこに金が入りゃな。

「健作。豆腐屋行って、納豆二つ買っといで。」と、冬衣で身を包んだ女主人が言った。八時近くになって、健作の空き腹に、きまりきったおかずのタクワンと飯が入った。

「お前が家に居た時を考えてみな。今みてえにたらふく食えたか？」

主人が健作の手元を見ながらそう言った。

健作は黙っていた。はしがカシャカシャと〃健作の家〃の雨漏りの様な音をたてた。

父さん、どうしてるかな……どうして。

「健!!　今日は？　ン？　八区を回るんだな。？」

主人がいきなり言った。

「アア。」夢からさめた健作に、女主人の声が被さった。

「ちゃんと、片づけて、掃除してからだよ!!」
主人は、テンプラを恐れて、一軒一軒、毎月確めさせていた。拡張を胡麻かす、『子供』達の苦肉の策のテンプラを。
『子供』達は、一旦、或る家が取るのをやめたことにし、その家の名を変えて拡張出来たと届け、手当を戴いて責任逃れする。勢一ぱいの抵抗をすることがあった。
主人は、店の発展の為に、自分が儲ける為に、その防止と発見を健作にやらせた。『子供』達の知らぬ間……昼間に。
「昼にゃ、コッペ買いな。」と、一〇円が、育ち盛りの健作の手にいつもの通り渡された。
オバさんよ。俺、メシぐらい充分に食わせてもらいてえんだけどなあ。水ばかり飲んでちゃ、俺、負っちまうぜ。
「区に着いてからじゃ、見っともないけど、それまじゃ、走ってきなよ。」
「……。」
「分ったのかい? 気味の悪い顔でぐづぐづしてないで、早く立ちなよ。」
気味の悪い…か。オバさん。俺の顔、痩せてるだろうな。青いかもしれねえな。

或る日。
夕刊を終えた健作に叔母が言った。
「お前の父さんが死んだよ」と。
事もなげに言った。〃お前の父さんが死んだよ〃と。事もなげに。
健作は、手にした拡材をバラバラと床に落した。口許がヒクヒクッとつった。叔母の顔を見たまま、体が固くなった。
死んだ? 父さんが……死んだ? なぜ、死ぬんだ。
「本当……に。」
「ああ、本当だよ。さっきね。夕刊見たら載ってるじゃないか。驚いてね。子供達と心中らし……」
心中? 父さん達が? 叔母さん。本当なのか? 叔母さん、平気なのか?
青い顔が、ドス黒く変った。叔母は、健作の驚きを無視して続けた。
「うん。オジさんとさっき話したけどね。どうせ、お前が帰っても同じ事だから……、」
何!!
「オバさん!! 帰っても同じ事って!! そんなのあるか? 心中だと言ったね。オバさんは。心中迄した父さんとこに、帰っても同じとは……」初めて健作が、大声を出した。舌がもつれる様で、もどかしかった。
「何も……健作。落着いて……。」
「じょうだんじゃない。」健作の声が震えて、空虚な目に涙が溜った。叔母が、何かとりとめもない様な事を喋り出したのを、只、ボンヤリと聞いていた。
父さん! ほんとう?……心中なんて…。俺、どうなるんだ。この家にいるのか?叔母さん達の世話になっていながら、父さん……。心中だなんて。
「だから、暫時、この家にいて……ね?」叔母の話が終ったらしかった。

「聞いてんのかい? 健作は。ン?」
「……、」オバさんよ。俺ン家の方…どうなるのかな。それより、父さんなぜ心中なんかしたんだろう。オバさん達が金は送っる。体だって、まだまだ……。
「どうして心中なんか……。」
「オジさんとも、言ったんだけどね。」オバが言った。「とにかく、金に困ったらしいんだねえ。三人も子供持って一銭も入らなかったらしいんだから。」
一銭も? 一銭も入らねえ……って、どういう事だ、一体。
「だから、あたし達の好意をそのまま取っとけば、それで良かったんだってね。オジさんとさっき……」
「オバさん。金、送ってなかったのか?」
「……」
「オバさん。金、一銭も送ってなかったのか?」健作の、力のない声が繰返された。
「金……一銭も、送ってなかったのか?」
「……」叔母の顔が曇った。しまった! 言わなきゃ良かった。
「まあ、送らないって事は、なかったんだよ。……最初ね、一万円送ってね……。」
「一万円?」
「あ……、いや、五千円ね。……そうしたら、心配はいらないって返事が……。」
「嘘だ。」健作が、ポツンと言った。
「え?……だから…あとは……。」
嘘吐き奴!! 父さんは、字が書けないンだぜ。子供? 学校にゃまだだ。何が好意だ。仕送りの約束はあるじゃねえか。
俺は、何の為に働いてたんだ? 父さんの為に、妹達の為に!! 何の為に、今迄こう、おし黙っていたんだ? 少しでも、父さん達に楽を……嘘吐き奴!!
「オバさん。嘘だよ。それ。」
「え?」
「俺、騙されてたんだなあ。」横っ面を、ひっぱたいてやりたかった。思いきり!!
父さん。俺、どうすれば良いんだ。……オバさんよ。俺は、もうこの家やめるぜ。こんな家!! 畜生奴!!
「健作。お前まだ。此処に居るだろうな?」と、主人が障子を開けながら言った。
「四年間の約束だからな。」
「四年? 約束?そんなもの! 仕送りの約束は?何の約束も勝手なもんだ。自分の都合の良い様にしちまうんじゃねえか。」健作は、独白を言う様にそうつぶやいた。
畜生奴!! 今からでも出てってやる。俺が居なけりゃ、どれだけ不自由するか。
何の為に、朝から晩迄、働き回ったんだ? 手前の金にゃならねえ拡張を、一体、誰がやるっていうんだ?
時計が静かに六時を打った。
「健作。お前、まあ、今は気が昂ぶってるから、ン? 明日な? 朝、相談しようじゃないか。お前だって、此処出てからのあてもあるまい?ン?」主人が声を落して健作の顔を見詰めた。

「ン？……お前の為にも、その方が良いよ。」と叔母が相槌を打った。健作は、半ば開きかけた口を震わせたまま、じっとしていた両手が折れてしまったかの様にダラリとしていた。
「まあ、まあ。落着く迄、奥で……。」
健作は、動かなかった。俺に、お世辞使ってるつもりか？　もう、騙されねえぞ。落着いてから、何が出来るってんだ。父さんは帰って来やしねえ。今迄の俺の苦労は報いられやしねえ。しねえさ。だから、皆んなに、ジジイとか、ババアとか陰で呼ばれんだ。俺の、この一年以上もの無駄が、どうやって補える。騙されやしねえぞ。たまるか!!　父さん達は、どうなった？　オバさんよ。オジさんよお。前さん達の間接殺人!!　って思えるなあ。違うか？　え？
「さあ、店に何時迄もいると、外から丸見えだ。奥へ行こう。な？　健作。」
「……」俺…俺の姿がみっともねえってのか？　俺の声がでか過ぎるってのか？　原因は何だ？　え？　オジさんよ。
「ン？　お前の気持は分る。分るよ。部屋行って、ゆっくり話そう。……そうしなきゃ、おさまりがつかねえ。」
夢遊病者の様に健作は奥へ行った。
「今日は、オバさんが御飯の仕度するよ。」
と、叔母が当然の事を仰々しく健作を坐らせながら言った。「お前には、落着いてもらって。……」
健作は、思考力が薄れて行く様に思えた。俺、今迄、……損したなあ。オバさんよ。俺……頭、変になってくみたいだ。落着いてく筈だけどなあ。畜生奴!!　負けねえぞ!!
叔母と小父は、台所の方で何か話していた。健作は、坐ったまま、ボーッとしていた。

夜になった。
「もう、十時近くになる。健、寝るか？」
「……」父さん達、殺されたんだ。
「よしっと…。今日は、ここで寝な。店は、寒いだろうからな」
「オジさん……よ。俺、寝たくねえなあ。」と、健作が力なく言った。俺は、何か考えてるんだ。何だろう……何だっけな。父さんと弟と妹と……何だっけなあ。
「畜生奴!!」口の中で健作が言った。
思い出そうとしてるんだ。俺。そうだ！　そうだよ。父さん達が、此奴等に殺されたんだ。殺されたよ。確かに。間接的な殺人さ。誰にも気づかれねえ、〝完全犯罪〟ってえ奴さ。
負けるか!!　こんな奴等に。俺はこの二人を、殺ってやる。
〝殺る〟と思ってから、健作自身は、無になっていた。いや、その考えも、健作の体以外の何かによって作られた様だった。確かに作健自身が無である隙に、何かが入り込んだ様だった。
「布団が敷けたよ。」と、叔母が言った。
「……」オバさんよ。もう、猫なで声は、やめてくれよ。オジさんだってそうさ。どうせ、俺は、もうすぐお前さん達を殺るんだからなあ。せいぜい、思う通り、振る舞ってくれよ。今迄通り、俺を店の板の間に寝かせてくれよ。朝の四時迄な。
「体に毒だから、寝た方が……」
オジさんよ。何と言ったって俺は、この店出るんだ。オジさん達は死んじまうんだ。もういい加減にした方が良いぜ。

すううっと健作が立ち上った。異様な顔だった。顔の神経が何一つとして役をなしていない様に動かなかった。
叔母が、びっくりして後に退ろうとするのを健作は、力強くその襟を掴んで止めた。顔は目を見開いたまま、ピクリともしなかった。叔母が、恐怖で硬くなり、憐れみを請う目付で健作を見た。
「嘘吐き奴!!」健作の、押し殺ろした声がその顔にぶつかると同時に、叔母の体は畳にたたきつけられ、後頭部をしたたか打っていた。健作は、武者ぶりつこうとする小父を、力一ぱい蹴飛ばした。歯をむき出して飛倒れた小父を、もう一度、たたきつけてから健作は隅にあるガス栓を一ぱいに捻った。
急に家の中が静まり返った。只、ガスの漏れる。サーッという音が、一定の強さで聞えるだけだった。
気絶した二人の上を、ガスが取り巻くだろう。そして、死ぬ。死ぬ。
健作は、機械の様に動いた。店の新聞を山と持って来ると、それに火を点けた。ガスの、サーッ……という音の中で、新聞がメラメラと燃え始めた。
あと、何時間かで、この二人は死ぬ。
ガスが部屋一ぱいになれば、この新聞の火で爆発する。しないとしても、気絶したまま、中毒死だ。どちらかになる。死ぬ。死ぬ。
健作は、店を飛び出すと、目茶々々に走った。後が恐かったからではない。失敗を考えたからでもない。只、何かにひかれる様に、無表情で走った。ゴム草履が冷めたいとも思わなかった。何の為に走っているのかも、考えなかった。
十二時に近かった。
そば屋のちょうちんと、看板だけが点いているだけで、もう街中の店は、眠りについていた。何Km走ったか、どこ迄来たのか、分らなかった。
犬の佗びしい声が、オ〜〜〜〜〜とあたりに響いた。
健作は、ピタッと足を止めると、我に返った。気が付くと、右手に五千円近い金を握っていた。初めて、寒い！　と思った。
夜中だ。俺、……何してるんだ？　俺……。
ああ。店を出たんだ。その前……その前は？　殺ったんだ。畜生奴あの二人を殺ったんだ。そうだよ。殺ったんだよ。俺は。あんな奴等に負けなかった。負けなかった。
ガスで殺ったんだ。絶対、死ぬさ。
何処か分からぬままに健作は歩き出した。
落着きたかった。自分がはっきり分らなかったから、もっと落着いてみたかった。
落着いた、場所、を捜しゃ良い。落着いた、きれいな所、静かな所、……へ行こう。浜名、…湖。ああ。
浜名湖が良い。
修学旅行の時の浜名湖が、脳裏にぼんやり描かれた。きれいだったあ。ああの時は。健作の目が、一瞬ぱっと明かるくなった。
「よし。浜名湖へ行こう!!」

——終り——

クラブ紹介

新入生の為、左に、各クラブを紹介します。上段文化部、下段運動部に分けてみました。
一、クラブ内容、二、三十三年度の経過、三、三十四年度への抱負、を、夫々のクラブから提出してもらったものです。（五十音順）

文化部

英語部

一、毎週土曜日にスミス先生に習う英会話の練習には、大体二十名ぐらいの部員が出席します。
二、昨年の経過というよりも、楽しかったことを一つ。
Xマスのパーティに、先生に招待されて、皆、怪しげな英話を使い色んなゲームをして愉快にすごしました。
三、昨年同様、夏休みといえども、登校し、レコードを使用して発音の勉強をしていきたいと思います。

演劇部

一、現在、部員は十五名で、脚本も演劇の参考書も揃っています。
二、去年は全く私達の当り年でした。〃夕鶴〃〃冬のばら〃〃文法〃等の舞台劇、〃銀河の夜の夢〃〃おもん藤太〃等の放送劇、どれもみな好評でした。とりわけ芸能祭で上演した初めての飜訳劇（喜劇）〃文法〃は、沈滞ぎみの芸能祭にあって熱演、満場を爆笑の渦に巻き込みました。
三、待望の新ステージも完成したし、今年こそ、一ケ月に一本劇を上演したいと思います。舞台装置・効果・衣裳・照明専門の部員も必要です。色々と大変でしょうが、どうです、今年は一つ一緒にやりませんか。

音楽部

一、部員　三十五名前後
　練習日は毎週金曜日
二、校内でレコード鑑賞を行った。
三、新一年、二年の方々（特に男子）に入部していただき、発表会等に活躍してもらいたい。

化学部

一、実際に出ている部員三十名。毎週火曜と水曜の放課後を定例として、色々な研究を化学室に於て行なっている。
二、昨年の展示会の「液体酸素の実験」女子部員中心の、食品分析化粧品製造、滴定検査、男子部員の樹脂装造、クロマト、銀鏡製造、その他のデモンストレーション、又共同研究としての松高附近の井戸水の検査、京王、玉川、井ノ頭沿線の映画館内の炭酸ガスの定量等の活躍あり。
三、我々生活に関係深いものを題材にして行ない、将来も続けていくつもりで張切っている。

運動部

山岳部

一、部員約二十名。週に一、二度会合して、体力養成のトレーニングをしたり、登山全般にわたっての調査、研究をしている。
二、昨年度は、穂高岳での夏山合宿を始めとして、春の八ケ岳、夏の南アルプス、秋の八ケ岳、丹沢、冬の奥秩父等の山行きと夏の校庭天幕生活を行なった。
三、部内のチーム・ワークを一層強力なものとし、また広い視野の上に立った有能な登山者をつくって行きたい。

柔道部

一、部員二十四名。内半分が有段者である。一週に月、水、木、金の四日間。三十二枚の畳の上で暴れている。
二、一ケ年の戦績十五勝四敗だが、対都立高校は無敗、且つ十連勝を誇っている。又、都の学年別大会では、城西地区代表として、講道館に出場したこともある。
三、我々のめざましい活躍は、顧問教師、コーチ、そして部員同志が、一丸となって究き進んできたからだと思う。短い練習時間を有効に使って、昨年より、さらに良い成績をおさめたいと決意している。最後に、柔道部員一同の悲願、それは、道場がほしいということです。

ソフト部

一、部員、二九名。
　去年生まれたばかりの新鋭（？）クラブである。
二、夏期休暇中の練習は、昨年は二日間しか出来なかったが、今年はぜひ一週間程行いたい。又、他校チームとの試合をしたいとも思っている。
三、下級生の部員がとても少ない現状であるので、新一年生の入部を大いに期待している。

卓球部

一、現在の部員数九十名。練習日は週三回。現在の卓球台数は四台である。
二、前期は基礎練習を行ない、夏休み中に二週間練習を行なった。対校試合六回。戦績三勝三敗、その他世田谷大会、四校対抗に出場し、優秀な成績を収めた。

家庭部

一、部員、三十名。
食物、被服の二部に分かれている。
二、週一回の割合で、実習を行なって来た。文化祭に、食堂を開き少い設備であったが、結果は上々。
三、部員の趣味を一層広く深くすることが今年の抱負。

華道部

一、流儀は京都古流。練習日は毎週土曜日の放課後。部員数六十余名。親切な先生とでチームワークは完全なものです。
二、文化祭等にも毎年部員の腕を発揮して、賞讃を受けています。
三、去年より一層がんばるつもりです。ぜひ、我が部へ。

写真部

一、際に活動している部員は、数名であるが設備は完備。
二、撮影会一回。展示会二回。新聞委員会の写真をも受持つ。
三、今後も新聞委員会の写真を一手に引受け、活躍するつもり。

珠算部

一、部員は、名簿上三十名。一週、三回の練習。
二、基礎練習の後、各級毎にタイムを計りプリント、実務もやった
三、新一年生と共に、立派な珠算部にしていきたいと思います。

書道部

一、書道の好きな人（決して上手な人ばかりではない）二十余名で週に一回練習しております。
二、色々な書道展に出品し、良い成績を修めました。
又、お寺に拓本取りに行ったりしました。
三、作品批評並びに諸研究。楽しいクラブにしたいと思います。

数学部

一、毎週水土の外、夏休みを大いに利用した。
二、夏休みには問題を中心にやり成果を収めた。
三、新一、二年生の熱意と努力に期待する。

生物部

一、部員　四十名、うち女子四名。
二、生物部の伝統的研究であるショウジョウバエの研究班、動物がこの世に生れ出て成長して行く過程を調べる発生の研究班、鳥について研究し且つ剝製等を作る鳥の研究班、プレパラートの製作班、細菌等について研究する培養班、以上の様に、研究科目を分

三、一年生を主体とし、対校試合をどしどしやる。女子が少し弱体であるから強化する。卓球台を一台ふやしたいと思う。
新一年生に期待してまとまりのある活発な練習を行ないたいと思う。

庭球部

一、部員、百余名。
毎日三十名前後が活動。
二、練習不足の為、試合は負ける事が多かった。
三、今年度は、第一に昨年非常に少なかった対校試合を多くし増々実力をあげ、第二は昨年度は試合の出来るチームがわずか一チームしかなかった女子の強化を計り、チーム数も六チームぐらいにしたいと思う。

バスケット部（女子）

二、部員は十七名。練習日は、毎週火、木、土で、土曜日は特にコーチャーを迎えてコーチをしていただいており、火、木曜日は部長の指導によって系統だった練習をしています。
一、今までの試合の勝率は二割五分です毎月一回づつ第一商業と試合する事になっており、一勝二敗という結果です。この汚名をのぞこうと部員一同はりきって練習に励んでおります。
三、今年は、新二年生の活躍を望んで居ります。この三月には甲府に遠征試合をしたいと思っており、又、去年よりもより一層の練習にいそしみ、もっと白星をあげたいと思います。

バスケット部（男子）

一、部員十五名程度。練習日・月・火・木・土。部の構成が一・二年なので他校のチームとのハンデキャップは多大なものであったが、チームワークがとれている点では、他部よりもすぐれていると思う。
二、春季大会、国体予選、支部大会は、いずれも二回戦で敗退、オープン戦は、十一勝九敗であった。
三、新一年生を迎えてチームを充実させ、東京都ベスト八をめざして大いに活躍したい。

バレー部（女子）

一、この部の特徴としては、良い先輩が多く、（コートにも、時折卒業生の姿が見受けられます。）又、常にファイトを心に持っていることです。
二、今年の春季リーグ戦では、四勝二敗の成績。その他国体や数々の都大会に参加致しております。
三、今後の発展の為に、新入生に期待を持ち、一人でも多くの入部を歓迎致します。

け、部員は各々自分の好きな班に入って活動して来ました。又全部員で、ウサギ・ニワトリ等の解剖実験、春夏は高尾山永川等に昆虫採集、夏季休暇には尾瀬へ見学旅行に行きました。
三、昨年、一昨年に劣らず研究内容を充実して行きたい。

美術部

一、部員三十名。自由油絵用具、石膏、他一切を備えている。
二、展示会では、合作の壁画に苦心したがかなり盛大にできた。
　○　都内油絵コンクールに、金賞一名、佳作一名入選。
　○　大潮会（都美術館）に三名入選。
三、定期的に展覧会を開き、一般からも募集、校内美化に努める。

物理部

一、部員十五名。毎週水土の練習日をフルに活用した。
二、エレクトロニウス、家庭受信機、インターホーン、ワイアレス・DX受信等の研究に熱心であり、展示会にも多数出品した。
三、常識としての電気知識を広めたい。入部を歓迎します。

文芸部

一、部員は、全生徒であると言っても過言ではないでしょう。
二、雑誌〃たわごと〃二・三・四号を発行。又、自分達の手で印刷

バレー部（男子）

一、部員は十二名。練習日は火・木・土の三時から五時迄。冬期はマラソンとバス練習に重点を置き、春から本来の練習に移す。小人数ではあるが、ファイトのある点では、本校随一であるし、コーチのいないのは隣の日大バレー部の見学によって補っている。試合での我部の特徴は速攻にあり、調子に乗った時は素晴しいプレーを転開する。
二、三十三年度の経過は、十三戦八勝五敗一引分け。世田谷公立高校に於ける順位は明正、千歳ケ丘に次いで第三位。
三、今年は先ず五月五日憲法大会を目指して突進し、大いに成果を挙げたいと思っている。

舞踊部

一、部員、十名位。
　毎週火曜日、舞踊家内田裕子先生の教授を受けている。
二、昨年の文化祭では、舞踊ファンタジィ「若きたましいの為に」をもって参加し、好評を博した。
三、部の希望としては、自由に使える練習場と多くの新部員を得たいということである。

野球部

発行した詩集〃渡し舟〃一・二号を読んで戴きました。これらの発行の後は、反省会を開いて、向上を計って来ました。
三、ますます全生徒と密接な関係のあるクラブにして行きたいと思います。尚、読書鑑賞会も持ちたいと考えております。

ユネスコ部

一、部員二十七名。部会週一回。共同募金運動・スライド会・郊外ピクニック・アメリカンスクール訪問・世界の風俗研究等。
二、夏休みには、「全日本ユネスコ高校生全国大会」に参加。展示会では、写真集「世界の子供達」「世界の風俗習慣」「中東の国々」等を公開した。
三、ユネスコ部は出来たばかりですが、大いに頑張るつもりです。

落語部

一、落語というものはただおかしければいいのだというだけではない。即ち、私達が共感を持つことの出来る永遠の人間性が描かれていなければならない。この人間性を、楽しく養う事が落語部の目的である。部員は十二名。
二、文化祭で四名が発表。他に発表会を校内で二回行なった。
三、色々な困難を乗り越え、豊かな人間性を養いたい。

レコード鑑賞部

一、レコードは大部分クラシックである。
二、鑑賞会は、前期に二回、後期には一ケ月二回の割合で行なった
三、よりよい情操を養っていきたい。

一、現在部員は一・二年生合わせて十六名。用具は一応揃っている。冬季には柔軟体操マラソン等をやり体をきたえる。
二、十二月の支部大会では準々決勝まで進んだ。
三、新一年生に「やろう」という気持をもって欲しいということ。今年は打撃力を強くしたい。

ラグビー部

一、部員、約二十名。
　橋本先生の熱心な指導のもとに、真面目に練習している。
二、昨年の成績は、六勝四敗二引分という結果で、十分な活躍とは云えなかった。
三、今年はグランド修理も完成したので、部員の募集に努め、部の陣容を強化し、かつ、練習に練習を積んで、新人戦を目標に、年頭より部員は猪突猛進の決意に燃えている。

ワンダーフォーゲル部

一、味気ない学校での生活から脱し、郊外の空気を吸い、又、見聞を広める為、未知の土地を尋ねるという目的をもって発足した。
二、まず奥高尾縦走を皮切りに深大寺、そして夏期には四泊五日の伊豆旅行を行ない、女子も仲々の健脚ぶりを発揮、秋には高原を渉歩し、元旦には御来光を拝みに……。
三、三年生が中心の現在、卒業後の事を思うと心細い。下級生の入部を大いに期待しています。

卒業生に一言

成田武雄

私が平常言っている事だけれども、急がず怠けず、人生はマラソンなりの哲学で進んでいただきたい。自分の義務を自覚して、マラソン流にまっしぐらに進むならば、必ず立派な人生のゴールに入ることが出来ると思います。

菅原真静

「初心不可忘」君たちはこんどこそこんどこそと思って来たはずだ。時々振り返って、初心に向っているかどうかをたしかめなさい。

坂本夏男

若人よ、心の中に進歩への熱情をもやせ。冷静に反省して、いかに知らないか又何を知らないかを明確に知ることが、進歩への第一歩だ。

宗像弘吉

時には「有頂天になっている自分・悲しんでいる自分・腹を立てている自分・憎んでいる自分」を静かに眺める余裕をもって下さい。

大島信六

明朗快活。どんな困難にもくじけず、常に希望に満ちて進んで下さい。幸多き事を祈ります。

長浜先義

Graduation means commencement（卒業とは開始・端緒を意味する。）

卒業とは業をおわると書くが実はこれからの本当の人生が始まるのだ。本当の勉強はこれからだという気持で、大いなる希望と理想を持って元気で人生航路へ出発される事を祈ってやまない。今後の自己の言動には全て自分で責任を持たねばならない。

玉置文子

目標を見定めたらしっかりそれに向って進んで下さい。雨にも風にもめげないで。

林亮

○ 常に自己の幸福を信じて雄しく目的に向って前進せられよ。

○ 明るく、清く、強く我が人生を尊く創造するこそ、若人の歎びである。

大和久鈴江

千よろずの心のはしを一言にさきくとばかり……

右の現代語訳——ただ一言「今後とも御幸福で」という言葉の中に千万無量の思いをこめて——ということ。

私の思いも正に右の通りです。

宗内照春

〃あげひばり、空いっぱいに鳴いてみよ〃私の気持はこの一語に尽きる。春秋に富み、希望に胸ふくらませた若人諸君！ 大空へ力いっぱい飛び、そしてはばたきなさい。アア、何れの日かまた。サラバ。

外川秀二

明るく、品を失わず。

岡野猛

私は、男子には〃人間の条件〃の主人公、梶のような人物になるでくれるよう、女の子には梶のような男を愛する人になってくれっよう、心から願って止まない。

梅野茂

在学中だけでなく、卒業後も学問に関心を持つ人であってほしい。

前田惟義

○ まなびやの庭のつるばら寒風に耐へて芽ぶきの春迎へたり

○ 常磐なる松を見上げてこの三とせ通ひて迎ふ今日の門出を

卒業おめでとう。今後も社会の各々の場で元気に活躍して下さい。

柿元醇

親友を持ち、大切に育てよ。

中平長治

卒業おめでとう。お元気で。

四宮満

ファイトを持って進もう。

臼杵良一

思うこと思いのままに進めかし
心にはづる事し無ければ

弓家田芳子

自分の生涯がもう一度やり直せたらと大変虫のよい、その実極めて悲惨な願いを私は持ちます。
そして私がやり直したいのは大体諸君の年代からです。

藤本純助

石井健吉

私は昨年甚だしく健康を害し勤めも休むし、諸君にも迷惑をかけたのであるが、未だに薄かながらそれがあとを引いて居り、健康を求める心は非常に痛切である。卒業に際して諸君の健康を祈ることは、甚だ平凡なわかり切った事だが、私は心をこめてそれを祈り度い。

三谷初子

いつまでもお元気で。

森善男

卒業生諸君おめでとう!!

三年の螢雪の功なり、ここに栄えある松原高校を巣立ち行く諸君よ! 諸君は本校で学んだ数々の教訓をしっかり守り、夫々進学に又就職に勇往猛進して欲しい。

今年は時恰も皇太子御成婚の輝かしき年でもあり諸君の卒業はそれと共に一生忘れ得ぬ記念すべき年となろう。

最後に諸君の洋々たる前途を祝福し、ここに一言はなむけの言葉とす。

楽しみは我が教え子の世にいでて晴れて成人せしを見し時

橋本雄司

身体こそ最大の財産なり。

充分気をつけて元気でやって下さい。

松下富喜子

大地にしっかりと足をつけて、自分の道は自分で考えて、幸福を築いて下さい。

七転び 八起き

健康にお過し下さい。

佐藤竹次

地の果てに太郎と次郎は生きていた。生命の叡智と訓練の尊さを思う。

高田俊文

卒業おめでとう。三年間の功績空しからずここに栄ある佳き日を迎えて感激一しおと思います。この感激を忘れず今後の生活に取り入れ、有意義な人生を送って呉れ給え。

佐藤登志

卒業しても健康診断をお忘れなく。

小山恒雄

〃天は自ら助くるものを助く〃とは分らないが、〃自ら助けようとしないものは助かる筈がない〃

川股秀一

「与えられた機会を逸するな。それに備えて努力せよ。」

関恵

真実なものが我々を押し進める。虚偽は何物をも望まぬ。虚偽はただ我々を惑わすだけである。

希望

新入生の皆さん、入学おめでとう。

さあ、今日から、高校生です。都立松原高校の生徒です。

あなた方の前途には、すでに半分以上も決定されている三年間の生活が待っているのです。松原高校という団体の中でそこに定められた規律を守りながら生活してゆかねばなりません。

ちょっと中学時代を振り返ってみて下さい。あなた方は中学生の時学校で定められた規律の中で、どのように自分自身の個性を生かしてきましたか?

それを十分に生かしてきた人も、又、残念ながら生かしきれずに中学をおえた人も、一様に、こんなことをお考えではないでしょうか。『よし、今度こそ』と。

何か知らぬが、内にこもる闘志で、じっとしていることが出来ないようなことが、合格発表の日から今日までの間に何度もあったのではないかと思います。

あなた方のその希望を、今の在校生も、そして、すでにこの学校を卒業した人達も、みな一度は抱いたものなのです。私が、このように断言するのは、それなりの根拠があるのです。去る一月、この「る・くーる」に所載する予定で、〃松原高校での生活〃という題で座談会を開いたことがありました。出席者は男女十名程で、私がその司会を命ぜられました。二時間以上もかかったのですが、そこにありありと、前述の希望に胸ふくらまして入学した様がうかがわれたのです。入学したばかりのあなた方に、出来るならば言いたくないことですが、言わねばなりません。というのは、それら、かつての新入生の期待は、殆ど裏切られているのです。一体、どのような期待が、どんな理由が裏切られたのでしょう。私はこのような判断を下しました。

つまり、その希望・期待なるものの正体が、あまりにも漠然としたものだったからです。具体的なものが、何もなかったからなのです。例えば、前記の座談会の時の会話の中にもありました。それは校舎の外観や上級生の親切な態度が、大きな希望を抱かせる原因になったという例です。それも、生活に慣れるに従って、不感症になって来るのです。それでもなお、自分の期待する具体的なものがみつかりません。本人が、何を期待するかわからないのですから、無理もありません。

要は、自分の希望・期待を、他人の中に求めてはならないということです。自分自身の個性を伸ばし、自分自身を満足させることのできる〃何物〃かを松原高校の生活の中に求めることが必要でしょう。

先の座談会で、三年生の出席者が、クラブ活動の中に自分を見つけたと言ったことは、新入生の皆さんに何かを教えていてくれると思います。

その座談会は、紙面の都合上、どうしても載せることは出来ませんでしたが、ここに、この会での意味する最も重要なところを記してみました。

(発行委員・渡部)

編集後記

純文芸誌として発行されてきた「る・くーる」も、回を重ねること七回、ここに、ようやく、第七号の編集を終えました。

純文芸誌という名目がありながら、例年のしきたり通り、卒業生の門出を祝う雑誌でもあるのです。ですから、そこには、全生徒を代表する思想や、先生方の言葉も、一通りは載せなければなりません。

しかし、本来の純文芸誌とのたてまえを忘れることは出来ません。そこで、我々は、卒業生へは、先生方のお言葉や下級生からのはなむけの文、新入生へは、クラブ紹介等、多方面に渡って掲載する一方、詩、創作、随想に多くのページをさくように努力してきました。その為、これまでの「る・くーる」になく、量的にみて優れたものになりました。内容の優劣を言うことは、我々発行委員には許されないでしょう。が、しかし、十二分に内容の充実を計ってきたということだけは言えると思います。

原稿を選択する際、高校生らしい考えが述べられている作品を採ろうと、心を砕いて参りました。紙面の関係上、創作四編をはじめとして、多数の作品を載せられなかったことが残念です。

我々発行委員は、この「る・くーる」が、卒業生にとって楽しい想い出をよびおこすものになってくれるよう、新入生にとっては一段と希望を抱かせるものになってくれるよう、祈ってやみません。

最後に編集に協力して下さった諸先生方と多数の生徒の皆さんに厚くお礼をのべて、ペンを置きたいと思います。

発行委員

一年　福岡　幸子　鈴木　玲子　和田　征子　犬飼　治　林　くるみ

二年　渡辺　静枝　村西　一郎　高橋　正美　林　弘子　吉良美恵子

三年　岸本　宏　渡部　斉　吉川　幸男　田中　春美

〃る・くーる〃　第七号

昭和三十四年三月一日　印刷
昭和三十四年三月九日　発行

発行所　東京都世田谷区上北沢町一丁目
都立松原高等学校生徒会

印刷所　世田谷区松原町四ノ二四
有限会社　山下印刷
TEL（32）七九一四